

靈毒と共に歩む者

Klotho

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は蠟毒である。しかし、孤独ではなくなつていた▼家族と別れ、親しい友人と再会し、少女は再び歩む事を決意した▼これは人を捨てた少女が妖怪として生きていくだけの物語、その続きである。

※前作、孤独と共に歩む者の続きとなつております。出来る限り今作のみでも理解出来るよう追記はしていきますが、更なる理解を求める方は前作からご覧下さい。

目 次

『蠱毒』	1
『ひよりと靈夢』	
『ひよりと未来』	
『日常的な非日常』	
『永遠の変化』	
『表と裏、外と内』	
『生殺与奪』	
『一步前へ』	
『地の底に華ありて』	
『ただいまといつてきます』	
『目に見えぬ約定』	

183 166 145 123 111 96 77 59 36 19 1

『蠱毒』

◇

光があつた。

「……」

ふと気が付くと、足元には一本の道があつた。
刹那の間か、一日か、一年か、一万年なのか。気が狂う程長く、気を遣る暇もなく歩き続けていたような気がする。自分が生きていた五百年がまるで長く、恐らくは竹林に住むあの二人が過ぎてきただ時間よりも短い時間。そんな不可思議な感触のまま歩いていたら何時の間にか辿り着いてしまつた。かつて背後に道の終わりを背にした時とは違う。今度は果てしなく、少なくとも今は果てしなく続く道が何処までも続いている。

その延長線上に、眩く光る光があつた。

「……」

手を伸ばしかけ、既の所で止める。

——怖かった。

あれだけの大見得を切つたのに、いざ直面してみるとどうしても怖かつた。何となく分かる、この光に触れた私が目覚めてしまうのが怖かつた。もし目覚めたとして、その時本当に違う世界になつていたらどうしようと、そんな考えが頭を過ぎるのだ。

私の知つている何もかもが無くなつてしまつていたら?
姿だけでなく、その伝承や史実すらも存在しないなんてこともある。

それに——

少なくとも、もう彌里は生きていなかつた。

「……そつか」

ポツリと呟く。

誰に向けた物でもない、自分に言い聞かせるような言葉。

「私が行かなきや」

彼女の願いすらも叶えてあげることが出来ないのだから。

誰に聞いた訳でもないが、多分彌里ならそう願うだろう。それを願い、最後には微笑みを携えて逝った筈だ。こんなどうしようもない親の為に——血の繋がりすら持たない唯の妖怪の為に、彼女はきっと最後の最後まで思いを馳せてくれていたに違いない。

『どうか、お幸せに』

声が聞こえた気がした。

紅の館に住む吸血鬼はその翼を精一杯に広げた。

興奮。

優雅に紅茶を嗜んでいた数秒前とは一転、背後に佇んでいた従者が困惑するのも構わず窓辺に立ち夜空を見上げる。真上には相変わらずの美しい満月。全ての魑魅魍魎に等しく妖しい力を降り注ぐ筈のそれが、今日は何故かただ一人の為に降り注いでいるようだった。傲慢な吸血鬼はそれでもその対象が自身ではない事に気が付いていた。自分ではなく、もつと別の何か。それこそ、この吸血鬼が未だ知り得ないこの幻想郷の一

そして彼女は垣間見る。

「……良いわね、悪くない。本当にこの場所は退屈しない。本当に鬱屈しないわ」

全てをかき混ぜて一度リセットしたような混沌。

今まで明確だった運命が全て搔き消されて、代わりに眼前に用意されたのは先の見えない阿弥陀籤。一体どれ程の害悪が、本来収まるべきだった物をここまで『変えて』しまったのだろう。一体どれ程の数の命が、たつた一つの存在によつて曲げられたのだろうか。
「これが余波だと言うのなら、その源流はどの位素敵なのかしら」
どう転ぶかは分からぬ。何が出るかも分からぬ。

運命を覗くことの出来る吸血鬼の少女は、その混沌とした未来に翼を震わせた。

「準備をしなさい咲夜。私達も一枚噛むわよ」
レミリア・スカーレットは、その瞳に何処までも純粹な好奇心を携えて。

死と生を繋ぐ境目で、一度死んだ筈の少女は巨大な桜を見上げていた。

「……」

かつて自身が起こした異変。

幻想郷中の春を奪い、今までしてこの桜を咲かせようとした理由。純粹な興味だったのか、それとも唯の醉狂だったのか。自分でもよく分からぬ内に起こしてしまい、結局何も分からぬまま解決された事件。紫に説教をされて、暫くの間藍から厳しい監視を受け、それでも未だに私は諦めていなかつた。

この桜の封印を解けば、西行寺幽々子という存在が望んでいる記憶を取り戻せるのだから。

「――でも、その必要はなくなつた」

けれど、一度死んで死に返つた少女は気付いていた。

つい先ほど自身と同じように死にながらも戻ってきた存在がいる、と。

その漠然とした直感が、それだけで自身の欲求を満たしてしまったことを。

「うふふ、楽しみねえ」

それはつまり、そういうことなのだろう。

「幽々子様！」

銀の髪、二振りの刀、半纏。

背後から近付いてきたこの子はとてもよく似ている。仮面でもつけさせて斬りかかるせてみれば、きっと面白い反応が見れるに違いない

い。

彼女の驚いた顔は、結局見ることが出来なかつたから――

「紫が来ているんでしょう? 当然、参加すると伝えて置いて頂戴」

西行寺幽々子は遙か昔の思い出を懐かしむように微笑んだ。

かつて妖の親と人の子が共に暮らしていた神社。

「いやはや、今の人里には全く驚いたよ。私を見ても全然動搖しないんだからさ」

「アンタの身長がもう少し高ければ違つたかもね」

昔を懐かしむ鬼に言葉を返したのは紅白の巫女。

何の因果でこうなつたのやら、まさか自分が此処に住む事になるとは思つてもみなかつた。気まぐれで起こした異変の時も出来る限り此処には近付かないようにと心がけていたのに。しかもその理由が紫の差し金でも私の気まぐれでもなく、この神社を代々引き継いでいる巫女の勧誘なのだから更に笑えない。そんな少し手前の過去も振り返りつつ、昔から使つてている朱塗りの杯を傾ける。この味すら、奇しくも当時飲んでいた酒と良く似ているような気がした。

それこそ『運命』のめぐり合わせでもなきや、こんな事には――
こんな事には――

「――おいおい」

口から漏れ出たのは驚愕と回顧の入り混じつた声。

博麗神社に向かつて、数千の極小さな妖力が近付いてくる気配。

「萃香? どうしたのよ?」

「ん……ああ、そうか。靈夢はこの感覚が分からぬのか」

酔つ払いの感覚なんて知らないわよ、と今代の博麗の巫女は呟く。
忘れるはずもない、この奇妙で独特な彼女特有の妖力。見るからに小さく見るからに弱い、普通の人妖ならば全く脅威にもならない程度の力。

だからきっと、知つてゐる者と見えてゐる者以外は気付かない。
まるでありありと魅せつけてゐるようだつた。

「偶然か、紫か……それともなるべくしてこうなったのか」

演出としては紫のような意地の悪さを感じるが、しかしこのタイミングは唐突過ぎる。

だからこそ、きっと紫も驚いているに違いない。

「いいねえ、久し振りに良い酒が飲めそうだ」

この場所に再び立つた彼女が何を想うのか。

少なくとも良い思い出や楽しい出来事だけではないだろう。身を斬られるような苦痛と、それとは別の悲しみもあるだろう。誰もが予想していく彼女自身が自覚していたとしても、それはあまりにも現実的で過酷な想像だった。これからあるだろう新しい出会い。既に終わってしまった誰かとの別れ。醉狂とはいえ私が鬼を地上に戻そうとしたように、彼女がそれを本気で起こそうとしなければ良いが——大丈夫。彼女ならば、きっと。

「ちよつと、さつきから何呑いてるのよ」

「いやね、霊夢は随分ズボラな性格だと思つてさ」

カツンと一度、少女の拳から脳天に軽く振動を貰つて。

伊吹萃香は心地酔い感覚に身を任せた。

そこは今も昔も全く変わることのない永遠の亭。

しかしそこに住む者はほんの少しだけ変わり、随分前に一人家族が離れていくつ、つい最近新しい家族が一人住む事になつた。勿論前者の方はとても大切に思つていて、今でも戻つて来て欲しいと思つている。けれど後者の方の家族であるイナバ鈴仙によつてもたらされた情報によつて、その家族を待つ事が出来なくなる可能性が出て來た。

満月の夜、月からの迎え。その真の目的は輝夜姫と八意永琳の確保。

「ねえ、永琳」

「何でしよう」

呼ぶつもりで呼んだ訳ではない。ただ、ふと口をついて出てしまつた名前。

頭では考えず、心に任せてみる。

「ひよりが封印されてから一千年。私にしては頑張った方だと思わない？」

あの日から大体その位の経過。月に居た頃には然程長くも感じなかつた年月は、驚くほど冗長で単調で退屈に感じられた。それは月に居た頃の退屈とは比べ物にならないほど耐え難く、しかもその解決方法は彼女自身によつて止められてしまつてしているのだから。私が今こうして此処に立ち、ただ彼女の帰りを待ち続いている理由なんて最早それしかないと言つてもいい程に。だから待つた。一千年も待つた。自分でも驚くくらい我慢した。

「ええ、そうですね」

「そしてその苦労は報われた。分かるのよ永琳、私には。きっと貴女には理解出来ないでしようけど、私には分かる。この年、この月、来週の満月を以つてして、私の退屈は終わりを迎えるの」

永琳の目がなければ、自身の身を抱きしめて叫びたい気分だ。

誰かの口から聞いた言葉ではなく、ただ己の直感による確信。頭で考えるのではなく、心で感じたまま口に出した結果。——何処にも根拠はないが、きっと本當になる。私が蓬莱山輝夜で、彼女がひよりである限り。

私達は一度も嘘を吐いたことがないのだから。

「……成る程、言靈の力ですか。嘘を吐かないという思い込みにも近い力を利用して、ひよりさんが復活するという事象を本当の事にするつもりなのですね」

優秀な従者であり師でもある彼女は冷静に私の意図を見抜いた。しかしそれでも変わらない。確信が核心である限り、私の発言もまた発現される。

そう信じているのだ。

「だから帰る訳にはいかない。私も永琳も鈴仙も此処から離れることはないわ。てゐと別れることもないし、ひよりと再会出来なくはならない」

「その発言は——」

「永琳が実現してくれるんでしょう?」

背後から溜息。私は口角を吊り上げた。

私はまた永琳も信頼している。彼女ならばきっとそれを可能にしてみせるだろう。

——そう、頃合なのだ。

「永琳、貴女の言う言霊なんだけどね」

「……」

「多分、言つても言わなくても同じことよ」

同じ。ひよりは復活するし、月からの使者は来ないという事。

てゐから聞いた外の情報……紅い霧が幻想郷中を覆う異変や、春を奪い冬だけにして見せた異変、多くの人妖を一箇所に集めて宴を開かせていた妖怪の話を聞いて確信した。外で動いている——恐らくは八雲紫とその仲間達はもう既に動き出している。変化の概念を――『異なつた変化』の概念を『異変』として、そもそも変化という事象自体を刷り換えるという大胆な作戦。故にこれだけ時間がかかり、だから実現出来るのだ。

だつたら、もういい頃だろう。

「このタイミングを逃して寝てる程ひよりは鈍くないわ」

蓬莱山輝夜は知りもしない真実を瞳に映しながら。

7

バキン

壊れる音を聞いた。

「……」

鎖の壊れる音だった。

今まで自身を縛っていた鎖が——右腕が、左腕に、右足の、左足まで、自分の到る所に繋がれていた、自分が至らなかつた部分を明示し続けていた鎖がバラバラに碎け散るのを理解した。

後悔が

懺悔が

自責が

罪悪感が

それら全てがなくなつて

ギイイと、古い扉の開く音。

それが間違いのない事実だと気付いたのは、息巻いた藍が部屋に入つてくる音。

彼女の話では、曰く何の予兆も変化もなく扉が開いたらしい。誰に触られる訳でもなく、蠱毒に開かれる訳でもなく独りでにゅつくりと。そしてその中から出て来た彼女の姿を確認した所で、藍は慌てて私の元へ来た、ということだ。

スキマは開かない。私だけが彼女の姿を見るような狡い真似はない。

「あの子は今どうしているのかしら？」

「今の所は集合を呼びかけているだけです。恐らくは情報を集めているものかと」

私の問いかけに答えたのはかれこれ一千年前の付き合いになる従者、藍。

どんな時でも無愛想な従者を演じている彼女ですら、今日だけは口元に笑みを浮かべていた。恐らくは懐かしみ、懐かしむ心を喜び、そしてこれからのお会いに心を躍らせているのだろう。無理もない。私もこんな立場でなければ——ひよりを封印する手筈を整え、そこから生み出した利で幻想郷を管理している妖怪なんて肩書きが無ければ、多分同じ顔をしていた筈だ。

だから私は笑わない。ひよりと話すまでは、笑えない。

「さて、ひよりが出て来た事で何か動き出した所はあるかしら……」

「いえ、私の見た限りでは特に何も。ただ、気付いた気付かないで言うのならば彼女と縁のある妖怪は殆ど気付いていると思いますよ。それと理由は分かりませんが、風見幽香も気付いているようです」

「えつ」

思わず振り返る。肩を竦めて困ったという表情を浮かべる藍。

「お忘れですか？紫様は一度、ひよりに風見幽香の説得を依頼したじゃないですか」

「も、勿論覚えてるけどっ！あれは冗談で……」

「ジ自身の口で説明なさつて下さい」

自業自得だと、そう言いたいらしい。

想像。たつた一度の攻防とはいえ敗れた相手の復活を確信した時の風見幽香。

……。

「ねえ、藍」

「知りませんよ。この事で直接神社に来られる方が厄介だと思いますけど」

「それもその通りなのだが。いや、しかし——
しかし……」

「……まあ、これくらいで済むなら安い方かしらね」

結局は諦める。ひよりがいきなり現れたりスクとしては、それでもマシな方だ。

一番恐れていたレミリアスカーレットとの敵対や、ひよりと縁のある妖怪の山が混乱している様子も今の所はない。彼女の帰りを待つ者が居る地底には萃香が知らせに行つている頃だろうし、するとやはり私のすべき事はそれしか残つていなかつた。

改めて、私は今まで支えてくれた従者を見る。

「ねえ、藍」

「何でしようか」

「今までありがとう」

浮かべていた笑みがフツと消えて、何時もの無表情——ではなく驚愕に。

私はそんな藍を見て苦笑し、再び背を向けてスキマ越しに幻想郷を眺め始める。

彼女が口を開いたのはその直後だつた。

「……私だつて当事者の一人です。背負うべき業は、本来なら紫様と同じかそれ以上でなくてはなりません。——幽々子も、萃香も、そし

て彌里も。皆それぞれ別々の言葉で同じようにそう言つていた

「――

「だからその言葉にはまだ答えるぞ。お前が幽々子や萃香に感謝し、彌里に謝り、そしてひよりと抱き合つたその後になら聞いてやる。それまでは、私も無理に笑えとは言わないさ」

「……抱き合わなきや駄目かしら?」

「まあ、そこは紫様に任せんよ。どうしてくれても構わない」

口ではそんな事を言いつつ、けれど否定は出来ない。

今度は藍がそんな私を見て苦笑し、そして立ち上がるのを感じた。

「まあ、何はともあれこれで清算も殆ど終わりだ。そうしたらお前主催で宴会でも開けば良いんじゃないか。紹介してやりたい奴も何人か居るんだろう?」

私は少しひよりの観察してくる、と藍は部屋を出て行く。

「勿論、貴女も来てくれるのよね?」

「誘うのは勝手だが、従者面を期待するなよ」

「ええ、楽しみにしてるわ」

スルリと障子が閉じられ、部屋に居るのは私一人になつた。

「――

かつて藤原妹紅に指摘された通り、私は何処か人と線を引いている節があつた。

そしてそれは稗田阿求に指摘された今でも変わつていない。多分、ひよりがそうだつたような人と妖故の別れを恐れていたのかもしれない。自分よりも先に死んでしまう事が分かつてゐる者と付き合い、笑い、泣くというのは、想像以上に難しいのだ。――けれど、それは逆の立場に立つ人間にも言えることなのだと私は気付いた。ひよりだけでなく、彌里も同じように想つていたことに気付かされた。だからもし、彼女が今も笑つていられるのなら。

「私はもう逃げない」

スキマは直接彼女の目の前へと繋がつてゐる。

◇

匂いが酷い。

兎に角酷い。臭いという訳ではなく、久し振りの使役に情報が入り過ぎて いる感覚。草の匂い、土の匂い、風が運んでくる遠くの匂い、虫の、小動物の、傍に生えている草の——もう何が何だか分からない。けれど視覚だけはハツキリしているので、私は周囲を見回して様々な物を確認していく。生えているのは植物、地面にあるのは地面、風は自然現象、昆虫、哺乳類、菌類……どうやら頭の方は正常のようだ。

私は鼻を軽く押さえて空を見上げる。

「……変わらない、か」

どの位の年月が経ったのか、それは分からない。

けれど何時だつて月だけはいつもこうして空に浮かんでいた。顔を下に戻す。

「ん」

自分の出て来た社の階段に小さな紫の花と朱塗りの杯が置いてある。

少し迷った挙句、私はそれらを回収して帯の背中へと差し込んだ。差出人が分かつて いる以上、これらは直接私が返してあげるのが道理という物だろう。そう結論を出した所で、私は自身の居る場所に向かつて近付いてくる懐かしい『それ』を感じ取つた。

ザワリと一度、風が誰も居ない周囲を吹きぬける。

「おいで」

その言葉を皮切りにウオンという唸りにも近い音を立てて勢いよく私の中へと戻つていく私達。

最後にこうして皆を集めたのは何時だつたか——凡そ九百五十年前。

そういえば、此処は——博麗神社の片隅、森の中。

あの日から、皆は……浮かばないという事は、自身で確認しろといふ事か。

まあ、とりあえず。

「一人確認」

開いたスキマ、出て来た彼女もまた変わる事なく。

変わつていいない。

まるで変わつていいない。黒い髪、黒い瞳、黒い衣——頭についていた髪飾りがないのは自身の娘にそれを託した証。私の視線に気付いたらしい彼女は、自身の側頭部に軽く手を当てて確認。

ほんの少しだけ困ったように笑つた。

笑つた。

「やっぱ、ないと寂しいね」

「……今でも充分可愛いと思うけど、まあ、そうねえ」
それに気付いていない訳ではないだろう。

蠱毒達を回収し終えた今だというのならば、尚更。

「それで、身体に異常はないのかしら?」

「ん、特には。出た瞬間は匂いと光でビッククリしたけど」

両手を動かし、数歩歩き、ひよりは全身を確認しながらそう呟く。
その様子を黙つて眺めていると、彼女はその手の内片方を背中に伸ば
したままの姿勢で停止した。

彼女はそれを私の前に差し出す。

紫の花。

「ありがと」

「……」

「偶々置いといてくれた……って訳じゃないんでしょ。何となくだけ
ど、紫なら」

だからこれが私からの感謝の印、と彼女は私の前に掲げる。
感謝される筋合いなど、何も――

「本当に?」

「……」

「ありがとう、彌里の面倒を見ててくれて。ありがとう、ぬえ達の事を気にかけてくれて。ありがとう、幻想郷を実現させてくれて。ありがとう、紫が紫のままで居てくれて。――本当は、少しだけ不安だつた。
彌里の事も、ぬえ達の事も、幻想郷の事も、紫の事も、ね……。無く

なるべき物があつたらどうしよう、有つて欲しかつた物がなかつたらどうしようつて、そんな風に考えて

「ほんの少しだけ、戻つてくるのが怖かつた。だから――」

ありがとう、私のことを待つていてくれて

「――つ！」

「……苦しいよ」

溢れ出た涙が彼女に見えないように。そうして頭上から聞こえて来たのは苦笑交じりの声。

怒つていると思つていた。長い年月の末、ひよりと彌里の繫がりを引き裂いた私を恨んでいると思つた。自分が間違つた判断を下したとは思つていない——けれど、正しい選択をしたとは言い切れない。本当ならもつと別のやり方もあつたのではないかと、そう考えて過ごしてきた。

それらの全てを搔き消すように、ひよりは黙つて私の頭を抱く。

『誰かの犠牲の上に立つのなら、それは私の求めてる理想ではない』

「……、うんつ」

それは彼女と手を取り合つた妖怪の山で聞いた言葉。

ひよりが数ヶ月の間過ごした命蓮寺という寺の、人妖に平等を求める僧侶が残した言葉。

「でも、そんな風に都合の良い事ばかりじゃない。人も妖怪も、生物は生きているだけで他の何かを奪い続ける。聖ですらも、ね。――だから、それを背負つた上で共に生きていくのなら、それは『共存』なんだと思う」

私の頭に回されていた手が不意に私の顔を持ち上げる。

深い闇を刻み込んだ彼女の瞳は、それでも綺麗な光を燈して――

「此処は素敵な場所だね」

「……ええ、そうでしょう?……苦労したのよ、色々と」

「お疲れ様」

手。

差し伸べられた小さな手を掴み、私は立ち上がった。

何時の間にか涙は止まり、代わりに先ほどまで彼女に泣きついていた時の不恰好な姿が頭を過ぎる。何もかもが恐らくはあるの従者、八雲藍の企て通りなのだろう。今もし彼女がスキマでこの光景を覗いていたのならば、私もこうはならなかつただろうから。

自らの従者ながら、自らの友人ながら未恐ろしいというか。

……信頼出来る、とも。

「これから私はどうすれば良い?」

「そうねえ、予定では博麗神社に住んでもらうつもりだつたのだけれども……」

夜空を見上げる。月がそろそろ沈もうかという時間。

この時間に神社へ押しかけてひよりの寝る場所を確保するのも大変だろう。あの巫女が起き出して攻撃してくるとも限らない。だからとりあえず今日は私の家に泊めて、それから神社へ行つて靈夢に説明するのが妥当か。——決して泊まつて欲しいと思つてゐる訳ではない。確かに、彼女とは久し振りに話をしたいこともあるのだけれども。

それに、この機会にしたい事も一つある。

「時間も遅いし私の家に来て頂戴。私もそうだけど藍も話をしたいと思うし、それに——」

『折角だから少し面白い事もしちゃいましょう』

顔に出てるよと、そう言つて少女は呆れたように肩を竦める。

そう言つて慌てて顔に手を当てる……何時の間にか、意地の悪い笑みを浮かべていたようだ。

久し振りに、笑みを。

「ねえ、ひより」

「なに?」

スキマを開く。行き先は懐かしき我が家。

ひよりは暫く私の方を見つめていたが、私が何も言わないのを確認してスキマへと歩き始める。

その背中が、昔から変わつていなうその背中がスキマへと消えていく直前に――

「ありがとう。そしてようこそ、幻想郷へ」

「どういたしまして。それと、これからもよろしく」

スキマの中へと消えていった彼女。

そのスキマの手前で立つていた鼠が意地悪い笑みを浮かべてそう答えた。



幻想郷と現世を隔てる大結界の管理人、博麗の巫女。

肩書きだけ聞けば随分と堅苦しく大変そうな役割だと、そう思う者も居るかもしねれない。

「……暇ね」

「ああ、暇だぜ」

しかし実際はそこまで大変な事は何もない。

朝起きて、軽く身体を拭いて晒を巻き、数少ない食料から一日の站立を考えて朝食を作る。食べて、食後のお茶を沸かして、そうしていの内にやつてくる白黒の魔法使いと一緒に縁側に座り、こうしてただ駄弁つっているだけ。これはこれで大変だと言う人も居るだろうが、しかし私はそこまで嫌いではない。こうして意味もなく時間を潰してダラダラすることこそが、私の趣味であり私の好きな事だからだ。

「レミリアの起こした異変からもう一年とちよい、あの亡靈が起こした異変から五ヶ月、お前ん所の居候が起こした異変から早二ヶ月……段々頻度が上がつて來てるし、そろそろ何か大きな事が起きてもいい頃だと思うんだ私は」

「あの馬鹿が起こした異変からまだ一年、その馬鹿が起こした異変から未だ五ヶ月、うちの馬鹿が起こした異変からは二ヶ月しか経つてないんだからもつと平穩でも構わなくらいよ」

「具体的にはどれ位だ?」

「そうね、五十年くらい安泰なら良いかしら」

そん時は私等の子供が解決するのかー?と、霧雨魔理沙は尚もやる気なくそう呟く。

今の遣り取りでも分かるように、私こと博麗靈夢と霧雨魔理沙は一枚岩という訳ではない。不本意ながら幾つもの異変を二人で解決してきたが、その動機は互いに異なり行動すら異なっている。逆に言えばそれ故に噛みあつてているという事か。

隣に寝転ぶ魔理沙の横顔を眺め、次第に空へ視線を映す。

「でも、厄介事は決まって向こうからやつてくる物だぜ」

再び隣を見る。彼女は私ではなく縁側の向こう……中庭に視線を向けていた。

私も同じように視線を追う。

「……げ」

「あら、随分な反応ね靈夢。それと魔理沙、お早う」

「お早うだけどな、紫が来なかつたら私達はこのまま寝て次の挨拶はこんばんはだつたぜ」

全くしようがない子達ね、そう言つて肩を竦める紫妖怪。

名前は八雲紫。肩書きは妖怪の賢者、幻想郷の管理人。一般には博麗の巫女と共に幻想郷と現世を隔てる博麗大結界を管理している妖怪という事で知れ渡つていて。一部の者には、胡散臭い態度とよく分からぬ言動で計画を邪魔してくる厄介者という真実が伝えられているのだ。実際私や魔理沙も含めて、何人かがこの妖怪に面倒ごとを押し付けられている。

そして名目上は私の保護者と本人は語つていた。
彼女の視線が私を捉える。

「……」

「靈夢、寝たふりをしていないでよく聞いて頂戴。今日は別に修行をしろだの何だのと言いに来た訳じゃないのよ」

「なんだ、そうだつたの」

「……お前何時か紫に騙される日が来るぜ」

冷ややかな視線を送つてくる魔法使いを無視して紫と向き合う。

彼女が持つてくるのは食料か面倒事。その両手に何もないという事は、やはり後者という事か。そしてその用件というのはどうやら深刻な問題らしい。……流石にこの姿勢で聞くわけにもいかないので仕方なく身体を起こした。

隣の魔理沙も慌てて体を起こす。

紫はそんな私達を一瞥してから口を開いた。

「……ある妖怪を退治して欲しいのよ」

その瞳は、真剣味と深刻さを携えて。



「ひよりつて奴、知つてるかしら」

「」

バサリと彼女の持つていた本が地面へと落ちる。

あらゆる書物を自身の命と同じくらい大切に考えている彼女からはとても考えられない反応だつた。——私は慌てて落下途中の本を掴み、そして驚愕に目を見開いている彼女の手に無理矢理乗せる。この反応からして知つてている事に間違いはないが、やはり唯者ではないらしい。私は本を手に乗せただけ彼女の両手を軽く握り、そうして視線を交錯させた。

何処か遠くへと行つていた視線は、それだけで此方側に戻つてくる。

「……知つているのね、阿求？」

「え、ええ、まあ……はい、一応」

「教えて頂戴」

今度こそ阿求は困り果てた様子だつた。

誰かに口止めされているのか、それとも言えない理由があるのか。けれど此方も退く訳にはいかない。

「そいつの情報が欲しいのよ。どんな些細なことでも良いし、話せる範囲で良いわ」

「……口止めされている訳ではありません。ただ、事情によつては話して良い事と話せない事があるんです。その、幻想郷縁起にもまだ書

いていない事なので——

その言葉を上書きするように言葉を重ねる。

「紫からの依頼でそいつを退治するのよ」

バサリと

今度こそ本は地面へと落ちた。私はそれを拾う暇さえ無かつた。

阿求の両手は、私の肩をしつかりと掴んでいて。

「れ、靈夢さん、よく聞いて下さい」

「な、何よ」

普段からは想像出来ない程怯えた声。緊張と、困惑の混じつた表情。

阿求は私の質問に答えた。

「初代博麗の巫女の母親にして、博麗神社の創設者——それが、ひよりさんです」

『ひよりと靈夢』

自分の生まれについて考えたことはあるだろうか？

それは例えば人里でいう所の団子屋や花屋が、つまりどの程度昔から存在していたのかという話。もしかしたら親が店を構えたのかもしれないし、逆に稗田家のように代を継がせるほど長い間続いてきた仕事なのかもしれない。少なくとも子供にはその跡を継がせたいだろから、仕事の仕方とその役割の起源くらいは話したりするのではないだろうか。それは稗田家に留まらず、友人である白黒魔法使いや古道具屋の店主にも言えることである。

と、此処まで話してみた所で私——博麗靈夢の生まれとは何なのだろうか。

よく分からぬ。

◇

「……」

いや、何も分からぬんですけど。

場所は変わつて私の自室。あの後何とか平静を取り戻し、内から沸々と湧き上がる疑問を抑えつつ戻つて来たのが此処だつた。とはいっても、その話を聞かされた時点で先日纏めたばかりの『彼女』についての資料はしっかりと持つて来てはいるのだが。ちなみにそれは今私の前にある机、若干私寄りの場所に置いてある。

その更に奥——机の反対側にいる紅白の巫女と挟む形で。

「もう一度話を整理させて貰いましょう」

「……」

机に置いた資料に軽く手を置き、私は彼女の表情を窺いつつ言葉を続ける。

「……昨日紫さんが靈夢さんの所に訪れて、その際に妖怪退治の依頼をした、と。此処までは合つてますか？」

「そうよ」

「それで、靈夢さんはその妖怪を全く知らないので此処まで調べに来た、と……？」

「ええ」

「……さて、一体どの部分から手をつけ始めれば良いのやら。

とりあえずは靈夢から聞き出すべき情報と与えるべき情報を整理していく。八雲紫の依頼、退治、ひより、創始者を知らない博麗、稗田家を訪れた靈夢——千年前の封印の真相、初代博麗とひよりの関係、八雲紫とひよりの間柄、ひよりの実力、博麗の巫女について……。考えて迷う。導き出した結論から、選択する。

これは――

これは、どつちだ？

「……まず稗田家としての回答を。靈夢さんの仕事の為に情報を提供する、という点については全面的に協力します」

「そ、ありがと。それで見返りは何が良いのかしら？」

ちらりとも此方を見ないまま意図を射抜く靈夢。流石に勘が鋭いと言われるだけの事はある。

私は黙っていた後半の部分について切り出した。

「見返りという訳ではないのですが、紫さんから説明された依頼について詳しく教えて下さい」

そう言うと、彼女はこの部屋に来て初めて私と視線を合わせた。訝しむような、意図が分からぬといつた感じの視線。それもその筈、靈夢はこの情報が二週間前に編纂された物という事を知らないのだ。更にその情報の提供者が八雲紫を初めとする幻想郷の主軸達であることも、恐らくはまだ――

だからなのだろう、靈夢は然程考える素振りもせずに肩を竦めた。

「……ま、良いわ。別に減るものでもないし、長い話でもないから」

「助かります――あ、ちょっと待って下さい！一応記録しますので！」

といつても、袖口から手帳と万年筆を取り出すだけなのだが。

私はそれらを机に広げ、手帳の新たなページを開き、そして筆を湿らせる。

もうこの時点で何となく、新たな歴史を編纂する必要があることは分かつっていた。

『ある妖怪を退治して欲しいのよ』

この発言に興味を持っていたのは、どちらかと言えば私より魔理沙の方だった。

「妖怪退治つて、つまりあれか？里とかを困らせてる奴を退治するつて奴だろ？」

「そういう事、魔理沙は物分かりが良いから助かるわね」

いや、別に大して思考が必要な話でもないと思うのだが。

それはどうやら魔理沙も同じ意見だつたようで肩透かしを食らつたような微妙な顔で此方を見てくる。大方『私だけじや詳細を聞きだせない』といった所か……まあ、それでも紫の立ち位置と魔理沙の立ち位置から考えてみれば随分と距離は縮まっているのだろう。本来なら博麗の巫女として私に依頼する筈だつた話を、今こうして魔理沙と共に聞かされているのが良い証拠だ。

その発展してきた仲を裂きたい訳でもないので、私も口を開く。

「物分かりは良い方じやないのよ、私。詳しく述べなさい」

「ええ、知ってるわ。だから説明するわね。……弾幕生け捕り如何を問わない正式な退治依頼よ。対象の名前はひより、種族は蠱毒。年齢としては千四百を超える妖怪だけど、その内千年は封印されていたわ」

私が訪ねると流れのような速さで紫は全てを話した。

ひよりや蠱毒といった聞き覚えのない名前を頭に留めつつ、私はついで訊ねる。

「正式な退治をするつて事は、正式な戦いが成立しないつて事ね？」

「その通り。今の彼女は弾幕ごっこなんて遊びに付き合う程お人好しじゃないわ」

それに知らないだろうし、と紫は困ったように苦笑した。

「分からぬいな」

次の質問へと私が移る前に、隣に座っていた魔理沙が口を開く。「名前と種族を知つていてお人好しだつて分かつているつてんなら、つまり紫とひよりつて奴は知り合いなんぢやないのか？だとしたら退治するしないの前に、そいつともう少し話し合つたりとかするべき事もある筈だぜ」

「……」

「確かに私もそう思つたわ……紫、どうなの？」

魔理沙も私も形式上訊ねてみたが、その答えは明白と言わざるを得なかつた。

この八雲紫という妖怪に限つて——幻想郷を長年に渡つて管理し、成立させてきた彼女を以つてして試されていない可能性など残つていないので。多分私達の元へ訪れる前にそのひよりを説得し失敗、そして実力行使すらも失敗に終わつてゐる。

だからこそ、今こうして彼女は此処に立つてゐる。

深刻と悲嘆を混ぜた瞳も、変わることなく。

「……お察しの通り、今のひよりは既にかつての彼女と呼べる状態ではないわ。封印された事による人への憎しみと、その結果大切な者と引き離された悲しみで暴走状態にある。私が会いにいった時も言葉は通じなかつたし、私の姿を見て動きを止めてくれるような事も無かつた」

これで大体の辻褄は合つた。そう判断しつつ、私は隣の魔理沙を見る。

「彼女もどうやら私と同じ結論に至つたようだつた。

「退治」

どうしようもない、つまりそういう事。

紫が色々と試行錯誤をし諦めたのならそれ以上何かを進言する必要はないという事だ。彼女自身が此処まで来て依頼をしに来たのも、

その覚悟の表れと考えてしまったのが妥当だろう。そしてそれを聞くほど私は野暮ではないし、それと同じ位魔理沙も野暮ではなかつた。

けれど――

けれど、その結論に至らなかつた者も居るようで。

たつた一人、残りの一人はそうは思わなかつたらしく。

「残念ですが、今回は博麗の巫女である博麗靈夢にお願いしたいと思

います」

紫は瞳を閉じたままそういう言い放ち、ゆつくりと腰を折り曲げた。それは誰でも知つてゐる、謝罪や感謝の意志を伝える際の姿勢。私に向けてではない。紫の頬みなら、と意氣揚々と飛び出そうとした魔理沙の気持ちに対する感謝と、その行動の気持ちだけしか受け取つてやれないことに対する謝罪である。そしてそれが彼女の出来る最大限の礼儀だということは、普段は使わない丁寧な口調と閉じられた瞳で分かつた。

勿論そこで文句を言うほど魔理沙も子供ではない。

「流石に理由が聞きたいぜ」

「ええ、勿論よ。よく聞いて頂戴……別に、魔理沙を除け者にしようとした訳じゃないの」

彼女が話すのは、多分この話が私だけの元に来た理由。

そして彼女が――

「私と藍の二人掛りで、既に彼女を殺すことに失敗しているわ」

八雲紫がひよりという妖怪を諦めた、その原因。

つまりは強過ぎたのだと紫は言う。

「正確には殺しきれなかつた。蠱毒という種族はね、大体で言えば小さな者達の集合体みたいな物なのよ。本来はそれぞれが意志を持つていて、それ等を統括しているのがひよりだつたんだけど……」

「その統括している奴が暴走しているつて事だな」

紫は不承不承といった感じに頷く。断定は出来ない、その余地を残しているらしい。

「……じゃあ、殺し続けていれば死ぬのかしら?」

「ええ、そうよ。でも、そこまで簡単な話ではないの。正確には殺しき

れないってさつきは言つたけど、でもやつぱりひよりは強いのよ」「強いのか？」

境界の妖怪と九尾の狐を同時に相手して、打ち勝つほどに。

紫は迷わず頷く。

「強過ぎる。生命を絶命させるという観点だけで見ても、幽々子の完全な上位互換と考えてくれて結構よ。食らつたら死に掛けるとか致命的というレベルじゃない、一から零になるような単純な呪いの暴力」

「……ああ、そういうこと。だから私は良くて魔理沙は駄目なのね」

職業巫女と職業魔法使いでは、共に吸血鬼や鬼退治は出来ても呪いの防御は出来ないと。

これには流石の魔理沙も何か言い返そうとしたらしい。縁側から腰をほんの少しだけ浮かせて、浮かせたまま……結局腰を降ろす。魔理沙は弾幕ごつこの部分だけで見れば間違いない私と同等かそれ以上の実力の持ち主だが、それでもやはりそういういた妖怪を相手にするにはまだまだ足りない部分があった。小妖怪、中級妖怪ならいざ知らず、大妖怪相手に弾幕抜きで勝負するには彼女の八卦炉では少々心許ないのだ。

紫はだから、魔理沙に対して先ほど頭を下げた。

今でも申し訳ないと思っているに違いない。

「……あーあ、折角面白そうな話が来たと思つたんだけどな。まさか戦力外つて理由で外されるとは思わなかつた」

「魔理沙」

「分かつてる、分かつてるよ。別に紫を恨んでいる訳でも靈夢を羨んでる訳でもないぜ。今回参加出来ないのは、単純に私の力不足だ」

そして真面目な霧雨魔理沙は、自身の不甲斐なさを恥じて縁側に倒れた。

潔く、往生際良く、除け者なりに格好良く。

「任せたぜ、親友」

「任せられたわ、相棒」

隣から伸びされたその右手に対して、私は自身の左手をぶつけ合わ

せる。

立ち上がった。



「以上が、恐らく現時点での靈夢さんが必要としている情報の全てです」
「……」

唚然。表情には出ていないか、それすらも自信がない。

阿求はパタリとその手帳を閉じて溜息を吐いた。疲れた、という風ではない。まるで人生の遺る瀬なさを嘆いているような、または自身の知らなかつた何かに對して呆れを見せるような溜息。そうしたいのはこつちも山々なのだが、しかし此方は話を聞いただけで終わりという訳にはいかない。その後の方がメインであるのだから尚更。とはいえ、先ほどの話に考えさせられる部分があつたのも事実だ。初代博麗とその親代わりであるひよりの話、とか。

「ねえ、阿求」

「何でしようか?」

「どうしてひよりは神社を建てて人間を育てたのかしら?」

ほんの少しだけ依頼を外れて自身の起源を探つてみる。どうして博麗は出来たのか、という事。

それは博麗靈夢が、博麗の靈夢である理由。

阿求は然程考える素振りもせず答えた。

「多分そこに因果関係はないと思いますよ」
「……」

阿求は続ける。

「つまり、神社を建てた事と初代を育てた事に繋がりはないという事です。三代目稗田の記録によれば、彼女は自ら里に住み人々との壁を取り除き、彼等の暮らしをより良くする為に神社を建てたと記されています」

そして恐らく紫もその事に関わっていたのだろう。

けれど、初代を育てたのは稗田でも紫でもなかつた。

しかし、初代博麗を育てた事とは何も関係がないと私は考えていま

す。神社の為でもなく、人の為でもなく、ただ当時の巫女ですらなかつた少女の為だけにひよりという妖怪は人を育てる道を選んだのではないでしようか？」

「だとしたら、相当な変わり者だつたのね」

確かにそうですね、と答えた阿求はしかし笑わなかつた。どうやら彼女にとつてこの話とは、冗談半分に話すことの出来るような話題ではないらしい。

その瞳は今まで以上に真剣な光を帶びて。

「だから靈夢さん、私は紫さんの話に少々疑問を覚えます。果たして本当にひよりさんは人を恨んでいるのでしょうか？」

「……紫が嘘を吐いている、そういう事？」

肯定はされなかつた。否定もされなかつた。

ただ、その首を横に振るだけ。

「……分かりません。確かにひよりさんが人や妖を恨む理由なら沢山あります。けれど、彼女が他者に恨みを向けるような妖怪だとは思えません。しかしそれも彼女以外の蠱毒達が率先して動いている、と言われば納得の出来てしまう話ですの――」

他者が何をどう考えているのかなんて、それこそ誰にも分からない。

それでも――

「靈夢さんが確かめて来て下さい」

「……結局そうなるのね」

「ええ、ついでに報告もお願ひします」

直接確かめに行くことで分かることも、まああるのだろうけれど。

――それを認めてしまふと、此処に来た意味が無くなつてしまふではないか。

今度こそ阿求は私を見てニッコリと笑つた。

一夜明けて場所は紫の自室。

あの後森から紫の家に飛んだ私は慌てふためく紫と雑多な物が転がっている物置のような部屋を見渡し、そうして呆れ顔で紫を見ていた藍と約一千年振りの再会を果たした。藍もあの時から変わらず紫の下で頑張つていたらしく、その従者としての姿勢はすっかり板についていた。……主を敬語もなしに罵り、大仰に溜息を吐きつつも手伝わない事が従者の姿勢というならば、だが。

そんな彼女も今は静かに瞳を閉じ、紫の少し後ろに正座している。

——今までの話を纏めよう。

「顔合わせついでに巫女の教育？」

「……間違つてはいないけど、随分端を折つたわね」

復唱出来るような量じやなかつたし。

現在の幻想郷の説明から始まり、外界と結界、魔法の森なる場所、紅魔館なる建物、昔から変わらない人里、昔から聳え立つ妖怪の山——その他諸々の説明。博麗神社もやはり残つてゐるらしく、そこに代々住む巫女が人と妖怪の間を取り持つ形で今の幻想郷を形作つてゐるとか。後は今時の主な戦い方……すべるか一どるーるとやらの大まかな説明もされた。

地底の様子や里の様子も事細かに説明してくれた。

その上で、である。

「……まあ、一番気になつてたことだし」

正直に言うとそれが本音。

更に的確に表すならば、私が彌里に伝えたかつた事が伝わつていたかどうかの確認。今代の為でもなく、紫の為でもなく、言うなれば自己満足のような物だ。

——と、此処で紫が神妙な顔をしていることに気付いた。
「どうしたの？」
「……いえ、何でもないわ。ただ——」

「貴女ならきっと、博麗神社に住むと言うんだと思つて」

「……まあ、ね」

元よりそのつもりだつたので否定の仕様がない。

そんな私の返答を聞いてなのか、紫は満足そうに頷いて微笑んだ。「だつたら尚更靈夢には上下関係をハツキリさせてあげないといけないわね。……うん、丁度良いから今回の計画についても話しちゃいましょう。——藍」

「畏まりました」

紫の呼びかけに今まで黙つていた藍が紫に何か紙切れを手渡す。彼女はそれを炬燵に広げた。

「ざつくり説明すると、貴女を退治しに来た靈夢を撃退し寸前まで追い詰めるつて段取りよ。その前段階の手回しは殆ど済んでるから、後はひよりが靈夢相手に頑張つてくれるだけで良いわ」

ふむ。

職務怠慢氣味な靈夢という子に今までは駄目と教えるのが狙いらしい。

——つと

「手回し?」

「手出し無用つて事を方々に伝えてあるのよ。幽香を含めてね」

「……幽香?」

「何故かは分かりませんがひより様の復活を察知していたようです」

今回一番の難関だつたわ、と紫は疲れたように溜息を吐いた。

「……」

はて、何か禍根が残るような事があつただろうか。

あの日。確かに私と幽香は衝突して、結果的に私の方が勝利した訳だけれども……あれは私の体質を最大限活用した上で全力の不意打ちを決めたからであつて、二度目がもう存在しないという事は私と彼女の間で合意していた筈だ。——つまり何が言いたいのかというと、幽香には私の復活を気にする理由も説得を受ける必要もない。もしも再び衝突したとしても、彼女の勝利に揺るぎはないのだから。

……ない筈なのに。

「……まあ、いつか。後で話してみるよ」

「ええ、そうして頂戴。出来るだけ早くに」

そう言いつつも、紫の表情はそれとなく楽しんでいる様だった。
だからまあ、それほど心配する事でもないのかも知れない。

「……さて、話を戻すけれど……弾幕決闘法が制定される前の巫女である先代までは普通に妖怪を退治する事で均衡を保っていたの。人を喰らい過ぎる妖怪を厳重注意したり実力行使したり、つて感じね」

「……均衡」

先ほど紫から受けた幻想郷の説明。

それを軸にして考えるなら……

「外の世界で死亡確定の行いをした人間を此方に連れて来たりよ。自殺とか愚行によつて死ぬ人間は問答無用で地獄行きだから、その手間を幻想郷で省くという条件で外界の地獄とも合意済み。それでも数は不特定多数だから食べ過ぎは良くないんだけど——」

その者達の魂は、きっとあの閻魔様が裁くことになるのだろう。
意識を紫に戻す。

「今⁷の靈夢では本気の大妖怪に立ち向かう事は出来ないわ。弾幕ごつこでは無類の強さを誇つているのだけどね」

「博麗の巫女としての自覚、か……」

確かに紫の懸念も最である。

しかし、元々彌里ですら博麗の巫女として据えるつもりは無かつたのだ。あの時は紫の懇願と状況からそういう風に決まつてしまい、結果的に上手くいった——けれど、やはり私達の考え出した巫女の選出方法の欠点として、『相手に選択権を与えるられない』という欠点がある事だけは変えようがない。

だから私としてはその靈夢という子に強制はしたくないのだが。
チラと紫の方を窺う。

「先代は靈夢がまだ自我も持つてない頃に亡くなつたわ」

「……」

「先代まではちゃんとその前の代が面倒を見て上げられていたのよ。
でも、先代は後天的な持病を抱えていたから」

誰も彼女と共に居てやる事が出来なかつた、と。

「……うん、分かつた」

「お願い出来るかしら？」

何が、とは言われない。漠然とした問い。

それに対する答えを、きっと私はその子に与える事が出来る。

◇

博麗靈夢は淡白な性格である。私の周囲の人妖は言う。

けれど一つだけ訂正をするならば、別に私は淡白ではないと言つておきたい。他の人からは見えないだけで、これでも一応ある程度のこだわりやルールに則つて動いてはいるのだ。ただその矛先が普段飲むお茶や起床時間や食事のバランスに偏つてしているというだけで、その性質だけで捉えてくれば私が如何に普通の巫女をやつているのかが分かるだろう。それでも他に他者と違う点があるとするならば、それは過去と未来の見方くらいだ。

過去は過去、未来は未来。明日は昨日足りえず、後は先に及ばない。初代だの創始者だの先代だのという物に、私は全くと言つて良いほど興味が沸かなかつた。

——それでも

「やつぱり此処に居たのね」

「……」

私はひよりを見つけ出した。

「紫が心配していたわよ」

「……」

答えない。

眼前数メートル先に佇む黒い影。霧のようではなく、まるで暗闇のような襤褸を全身に纏つたような異形の怪物。身長こそ私よりも低いものの、その黒の中から見える双眸は底冷えする程暗く深い。腕のような蛇のような、よく分からぬ物がボンヤリとだがその輪郭を人として定めている程度の塊。

少なくとも嘗て人の子供を育てた妖怪の姿ではないだろう。

けれど彼女が、きっとそうだ。

私が彼女を見つけたのは阿求からひよりについての話を聞いてから五時間程経過した時の事だつた。段々と日が暮れ始め、それと同時に彼女が居そうな場所も減り、そうしてまだ探していらない場所が数える程になつた所で唐突に働いた直感。それに付き従つて来て見れば、彼女は『無縁塚』に一人佇んでいた——という訳である。

博麗神社でもなく、人里でもなく、無縁塚。

彼女が封印される前には無かつた場所である筈なのに。

「此処は無縁塚。外界から来て死んだ人間とか縁者が分からぬまま死んだ人間の埋められる場所。少し先の階段を登れば冥界、更に先にある河を渡れば地獄にすら辿り着く……そんな場所よ」

死んだ人間の魂が保留される場所と裁かれる場所。

そこへ通じる場所に、彼女が立つていた理由——

「……アンタが何を思つて此処へ来たのかは分からぬけど、馬鹿な真似は止めなさい。此処にはもうアンタの搜している奴は居ないのよ。もう——」

とつぐに転生か成仏してしまつてゐる。

そう言いきる前に、彼女は一步此方に近付いた。

「——つ、」

「……」

慌てて距離をとつて靈符を構える。それと同時に心の片隅で抱いていた期待——もしかしたら彼女を正気に戻すことが出来るかも知れないという願いにも似た思いが薄れていく。

そんな私の心と同じように、彼女の足元が黒く染まつて。

「……仕方ない、か」

私は彼女を救うという選択肢を諦めた。

もうこうなつてしまえば目前のソレは初代の母でも博麗の祖でも何でもない。ただ退治すべき妖怪として、幻想郷の均衡を崩しかねない脅威として認識し直す。そうして考え直す程に、紫の言つていた『脅威』の意味がハッキリとしてきた。

呪い

まるでその存在を認めないかのように、黒は地面を荒廃させる。

『——ツ!!』

「つ、はあっ！」

動き出したのは同時。

幾つもの動物が一度に果てたかのような凄惨な咆哮と共に突撃してきた彼女に対して、私は咄嗟に手に持っていた靈符で壁を作り距離を取った。そうして私が展開した靈力の逆のそれを、しかし彼女は初めから予測していたかのようにすり抜けてくる。

けれど、此処までは予想通り。

『封魔陣』

更に踏み込んできた彼女を、私は距離を取った時に撒いた四方の靈符の中に閉じ込める。

弾幕に使う物とは違う——妖怪を退治する為に拘束する術式に。

『夢想封印』

そしてそのまま一番得意とする術を彼女へと撃ち込んだ。

本来ならこの技も弾幕用があつて、それは色とりどりのホーミング弾を相手に飛ばすという物なのだが流石にそんな隙を作る余裕は無かつた。ありつたけの靈力を込めて、恐らくは弱点だと思われる目の辺りに向けて全ての靈符を衝突させる。

並の妖怪なら消滅。大妖怪でも、恐らくは大ダメージを被る一撃。

彼女は避けなかつた。

『ガアアアアアアツ!!』

「うつさ——」

咆哮。

たつたそれだけで陣を壊し、彼女は再び此方へ突撃する。

全身に当たる夢想封印には怯みすらしなかつた。

「つ、ぐう！」

瞬時に背中に差していた大幣に靈力を込めて防ぐ。

吹き飛ばされた。

「——つ、傷一つ付かない、か」

空中で体勢を整えつつ一人呟く。

先ほど彼女を拘束した封魔陣も攻撃に使つた夢想封印も決して弱い技ではない。特に妖怪においては絶対とも言える拘束力と必滅の威力を持つた攻撃である。けれどそれを同時に食らう筈だつた彼女は咆哮一つで陣を破り、夢想封印に関しては脅威とすら感じていなかつたのか避ける素振りすら見せなかつた。

そうして今も此方に近付いて来ているその姿には、何処も変化した部分はなく。

紫と藍が二人掛りで殺しきれなかつたというのも強ち間違いではないと。

——改めて気を引き締めなおす。

「アンタには悪いけど、本気で退治するわよ」

ソレはほんの少しだけ喜んだように揺れた。

空中で私を見下ろしている少女——博麗靈夢。

彼女の格好は私が彌里の為に作つた服によく似ていた。大きな相違点はといえば、長袖だつた部分が簡単に取り外しの出来る籠手のような物に変わつてゐるというだけ。全体を紅白で整えた調子も、その頭に着けているリボンですら似通つた部分が窺える。そこから考察してみると、どうやら私が思つてゐる以上に博麗の巫女は代々細部まで引き継いで來たらしい。彌里を育てた私からすれば、それは喜ぶ事であつて決して悪い事ではない。

……代々引き継ぐならもつと良いのを作りたかつたのだけれど。

「……それに、札も」

靈夢に聞こえないように呟く。

先ほど彼女が構えた靈符。その構成は大分強化されたとはいへ、均衡やバランスは全くといつて良いほど変わつていなかつた。——分かり易く言うのなら、当時私が書いた文字の間隔や位置が採用されたままなのでいざ眺めてみると非常に残念な物に見えてしまうと、そ

いう事である。

今更のように過去の軽率な行動を後悔。

「でも、まあ——」

それ以上に、何処か喜んでいる部分もあつて。

動きを止めた私を靈夢は訝しむように見つめていた。先の彼女の発言から恐らく私は『不条理に娘と引き離されて暴走しつつも再会を願う妖怪』という風に伝わっているのだろう。勿論その思い込みを利用しない手はない。

——跳躍

『陰陽鬼神玉』つ！

一直線に突っ込んだ私に対し靈夢は素早く対応した。

彼女が懐から取り出したのは二つの小さな球体……恐らくは妖怪退治の過程で生み出された私の知らない技なのだろう。靈夢が軽く靈力を込めるとそれは人の頭程度の大きさにまで膨張し、先ほどまでは比べ物にならない靈力を放ち始める。

そのまま向つて来た。
はたき落とす。

——つ

これには流石の彼女も苦々しい表情を浮かべた。……はたき落とした此方の両腕も流石に無事ではないので、今のは五分五分といった所だが。

しかしこれで彼女の眼前へと到達した。

『ガアツ！』

「はあつ——きやあ！」

今度は貫手。

先の玉を弾いた時の怪我を再生させたばかりの腕を靈夢に向ける。彼女はそれを先と同じように大幣に靈力を込めて受け止めようとして、再び吹き飛ばされた。

——風切り音。

「つ、あぶな」

まるで最初から狙っていたかのように数瞬まで居た場所を通り過

ぎる球体。

咄嗟に吹き飛ばされた靈夢の方を見るもその姿は視認出来る場所にはない。つまり吹き飛ばされたことを理解した瞬間にはもうあの球を動かしていたのだろう、末恐ろしい少女だ。

遠くで紅白が立ち上がるのを捉える。

「……うん、それで良い」

ガラリと纏う空氣の変わった少女を見て私は小さく呟いた。



「それでどうなったんですか？」

「どうもこうもないわよ。結局私が負けそうになつた所で紫が来て、それでお終い」

「じゃあ縁起には『手も足も出ずコテンパンにされた』って書いて置きますね」

そういうと彼女は悔しそうに押し黙った。

話して恥をかくか、話さずして大雑把に書かれるか——どちらも気分の良い物ではない。

縁起には真実しか書かない決まりがある事は黙つておく。

「……はあ、分かったわ。話せば良いんでしょ、話せば」

靈夢は疲れたように肩を竦めて、そうして渢々口を開いた。

「夢想天生を使つたのよ」

『ひよりと未来』

冗談じやない。

吹き飛ばされ、地面に転がつた所で靈夢は先の光景を思い出す。互いが完全に初見である以上、双方の攻撃がどちらもある程度通るのは覺悟していた。封魔陣も夢想封印も当たつたし、逆に彼女の突進や貫手も例に漏れず私にダメージを与えていた。……少なくとも、意識ある私はそのダメージが自分に通っている事を理解していた。現に今、私の右腕は攻撃の余波で動かせるような状態ではない。

しかし――

「……反則よね、本当」

此方の攻撃は当たつていたが、それが通用した訳ではなかつた。

驚異的な再生能力と靈力とは反対の性質が組み合つてなのかは分からぬが、彼女は此方の攻撃を全て無力化して見せたのだ。咆哮、両手、或いは無視という――言い換えれば、私がしたような技巧を凝らさずに、という事。

本当に笑えない。

「まあ、それも含めて仕事なのか」

立ち上がる。

紫が自身で諦めそれでも私の元へ来た理由は、つまり『彼女には出来ない方法で勝つ事が出来る』から。幻想郷の管理者であり大妖怪でもある彼女にすら出来ない戦い方を私はすることが出来た。それは別段手間が掛かるという訳でもないし準備が必要という訳でもない。唯私が使うと決めて能力を行使するだけで、それは容易に発動することが出来るのだ。

背中に大幣を戻し、靈符も陰陽玉も回収して袖に仕舞う。遠くに佇む影を見据えた。

「『夢想天生』」



一瞬だけ靈夢が眠つてしまつたのかと勘違いした。

先ほどまでしつかりと放たれていた靈力が突如として消えたのだ。私の攻撃を受け吹き飛び、地面に倒れ、立ち上がり、そして此方に顔を向けた直後の出来事だつた。靈夢の様子を良く見ようと目を凝らしてみれば、彼女はどうやら瞳を瞑つているらしい。足は地面につかず若干宙に浮いていて、心なしか彼女自身も消えているような錯覚を覚える。

動き出した。

「う、わわっ」

「……」

ゆつくりと此方に近付いて來ると同時に放たれる球体。

先ほどまでの札と比べて拍子抜けする見た目のそれは、靈符よりも強い靈力を纏つて。

「暴走……じゃない、か」

どうやらさつきの間抜けな声も聞こえていないようなので一人呴く。

今更ながら自分に一千年前の空白の時間があつたことをすっかりと忘れていた。それだけの時間があれば勿論妖怪退治の手法も、博麗の巫女の退治手段も変わるに決まつていて。そして日の前の少女は、唯それを行使しているだけに過ぎないのだ。

ただ、その規模がとんでもないというだけで――

「つ！――げ」

「……」

二度目の貫手。

蠱毒と妖力で勢いのついたそれは靈夢の居る位置を貫通した。

貫通しただけだった。

「」

今度は靈夢の動きが俊敏になる。

仕返し、とでも言わんばかりに私の正面で手を掲げた。本来ならば何の意味も成さない筈のその行為によつて出現した靈力の塊を、私は

距離を取りながら蠱毒で相殺していく事で消していく。出現して、消して、難いで、通り抜けて、先ほどとはまるで意味の違う、互いが互いに攻撃を放つだけの空間。意識があるのかどうかも怪しい靈夢に耐え切れず、今度は私が後方へと大きく下がった。

「……どこが弱いのさ」

この様子では、恐らくどんな攻撃も彼女に届くことはない。

距離を詰めて来る靈夢を見て、次に何処かで覗いているであろう紫を見て私は溜息を吐く。

先ほどまでの靈夢も充分強かつたが、それでも突び抜けた攻撃性を見せてはいなかつた。——という事はやはり、今眼前にて行われているこの『現象』こそが紫の言つていた博麗靈夢の恐ろしさなのだろう。確かに妖怪の私が言うのもなんだが人の身には余る力である。それを行使している当の本人は此方すら見ていないのだから尚更。

ついでに言うと、紫はこの技について一言も私に伝えていない。
「靈夢相手に頑張つてくれるだけで良い、ね……」

多分紫からしてみれば冗談交じりのサプライズだつたのだ。現代の博麗の巫女がどの位成長しているのか、それを手早く教える為にこの方法を選んだに違いない。つまり彼女の本当の計画は『それぞれに自分の見せたい物を見せる事』であり、体面上は私にああ言つたけれど、結局の所私が勝つても靈夢が勝つても良いと考えている。靈夢が負ければ本来の目的通り自らの力が及ばない存在を知ることが出来、私が負ければそれを肴に酒でも酌み交そうという魂胆か。

しかも、現状からしてどちらの可能性も捨てきれてはいない。
どころか状態としては私の方が劣勢である。

「私達、騙されてるんだけど」

「……」

駄目元の説得は靈力弾の返事のみ。

頼りにしていた紫の助けも、こうなつてみると到底来る気がしなかつた。

さて、残る選択肢は二つ。私が負けを認めて彼女に虜られるか、この場から全速力での逃走を図るか。前者はどの程度で終わるか分か

らないので却下だとして、後者はどうだろうか——意外と悪くはないかもしない。良くも悪くも紫への意趣返しにはなるだろうし、両者が負けないというのは双方の尊厳が保たれるので凄く平和な解決方法な気もする。その代わり、私には敵前逃亡の上にその相手の家に住み着く妖怪というレツテルが貼られてしまうだろうが。

周囲を靈力塊に囲まれてしまつたので靈夢の居る場所に突撃する。すり抜けた。

攻撃だけ突き抜けるのかと思えば、どうやら存在自体も浮いているようだ。

初めて他人の中を通り抜けたという快挙は、靈力弾を回避した為余韻に浸ることすら出来ず。

「今この子に勝つ方法、か……」

距離を取りつつ内部を総動員して大會議。無数に案は挙がれど、その殆どは退避や紫に助けを求めるといった後ろ向きな物ばかり。かく言う私も、相手に攻撃が通じないのでその位しか思いつかないが。

けれどもし私の考えが正しければ——

「可決」

勝機は薄い。まだ確定ではない要素も、幾つかある。
約束を破るつもりはなかつた。

『夢想天生』

その起源は約一千年ほど以前にまで遡る、未だ人妖の調和が取れていない時代の話。初代博麗の巫女が後世の者達の為に『理論』だけ完成させ、そうして二代目へと引き継いだ奥義。人間が空を飛ぶという非日常的な力と、人間は空を飛べないという思い込みにも似た世界の常識を利用して『あらゆる現象に干渉されないように浮く』ことが出来る。一度発動されたが最後、幻想郷に住んでいる全ての人妖の力を総動員しても打ち破ることは出来ない。完全にして無欠にして完結な、戦闘という概念を通り越した現象である。

博麗の巫女は代々この技を使って危機を乗り越えてきた。

「……けれど、あの子だけはこの技を使わなかつた」

決して平和とは言えない動乱の時代。

後代の誰にも負けない程厳しかつた筈なのに、彌里は概念だけ完成させて早々に押入れの奥へと放り込んだ。練習もせず、使う素振りも見せず、その存在だけを知つてゐる私が何故と問いただそうとした事もあつた。

けれど、その疑問は今対峙する二人の姿を見て解決した。

「貴女は、自分が浮く事を良しとしなかつたのね」

博麗彌里は滅多に空を飛ぼうとしなかつたのだ。

飛びない訳ではない。嘗て不死身の蓬萊人と稽古をしていた時は空中戦を披露していたし、妖怪退治の時にも空を飛ぶ妖怪相手に飛ぶ時だつてある。——けれど、彼女はそれを日常生活の枠に当て嵌めて使う事はなかつた。過去、現在、そして未来を通して便利だと言われ続ける力を。

「……」

多分その理由は、自らが尊敬する母の為。

妖怪が育てた人間が『世界から浮く』事なく生きた証明。

傍から見れば自己満足とも捉えられるそれは、時代を超えて二人を繋いだ。

「だから後は貴女がそれに応えるだけよ、ひより」

スキマに映る光景。一方的に攻撃を加えられる黒き小さな彼女。

靈夢は決して大妖怪に遅れをとるような少女ではない。それは靈夢自身の実力も然ることながら、彼女が博麗の巫女が代々受け継いできた技術を最大限に引き出せる才能の持ち主だからだ。器用裕福と言つてしまふのも癪だが、それでも彼女には天衣無縫という言葉を当て嵌めるだけの物が揃つてゐる。

そんな博麗靈夢の欠点と成り得るのが、唯一一つ——

『負けないことで勝てるとは限らない』

絶対無敵と思われてゐる夢想天生の、唯一にして致命的な弱点。

世界から浮いて全ての攻撃を一方的に無効化する、つまり使つた者

が負けなくなるという究極の技。一見無敵のように見えてしまうソレは、しかし裏を返してみれば現象の無効化でしかないのだ。

例えばそれは神風の如き速さで逃げる鴉天狗の記者。

例えばそれは強力無比な力で正面から耐える花妖怪。

例えばそれは幾ら殺し続けても怯まない黒衣の少女。

双方が負けない場合、不利になるのはどうしても博麗の巫女になる。

相手の目的が何であれ、巫女の目的は退治なのだから――

「吸血鬼が余興で終わらせたように、亡靈の目的自体を止めたように、鬼が戦うこと自体に満足したようにはいかない事も、世の中にはあるのよ」

それは、教えて上げないままにするには危険過ぎる落とし穴。

何時か何処かで、思わぬ形で彼女に牙を剥くだろう。

「だから、存分に教えて貰いなさい」

欠点を教わり、強さを学び

そして出来れば愛情を知つて欲しい。

スキマの先では、靈夢が御幣を取り出していた。



次に視界に映つたのは不気味な程に濃い黒。

「……っ」

一瞬だけ周囲を見回し、その明るさからかなりの時間が経過した事を悟る。

夢想天生が、凌がれたのだ。

自分自身初めての経験だつた。発動したが最後、決まって意識を取り戻す時には相手の妖怪は倒れているか消滅しているか……少なくとも此方の意識の限界によつて引き戻されたことはない。

けれどよくよく考えてみれば、能力である以上限界も存在する訳で。

「……もう使えないか」

全身に纏わりつく倦怠感は、今までと比べ物にならない程長時間使用した事を意味して。

そして目の前のコイツは、それを耐え切つたという事か。
「本当に、紫の頼みなんか聞くんじゃなかつた」

ひよりが踏み込んでくる。

殆ど込める靈力もないまま御幣を取り出す。
バカリと何かが圧し折れる音を聞いた。

「つ——」

一瞬肋骨が折れたのかと思つたが、どうやら然程力を込めていない棒切れでも役に立つたらしい。折れた御幣よりも思い切り後方へと吹き飛びながら、私は漠然と今後の展開について考えを馳せる。

八つ裂きにされるか、あの呪いのような黒に墮とされるか。
少なくとも、逃がしてはくれないだろう。

「がつ、は……」

背中が強かに木へと衝突し、肺の空気が無理矢理外に押し出される。

「……」

「……」

戦いが始まつてから初めて私はひよりの瞳を見つめる。
紅い双眸は悲しんだように揺れていた。

「もつと——」

もつとまともな形で知り合えていたら、きっと。

私はほんの少しだけ、私の事を好きになれたかも——
「はあい、二人共そこまで」

知れないのに。

「……」

すぐ横から聞きなれた声。

チラリと視線を自身の背中にある木——その横に立つ妖怪へと向ける。

声を放つた本人である紫は私の視線に気付いて、軽く片目を瞑つただけで視線を外した。数歩前に出て、私が戦っていたひよりと対峙するように前に立ち、そうして口を開く。

「お見事、腕は鈍つていらないみたいね」

その賞賛は、間違いなく私ではなく目の前の怪物に向かられて。

「紫つ……アンタまさか」

まさか、なんて驚くような事ではない。

嵌められたのだ。

なのでこの場合の『まさか』は、どちらかと言えば現在に到るまでの状況が信じられなかつたという意味合いが強い。態々私だけを嗾け、阿求も含めて騙し、ひよりと私を手加減抜きで殺し合わせるという計画——それ自体が出来すぎているというか、疑うべき矛盾点が一つも無かつたという部分が特に。

今にも彼女が恐ろしい叫び声を上げて飛び掛つてくるのでは、と。視線を正面に戻した時には、既にあの怪物の姿は無かつた。

「……」

代わりに立つていたのは黒衣の少女。

萃香に負けずとも劣らない身長。今までに見てきたどの妖怪達よりも人間をしていそうな黒髪に、黒目。先ほどまでの身震いするような妖力と邪氣は消え去り、今は唯微弱な妖力だけを放つていて。少女は私の視線に気付くとペコリと頭を下げる

「ひより」

「……どうも」

余りに端的で無機質だった故に、思わず此方も会釈を返してしまつた。

そして彼女と共に紫を睨む。

「……」

「ええ、ええ。二人が言いたい事は分かつてゐるわ。確かに二人にはそれぞれ嘘を吐いちゃつたけど、結果としてはちゃんと望んだ結末になつたじやない。靈夢は無事ひよりの暴走を止める事が出来たし、ひ

よりは当初の目的通りに靈夢を負かす事が出来た。——ほら、これで無事解決！」

パン、と手を打つて喜ぶ紫を無視して今度はひよりを見る。

「紫なんかに協力するんじゃなかつた」

そう言うが早いが、彼女は私の正面で屈んでその両手で私を抱っこでもするかのように持ち上げた。その小さな体格と身の丈にあつた腕からは想像も出来ない程容易く私の身体は持ち上げられ——ひよりが両手を最大限に伸ばし、私が微妙な膝立ちの姿勢になる所までは持ち上がつた。そこからはもう自身の力で立ち上がり、改めて少女と対峙する。

瞳には先とはまた違う色の悲哀。

「……ごめん」

「……良いわよ、別に。ありがと」

何に対しての謝罪なのは分からぬが、私に対しての気遣いは伝わつた。

さて――

「それで、アンタは紫に何を言われたわけ？」

「ちよつ」

「『靈夢が怠けてどうしようもないからとつちめたい』

ひよりは真っ直ぐに此方を見てそう答えた。正直者の目だつた。

「で？」

「ま、まあ、それに近い事は言つたけど……それが目的じゃないのよ

対して紫は此方と目を合わせようとせず、先ほどまで私が背中を預けていた木を見つめていた。

自称保護者より初めて会つた妖怪の方が信用できるというのも、また皮肉な話ではあるが。

でも、まあ……

「流石に紫の言いたいことが分からなかつた訳でもないわ」

幾ら状況的に騙された所で、ひよりも私も真剣に戦つた上で負けたのだ。

もしもこれが本当に意思のない妖怪相手だったら、或いは悪意のある大妖怪相手だったら……紫が伝えたかったのはそういう事なのだろう。確かに紫が私に言つてきても適当に流してしまうような気はするし、そういうつた意味ではスペルカードルールではない勝負に負けるというの良い経験になつた。絶対なんて事はこの世に存在しないのだと、改めて再認識させられる程度には。

だからその点に関して言えば、私は如何にも紫を怒る気にはなれなかつた。

「……はあ」

代わりの出たのは溜息一つ。誰に向けてでもない、自分に対しての。

今回の騒動の半分は多分私の責任でもあるのだ。
ひよりを見た。

「えーと、ひより……様？さん？その、巻き込んで悪かつたわね」「ひよりで良い。別に、私は靈夢と手合わせ出来て楽しかったから」

彼女はそう言つて右手を差し出す。

「改めて、よろしく」

「……よろしく」

握り返したひよりの手は、思いの外暖かかった。

◇

さて、ではあの後どうなつたのか。

無事靈夢との顔合わせを済ませた私は、机を挟んだ反対側に紫、隣に靈夢、間に藍を挟む形での会合を終えた。——別に会合という程の物ではなく、事の顛末と紫の思惑を明らかにした上で被害状況を纏めただけなのだが。お互いに眞面目に戦い合つたにも関わらず靈夢は意外にも私に好意を寄せてくれているようで、その後改まつて何か説明をすることもなく和解する事が出来、そのまま流れるように私が博麗神社に住むことが決定。

彼女は私を『ひより』と。

私は彼女を『靈夢』と呼ぶことにした。

「ほら、着いた。此処が——説明は要らないかしら」「ん、大丈夫」

そして、今。

靈夢と共にスキマから降り立ち、先に佇む博麗神社を眺めていた。

『これなら数百……もつとかな、それ位は持つと思う』

そう言つたのは紛れもない私なのだが、まさか此処まで原型を残しているとは思わなかつた。永琳の設計図が良かつたり、代々の巫女達が大切に使つてくれたというのが理由なのだろう。所々傷ついた鳥居と石畳は数百年が経つて古くなりつつも、尚美しいという印象を持たせる。

かつて、この石畳を毎日のように掃除していた巫女が居た。

「さ、行きましょ」

歩き始めた靈夢の後に続いて私も神社へと歩き出す。

鳥居を潜り、石畳を踏みしめ

そうして賽銭箱の前。

「あー……先にうちの居候を紹介しどうかしら」「……居候?」

「……居候?」

私の少し前で立ち止まつた靈夢が此方を見ないまま頷く。

紫から少しだけ聞いていた話を思い出す。博麗神社には、つい先日幻想郷で騒ぎを起こした妖怪が靈夢の勧誘によつて住んでいるのだとか。その騒ぎという物についてやその妖怪については訊ねていないので分からぬが……まあ、私の知つている妖怪ではないだろう。『萃香』、帰つたわ

「……」

居候の名前は『すいか』というらしい。

こう言つてしまつてはなんだが、まるで食べ物のような名前である。

「おーう！ おかげり、靈夢！」

靈夢に応えるようにして聞こえて来たのは幼く、しかしある声。

その声は今頃地底に居るであろう友人の姿を彷彿とさせて——

……？

疑問に対する答えを私の脳が弾き出すより先に、前に立っていた靈夢が口を開いた。

「先々月くらいに地底って場所から出て来た鬼っていう種族よ。見た目はアンタ位小さいんだけど、力は間違いない大妖怪だから気をつけて頂戴」

「うらうつ！ 精霊つ、誰が何位小さい——」

神社から縁側へと続く道から境内に飛び出してきた少女。

「……て？」

「久し振り

私は伊吹萃香と数百年振りの再会を果たした。

失念していた。

何がと言うまでもない。先日自分で言つたばかりの事を自分で忘れていたのだ。それはつまり、普段のひよりの妖力が小さすぎてつい意識の外にやつてしまふという事。数百年間会つてい無い上に、その間に出会つた様々な人妖の気配の所為で全く気付けなかつた。彼女が精霊と一緒にこの神社へ来るということは既に分かつていた筈なのに、だ。

目の前には、微妙な表情で固まる精霊とひよりの姿。

「……」

「……」

「……」

空氣まで微妙だった。

ひよりは自身が言つた『久し振り』に対する答えを待つてゐるのだろう。そして多分、精霊は私がひよりが互いの関係を説明してくれるので待つてゐる筈だ。……しかし、私としては今の登場の仕方を如何にかしたいと思つてゐる。それこそ精霊とひよりに頼み込んで、全てなかつたことにしてもう一度登場し直す位には。

だつて、数百年ぶりなんだ。

待ちに待つた再会の最初の一言があれだなんて、そんな酷い話はな
いだろう

「……やり直す？」

「ふふっ」

ひよりが此方の顔色を窺うようにそう言い、隣にいた靈夢が口元を
抑える。

……つ

「……そういうのは聞くんじゃなくて黙つてやるもんだよ、ひより」

「ごめん」

悪意はない。それが逆に、どうしようもないという気分にさせてし
まう。

相変わらず、ひよりはひよりのままだつた。
右手を差し出す。

「んじゃ、改めて——久し振り。それと、おかえり」

「久し振り。それと……ただいま」

最後の部分は若干照れ臭そうに咳き、そうしてひよりは私の右手を
握り返した。

そこで今まで笑っていた靈夢が口を開く。

「はー、面白かった。……それで、二人は知り合い？」

「あー……」

「うん、友達」

何と答えようか、そう考えている私の代わりに答えたひよりを見
る。

『友達』

確かに封印される前から彼女とは色々な付き合いがあつたが、まさ
か友人として扱ってくれているとは思いも寄らなかつた。ひよりと
戦つたのは勇儀であつて、助けたのは射命丸であつて、夢を見たのは
紫だつた筈なのに。

靈夢を見て、ひよりを見て

「……ああ、数少ない仲間さ」

そう答える。

勿論、言われて嬉しくない訳はなかつた。

それを悟らせないように、私は二人に背を向ける。

「さて、顔合わせも済んだしさつさと入るわよ——ところで」

背後で聞こえる二人の談笑に耳を傾けながら。

「仲間っていうのは、つまりそういう仲間なの?」

「……うん」

何となく視線が私に向いている事を自覚して。

「萃香は封印されないまま一千年過ぎて、ひよりは封印されていた。でも、全然変わつてないって事は——」

「言うな」

「言わないで」

何か照らし合わせた訳でもなく、けれど時に同じ思いを抱き。「十年後までには靈夢を見下す!」

「頑張る」

「じゃ、今日から毎日柱に傷でも付ける? アンタ達の身長が伸びるのが先か柱が倒れるのが先か、勝負しましよう」

ちなみに私は柱に賭ける、と平然と言い放つ靈夢を睨み私も柱に……なんて表情をしているひよりを小突き

「んじゃ、私も柱に賭けようかな」

そう言つて二人と顔を見合わせて、笑いあう。

こういうのも悪くないなど、そう思つた。



「じゃあ、やっぱり紫さんが元凶だつたんですね」

「まあ、そうね」

予想通り、とでも言いたい風な顔で阿求は両手を打つ。

これで本当に今回の騒動は解決した。阿求との約束である依頼の真相も告げたし、留守番兼萃香の遊び相手をしてくれていた魔理沙にも説明を終えている。紫にはひよりが何かしらの罰を与えると言つていたので干渉はしなかつたが、あの時の様子なら生半可な判決は下

さないだろう。その時の紫の表情が愉快な物だつたという事だけ心に仕舞つて置く。

すつかり冷たくなつたお茶を啜り、私は一度だけ開いた障子から空を見上げた。

時刻は、そろそろ夕方になろうかという時間。

「……」

「帰らないんですか？」

チラと視線を向けると、阿求は慌てて両手を上げた。

「いえ、その、何時もなら報告だけして帰るので……」

そう答えた阿求は、別に何も間違つてはいない。

基本的に買い物以外で里に長居したことがないのだ。それは別に里の人間が嫌いだとかそういう訳ではなくて、端的に言えば里に居る理由がないからである。魔理沙は彼女の都合上人里には寄り難いし、神社に出入りしている知り合いはその殆どが人外なので同じく里に居ることは少ない。

それでも――

「今は、此処の方が良いわ」

「そうですか」

阿求は然程追求もせずに話を終えた。

この感情に关心を見せずに話を進める彼女が今はとても有り難く感じる。

「で、ひよりさんは何処に？」

……前言撤回。

彼女がほんの少しでも私の心の機敏を感じ取つてくれればそんな質問はしなかつただろう。博麗神社に何時も居る私が此処に居て、夕刻になろうかという時間帯に帰ろうとしない理由。

思い出すのは、その身よりも大きなものに耐える背中。

「……ひよりは博麗神社に居るわ」

「一人でね、と付け加えて。

「……」

流石の阿求も此処で萃香を数えているのかと聞くほど鈍くはない。

つまりは、そういう理由で私は此処に居る。

「最初は平然としていたのよ。でも——」

昔と変わらないと懐かしみ、苦笑して

今はこうかと驚きながら、関心しつつ
『封印された裁縫箱』……それを見て、流石に表情を変えたわ
最後に寝室の隅でそれを見せた時、彼女の無機質が作られた物だと
分かった。

その時の顔は思い出したくもない。

「……初代の、でしようか？」

「多分そうなんじゃない？ 分からないけど、少なくとも私に解けるような封印じやなかつた。それこそ、あの札自体を破壊しない限り——」

「じゃあ……」

「……」

それが可能な存在は、現在知る所唯一人。

阿求はそれ以上何も言わないまま、机に伏せて顔を横にした。

「……じゃあ、ひよりさんは博麗神社に住むんですね」

その『じゃあ』は恐らく先の言葉の続きをとして捉えて欲しかつたのだろうが、誰がどう聞いても苦し紛れの誤魔化しにしか聞こえなかつた。下手をすれば何も残されていないよりも辛い筈なのに、どうして紫は隠さなかつたのだろうかと一人考える。中身を知っていたから、ではないだろう。ひよりの為になるから、なんて確信は持てない筈だ。阿求の言葉の続きを考えて結論を出すのなら、やはり『娘から母に送られた唯一の手紙』だつたからだろうか。傷つく以上に意味のある物だと、そう信じているのだろうか。

そんな考へが身体を重くするので、私は阿求と逆向きに伏せる。
「萃香が来たばかりで準備に手間が掛からなかつたのが幸いよ

「そうですか」

そちらについての悶着は多分永劫語られることはないだろう。当の本人は現在地底に居る事だし。

聞いた本人である阿求は、やはりそんな事にはまるで興味がなさそ

うだつた。

まあ、私が同じ立場でも聞きたい話ではないが。

「つてことで、暫くは此処に居るから」

「ええ、まあそういう理由なら構いませんよ」

彼女の顔も見ないままそう告げて、私は意識を開いた障子の外へと移す。

「……あれ？ でも何時帰れるかはどうやつて——」
移した。



昔、里の近くに捨てられていた赤子を引き取った事があった。
私の記憶としてはそれほど昔の話ではない。体感的にはほんの先週、現実的には約一千年という年月が流れてしまつてはいるが。当然、目覚めた時に何かが残つていると期待していた訳ではなかつた。博麗神社を除いて考えれば、私とあの子が共に過ごしていただ頃の物なんて何一つ残つていないのだ。けれどそれは当たり前で——それが当たり前で、私もあるの子もそういう風に覚悟を決めて別れた。お互いの歩むべき道を、それぞれが互いに指示示す形で。

『博麗彌里』……それが私と共に暮らした巫女の名前。
私が育てた大切な娘の名前だ。

「……」

その彼女が、一体この裁縫箱に何を残したのか。

何となくだが、中身が手紙や言葉ではない事だけは分かつていた。

かつて私がこれを使つていた時には、それはもう本当に重宝していた。彌里の成長に合わせて丈を継ぎ足したり、或いは一から作り直しになつたり、妹紅との修練で穴の開いた部分を補修したり、又は作り直しになつたり、と。——そんな裁縫も彌里が自分で出来るようになつてからはなるべく彼女に任せせるようになつて、最後に裁縫箱を使つたのは彼女を一人前と認めた時の贈り物を作つた時である。

思えば、ちゃんと面と向かつて物をあげたのはあれが最初で最後

だつたか。

本当に駄目な親だつたなど、そう思い自嘲。

「——でも、ありがとう」

約束を守つてくれてありがとう、と。

私は札を破壊した。

パリンド、凡そ札とは思えない破碎音が響き渡る。

少なくとも純粹な妖力で破れるような生半可な物ではなかつた。自身の妖力と、蠱毒を混せて本氣で力を込めなければそもそも触れることすら出来なかつただろう。

開ける。

彌里がつけていたリボン
私が挿してあげた髪飾り
見たことのない模様の札
それだけだつた。

「……うん」

それだけで、もう充分に満足してしまつた。

まずは髪飾り、花の名前は忘れる筈もない百日草。私が彌里に渡したあの日から全く変わらない輝きを放つてゐるそれを定位置——耳の横、少し後ろの辺りへと挿す。これで漸く、目覚めてからずつと頭にあつた違和感が解消された。彌里に渡した時は必死で気付かなかつたのだが、やはり五百年も共にいるとなつ方が落ち着かないのだ。

幽香から守つたなんて事も、良い思い出である。

本人の前ではあまり豪語すべきではないが。

次に、彌里に送つたりボンを取り出す。

「……?」

リボン、というには些か長い。

けれど間違いなく彌里にあげたりボンだった。……違う点は私が編みこんだりボンを主軸にして、左右に向けて長く編み込まれている部分。謎感性と不器用さが作り出した私の奇怪な模様もそのまま引き継いでいるらしく、まるで帶のようだと——

帶のようだと……ではなく、帶か。

シユルリと、今自分がつけていた帶を外して裁縫箱に放り込む。覗いているような酔狂な者が居るとは思わないが、それでも気持ち的に手早く済ませる。どうやって採寸したのかは分からないが私が普段使っていた帶と殆ど同じ長さで、見下ろしてみると逆に此方の方がしつくりくるような感じがした。

まさか、こんな形で返してくれるとは思いもしなかった。

……この機会にお洒落でもして下さい、と言いたいだけかも知れなけれど。

「最後は、と……」

残つたのは見たことのない紋様の札。

私が妹紅に教えた物でもなく、妹紅が彌里に教えていたどれにも当て嵌まらない、恐らくは彌里が自身の手によつて作り出したのであるう靈符。それは今までに感じてきた誰の物よりも強大な靈力を纏ついていて——けれど何故か私の手を焼くようなことはなく、私の手の平の上でほんのりと温もりを伝えてくる。私と会えたことを喜んでいるように、と……考え過ぎだろうか。

——いや

『神狼（ホロケウカムイ）』

『……』

名を呼んだ瞬間、靈符が輝き煙と共に懐かしい姿が目の前に現れる。

この狼は彌里が初めて神徒と契約を交わそうとした時に出て来た子だ。神の気紛れなのか加護なのか、本来彌里が呼び出すことの出来る強さの範疇を超えて、だ。勿論私も知らない訳ではない。彌里以外には甘えた態度を見せることはなかつたが、それでも私と共に昼寝をすることもあつたし、妹紅とじやれついたりもしたし、普通に紫を

嫌っていた。

そんな彌里の神徒であるこの子が、どうして私をして前に座つていいのか。

理解は難しくない。

『此処まで出来るようになりました』ってね……。私でも良いの?』

『グルル……』

言葉こそ喋りはしなかつたが、神狼は目を細めて私の手に頭を寄せた。

私はその頭を撫でつつ、今度は座っていた賽銭箱に視線を落とす。長年を経て、賽銭により凹み、雪や雨によつて劣化し、それでも変わらない私の定位置。

『と、当面の目標はその犬の躰だな』

『ごめんなさいっ!』

何時も私は此処からあの二人の修練を眺めていた。

『よく躰けてあるじゃないか彌里。まさか残飯まで食べてくれるとは』

『——よーし決めた。この瞬間に大決定、今日の夕飯は狐うどんだ』

何時も私は藍と妹紅の喧嘩を見て笑つていた。

『藍の意見には概ね賛成だけど、夕飯はきつねうどんが良いわね』

『ゆ、紫様……冗談でもあの白髪婆を喜ばせるような事は——』

何の解決をするでもなく現れる紫に呆れるのが、どうしようもなく楽しかつた。

『師匠も何か言つてくれ——イダダダダダつ』

『ああつ、もうつ!駄目ですよ、メッ!』

『彌里、真面目な話をするとそいつは犬じやないんだ。だから……』

『この調子だと、夕飯は四人分だけで大丈夫みたいね。ほら、ひよりー』

——

お腹が空いたから夕飯にしましよう、と。

その時の私がどう思っていたのかは分からぬ。

どんな顔をして答えたのかも、思い出せない。

だけど、もし

今のが過去に戻り、同じ場面に出くわしたとしたら――

『夕飯は各自』

多分そう言つて彼女たちの不平不満を一身に受け止めただろう。そして多分、同じように封印されて目覚める。

これで、良かつたのだ。

ベロリと、頬を舐められる感触で意識が現実へと引き戻される。隣を見れば、そこには石畳に座つていっても私と身長の変わらない狼の姿。何を考えているのやら、一心不乱に私の頬を舐め続けている。鬱陶しくて仕方がなかつたが、これもスキンシップの一環なのだと信じ暫くの間は身を任せることにする。

そういうえば、彌里が泣いていた時も同じように頬を舐めていたつけ。

「……くすぐつたいよ」

そんなに舐められるともう何が何だか分からなくなる。

唾液なのか、涙なのか、もう、本当に。

「――つ、くすぐつたいつ、て」

パタリパタリと、自身の膝に零が数滴落ちた。

それを確認しないように無理矢理顔を上げて、そうして私は正面を見据える。

「……」

鳥居が、夕日が、その先にポツンと、人里が見えて。

その奥に、未来が見えた気がした。

◇

『靈夢さんは今直ぐ神社に帰るべきです！』

「……はあ」

そう言われるがままに追い出され、今は神社の階段を飛行している真っ最中。

別に悪いことは何もしていないのに、なんとなく帰るのが嫌になつている自分がいる。もしもよりが涙でも流していて、その場面に自分が立ち会つてしまつたらどうすれば良いか分からなかつた。

謝るでも、励ますでもない。

放つて置くのが一番良いと、私はそう思つていた。
だから――

「ん、お帰り」

「……ただいま」

こうして平然と夕飯を作り、丁度並べていた場面に遭遇するのは予想外で。

流石にこの場面に立ち会つてどうすれば良いかは分からなかつた。
「阿求……稗田の当主への報告してきた。多分これで人里にも普通に入れると思うわ」

そう言つて並べられた食事と机を前に、座る。

「お疲れ様、有難う」

コトリと湯気の立つご飯の入った茶碗を私の前に置き、ひよりはそ
ういつて正面へと座つた。
「いただきます」

「召し上がり

箸を、動かす。

そうしつつも、内心ではこの嫌な空気をどう断ち切るかを考えていた。湿っぽいのは好きではないし、多分彼女も望んでやっている訳ではないのだ。ならば此方から何か言うしかあるまい——そう思つて、咄嗟にひよりの全身へと視線を向ける。

髪飾りが付いていて、帯が新しくなつっていた。

「似合つてるわよ、それ」

そして、後悔。

ひよりが此処から動いていなくて、人里の服屋や雑貨屋に行つていいことなんて一目瞭然の筈なのに、ついそう口走ってしまった。勿論、嘘を言つた訳ではない。

けれど、それが彼女の遺した遺品である事は明らかで。

「

ひよりは無表情を崩し、驚愕と困惑の入り混じつた視線で此方を見つめ——

「ありがとう」

二度目となる彼女の本当の表情は、そこに一切の翳りなく。



『日常的な非日常』

◇
起床。

「ふ、ああ……」

目を開き、外から差し込む陽の光を感じ取り、上半身を持ち上げる。隣を見れば既に目を覚ましているのであろう、丁寧に畳まれた布団が一式置いてあるだけだった。どうやらひよりは妖怪であるにも関わらず朝から活動しているらしい。その布団を暫く眺め、そうしている内に段々と意識がハツキリとしてくる。身体を布団から捻り出し、着替えるのが面倒だったのでそのまま着ていた巫女服を整える。

食欲を刺激する、魚の脂が焼ける匂いに気付いたのもその時。
私は急いで背後にある襖を開いた。

「……あら？」

いや、確かに作りたての朝食がそこに並んでいた。
けれど一つだけ予想外だったのは、それを作った筈のひよりがそこに居ないという部分。私は足元で寝ていた萃香を踏みつけ居間へと入り、そのまま台所の方へと足を運んだ……がやはり誰もいない。冷めてしまわないようにと弱火にかけられた味噌汁の入った鍋と、恐らくはこれから盛る筈だったのだろう白米が入った櫃だけ。こんな中途半端な状態でまさか何処かへ行ってしまうという事もないだろう。そう考え到つた所で、私は自身の耳に聞きなれた音が飛び込んでくるのを捉える。『バチバチ』と何かが弾けるような音と、何か大きな物体が空を切るような、そんな音。

——ああ、成る程。

「どわあああああああああつ！」

「今日は随分早いのね」

その音の原因であろう片割れは、居間から見える外の庭へと姿を現した。

白黒帽子に白黒の服、尻餅をついて腰と箒を押さえているよく見知った顔の魔法使い。

霧雨魔理沙。

「いてて……おい、靈夢！良いのか？朝っぱらから侵入者だぜ」

「ええ、そうね。とつとと追い払っちゃいましょう」

その言葉を聞いて安心したらしい魔理沙。私は傍に落ちていた札を拾う。

ベシリ

魔理沙の顔目掛けて投げつけた。

「……」

「……なあ、靈夢」

「何よ」

「私は魔理沙だ」

「そうね」

「……妖怪じゃないぜ？」

「知ってるわ」

今度こそ魔理沙は訝しげな視線を私へと向けた。

けれど私だって考え無しに彼女へ札を投げつけたのではない。つまり魔理沙が今まで対峙していたのは妖怪であり、それはこの時間帯に博麗神社で活動をしていた妖怪という事になる。こんな事は、きっと萃香でも容易に想像してみせるだろう。直感で物事を進めようとする魔理沙が私や萃香なしにひよりと会つたらどうなるか、考えていなかつた訳でもない。

どうせ全身黒染めで怪しいから侵入者、とでも思い至つたのだろう。

そして負けたと。

「おい靈夢、もしかして——」

此処へ来てようやく魔理沙もそれに気付いたようだつた。

私は軽く頷き、そうして縁側に出て上空を見上げる。

「朝ご飯冷めちゃうわよ」

「ん、ごめん」

ひよりが博麗神社に住むことになつた、次の日の出来事。



小鳥——ではなく怪鳥の囁り。

「く、ああ……」

軽く目を擦り、完全に今の鳴き声に起されたなと溜息を吐く。普段の私ならばそんな風に後ろ向きになることはないのだが、生憎現在の時刻は何時もの起床時間より一時間程早かつた。鬱蒼と茂る森の中に住まいを構えているので日光に邪魔されることがないとはいえ、妖怪の遠吠えや怪鳥の鳴き声に悩まされるのも中々楽な物ではない。既に幾度と繰り返してきた起床パターン……そんな思考を適当に切り上げて立ち上がつた。

さてさて、何から始めれば良いのやら。

朝食の準備、部屋の片付け、魔法の勉強……するべき事は沢山あるが、今のテンションでしたい事ではない。となると、やはり自分が楽しいと思えるようなことをするのが一番か。例えばこのまま博麗神社へ行つて、流れで日の当たる縁側にて昼寝をし、偶然にも靈夢の作ったバランスの悪い朝食を食べるとか。楽しい……と聞かれれば首を捻るところではあるが、少なくとも私は『楽』だ。

「よし、決まり！今日の朝飯は白米と味噌と胡瓜だな」

昨日確認しておいた博麗神社の台所事情を思い出してそう確信。

博麗靈夢に朝食を任せるのであれば、これ以上望むのは過ぎた欲と言わざるを得ない。

当然、それ等を自分が料理するという選択肢はなかつた。

「さて、とりあえず昼寝から始めるか」

寝癖を整え、掛けていた帽子を被り、筈を掴んで扉を蹴飛ばす。私服のまま寝たので着替える必要はなかつた。

魔法の森を数分飛ばして、視界の先に捉えたのは友人の住む家兼神

社。

眼下を見下ろせば、大蛇でもひつくり返るような長さの階段があの場所へと続いている。一体どうしてこんな場所に建てたのか、恐らくは今後一生解決されることのない謎なのだろう。けれど確かに魔理沙の知る神社はどれも高い場所にあるようなイメージがあるし、そういった風に考えればこの神社も然程変ではないと言えないだろうか？……いや、変だ。参拝の途中に妖怪や獣に襲われる神社なんて、きっと世界中何処を搜してもこの博麗神社だけだろう。

しかし不思議なことに、今日は何時も階段で眠っている筈の妖獣の姿がなかつた。

何度靈夢に追い払われようと毎日あそこに居る奴等が、だ。

「ま、そんな日もあるか」

その一言で終わらせる。だつて、参拝客しか困らないし。

それよりも、今は一刻も早くあの日当たりが良い縁側に寝そべつて

「……んん？」

今度こそ魔理沙は疑問符を発した。

視界の先に見えていた縁側へ、神社の中から出てくる誰かの姿を捉えたのだ。

常識的に考えるなら靈夢か萃香だ。けれど今の時刻は七時。本来なら私だつて寝ている時間だし、彼女達が起きてくるにはもう少し時間が必要だろう。つまり、普段通りであればあの場所に誰かが立つなんてことは有り得ない訳で、しかもそれが靈夢や萃香でない事は一目瞭然だつた。

その誰かはこの距離から見ても分かる程全身真っ黒なのである。

そんな奇異な姿をしている存在なんて――

「私が泥棒くらいなものだらうなあ」

私ではないので、つまりあの黒いのは泥棒である。

そう結論付けた魔理沙は縁側を見下ろせる上空へと滯空すると、そのまま暫く黒い存在の動向を監視した。黒いのは物珍しげに周囲を見回していたが、その視線が空へと向つた所で此方の姿を捉えた。一

体あれは何だと、そう思っているのかも知れない。けれどその視線は、何処か焦つているようにも見えた。

——いよし。

「初めまして、だよな。泥棒さんよ」

「……」

そこでようやく私は黒いのが『少女』であること気に付く。

黒髪黒目の、如何にも人間らしい少女だつた。黒に紫で様々な動物をあしらつた着物、綺麗な文様が施された帯……何より彼女の頭で光り輝く髪飾りが、この少女の平凡性を醸し出していた。今まで出会つてきた誰よりも人間の少女らしく、また誰よりも泥棒するイメージが沸かないと言えば分かり易いだろうか。その証拠に、少女の瞳には罪悪感やそれといった物が見えない。

けれどその視線は、確かに一度居間の方へと向つたので。「言わせて貰うが、この神社には目ぼしい物は何も無いぜ。中から出てきたんだから分かるだろうが、白米三合と味噌少しど胡瓜四本しかない家だ」

「えーと——」

「おつと、懐柔するつもりなら諦めな。私はお前を止めたつて名目で、このまま此処で朝ごはんを頂くつもりなんだ」

少女は今度こそ焦つた。そりやそうだ、誰だつて撃退されるなんて思いはしないだろう。

彼女には申し訳ないが、此処は大人しく私の為に犠牲となつて貰うことにする。

八卦炉を取り出した。

「被弾一回、スペカ無しの勝負だ。良いか？」

「……」

少女は訝しげな視線で私を見た。どうしようかと、そんな瞳で。

まさかとは思うがこの少女が自分よりも強いということはないだろう。それは言い換えれば、つまり博麗靈夢や私達に負けた者達よりも強いということになる。そんな存在を知らない訳はないし、だからこの勝負の勝利は私にとつて搖ぎ無い物なのだ。または、それを理解し

ているから挑むのと躊躇っているのか。どちらにせよ、逃げ道は塞いでやらなければならない。

「受けないってんなら、私は今直ぐ靈夢と萃香を起こしてくるぜ」
博麗靈夢と伊吹萃香。この二人を知らずして、此処へ盗みに入ることはない。

それは逆に言えば、少女の想定外を起こすと言つているのだ。

「……分かつた」

「よし、じゃあこいつが落ちたら開始な」

不承不承といった感じで頷いた少女に、靈夢にあげる筈だつた毒葦を取り出す。

空中へと放り投げた。

「……」

「……」

「果たして——

博麗神社に入る度胸のあるこの少女は、一体どれ程強いのか。

落下していく葦ばかり眺めて此方へ見向きもしない黒衣の少女。

その、初動は。

落下

「よつと！」

まずは小手調べとして、少し幅を広げたランダムと規則を入り混ぜる。

弾幕ごっこでは通常弾幕と呼ばれる部類の攻撃だ。これ単体で相手に被弾をさせることは難しいが、今は被弾一回で負けという条件である。規則性に慣れ始めた辺りでランダムに引っ掛けかってくれればそれで良い。そんな軽い気持ちで私は弾を発射した。

対して、少女。

自身に迫つてくる弾幕を眺め、ただ突つ立つてゐるだけだつた。

飛翔も、反撃も、移動もしない。

やる気はあるのかと、そう声を荒げようとした瞬間にそれは——

弾け飛んだ。

「つ、んな——」

例えでもなく、嘘でもなく、唯風船が割れるように簡単に。

少女はその姿を数千の鳥へと変えて飛び立った。

「……もしかして夢でも見てるのか？」

有り得ない話ではない。笑えない夢ではあるが、現実であるよりはマシだ。

私は自分を無視してどんどんと上へ飛んでいく、その鳥達を眺めて

黒衣の少女を眺めていた。

「うつ、」

「てい」

わあ、とそう声を上げる暇もなく。

目の前を過ぎる筈だつた鳥が突然先の少女へと変わり、その小さな両手で私の両肩を突き飛ばした。あまりにも唐突で、更には反撃が来るなんて思いもしなかつた私の身体はそれだけでバランスを崩す。崩して、ついつい箸を掴んでいた手を使ってバランスを取ろうとしてしまい——

落ちた。

それはもう、見事といつて良い程に。

「どわああああああああつ！」

ドグツ、と聞きたくないような鈍い音がした。

◇

博麗神社で迎えた朝は呆れかえる程清々しかつた。

「……んむ」

ついつい間抜けな声が口から漏れてしまう。既に封印から目覚めて一度、紫の家に泊まらせて貰つたが、此処までゆっくり休むことは

出来なかつた。やはり他人の家で寝たというのも関係していたのだろうか。とりあえずは布団から出て、まだ隣でぐつすりと眠つている靈夢を起こさないように布団を畳む。畳んで、それを部屋の隅に置いてから部屋を出て――

ギュムと、変な物を踏んだ。

下を見る。

「……何やつてんのさ」

ぐがあと、その身に似つかわしくないイビキを発する萃香の姿。まさか昨日居間で酒盛りをしてそのまま此処で寝たとでも言うのだろうか。

仕方ないのでそうつと跨ぎ、スルスルと襖を閉める。
さて――

「朝御飯でも作るかな」

「初めまして、だよな。泥棒さんよ」

少し高いところから私を見下ろしているのは白黒の服を着た金髪の少女。

どうしてこうなつたのだろうか。

朝御飯を作ろうとして、博麗神社の台所事情に軽く驚愕をして材料を取りにいき、何とか朝食を作り上げた。……此処までは良い。そうして今が七時前であることを思い出し、弱火にかけつつ靈夢達が起きてくるのを待つ為に縁側へ出ようとして、私は泥棒と間違われただ。

……というか、寧ろ彼女の方がそれっぽい格好をしているのだけど。

そこは長年の勘で口には出さない。荒事を出来るだけ避けるのが死なないコツである。

「……」

しかし困つた、どうやら彼女は靈夢の知り合いであるらしい。

一度チラと居間の方を見て、そこに三人分の朝食しか用意していないかつたことを後悔。勿論靈夢からそんな友人が居るという話は聞いていないので知つていろいろという方が無茶なのだが、それでも一言教えてくれれば用意することも出来た。こんな朝早くに来たのだ、当然彼女だつてまだ朝食も食べていない筈で――

そんな私の考えを知つてか知らずか少女はニマリと笑う。

「言わせて貰うが、この神社には目ぼしい物は何も無いぜ。中から出てきたんだから分かるだろうが、白米三合と味噌少しと胡瓜四本しかない家だ」

知つてる。言わせて貰えば、胡瓜は一本駄目になつていた。

けれどそれを知つているということは、間違いなく彼女は靈夢の友人であつて。

「えーと――」

「おつと、懷柔するつもりなら諦めな。私はお前を止めたつて名目で、このまま此処で朝ごはんを頂くつもりなんだ」

両手を広げてキッパリとそう告げた黑白の少女。

本当ならば感心したり褒めたりしたい所ではある。だが、そんなことよりも――

この流れは、不味い。

「被弾一回、スペカ無しの勝負だ。良いか?」

奇妙な物体を此方に向けつつそう言い放つ少女を見て、私は内心で頭を抱えた。

そう、この流れは当然泥棒退治一直線である。つまりそれは彼女が私と戦うという訳で、そうなるとやはり『すべるかーどるーる』に則つて『だんまくごつこ』というのをやらなければならぬのだ。しかしそこが問題なのではない。泥棒と勘違いされることよりも攻撃されることよりも、こうやつて勝負を持ちかけられることが不味いのだ。だつて、私は弾幕ごつこを知らない初心者なのだから。

紫は靈夢に聞けと言つた。けれど昨日は遅かつたから、今日改めて聞こうと思った。

だけどまさか早朝から挑まれるだなんて、誰が予想出来たというの

だろう。

「受けないつてんなら、私は今直ぐ靈夢と萃香を起こしてくるぜ」「そんな葛藤は当然伝わる筈もなく、魔理沙はそういうつて神社に視線を落とした。

確かにそれも、一つの解決方法ではあるのだが。

「……分かつた」

けれど私は彼女の勝負を受けた。ぶつつけ本番で弾幕ごっこをやることに決めた。

だつて、絶対に笑われるし。

「よし、じゃあこいつが落ちたら開始な」

そう言つて彼女が取り出したのは茸——タマゴタケ。

宙へ放り投げた。

「

あ、と声を上げようとしたがもう遅い。

タマゴタケは食用の茸だがその性質上非常に脆く原型を保たせるのが難しい。その分旨みも香りも強くて美味しいのだが、採取から調理まで一筋縄ではいかない食材もある。それを空中に投げてしまえば——もうどうなるかは分かるだろう。ボロボロと所々が欠け落ちて、そうしてもう食べられる状態ではなくなつてしまつた。しかもこれから地面に落ちようとしているのだ。
救いようがない。

そして落下。

隠れた美味、タマゴタケはその身を地へと散らした。

「よつと！」

そんなことはお構いなし、とばかりに少女は大量の玉を射出する。
——つ、弾幕ごつこの最中だった。

「……」

そして改めて考える。弾幕ごつことは、どういうルールなのか。
被弾一回と彼女は言つた。

すぺか、というのは恐らくスペルカードの事なのだろう。これは無しと。

そして彼女は現在進行形で、私に向けて攻撃を放っている。

……よし、大体掴めた。

つまりは相手の攻撃を避けつつ相手より先に攻撃を当てる、そういう遊びなのだ。

だから私も妖術で鳥を生み出し、その中に紛れて彼女の居る上空へと飛翔した。

弾を避けつつ、他の鳥達もぶつけないように。

そして――

「全く、そなうそなうと言つてくれれば良かつたんだ。靈夢ん所に住むことになつたんなら、霧雨魔理沙さんのことも当然聞いていたんだろう?」

「聞いてない」

「話していないもの」

「……」

靈夢がそう端的に答えると、魔理沙は恨めしい顔をして靈夢を見つめた。

現在食卓に座っているのは三人。私と、靈夢と、魔理沙である。本当はそこで転がっている萃香の為に作った朝食は、隣に座る魔理沙の『冷めちゃ勿体無い』という必死の説得によつて彼女の目の前にあつた。……まあ、無理に起こして食べさせる必要もなかつたので、結果としては良かつたのだろう。次からはちゃんと四人分作つて置くこ

とにする。

山菜となめこの入った味噌汁を啜り、一息。

見れば、既に靈夢と魔理沙は朝食の入った器を空にしていた。

「はあー……久し振りに手が加わった物を食べたぜ。おい靈夢、ひよりつてまさか?」

「ええ、うちに住んでるわ。掃除担当が私で食事担当がひより。ちなみに昨日の夕飯は——」

「いや、言うな。言つたら最後お前の家に住み込むからな」
空になつた器をチラと見て宣言する魔理沙。どうやら彼女も余り料理はしないようだ。

彼女は『魔法の森』という場所に居を構えている魔法を使う人間らしい。魔法の森……恐らくは私が眠つている間にそういう因果を持つてしまつた森なのだろう。覚えのない場所だが、魔理沙からの話を聞く限り食料の調達には困らない場所のようだ。彼女の他にも『あります』という魔法使いや、香霖堂なる建物も存在しているとのこと。今度行つてみようと、そう密かに心の中で決める。

するとそれを見越したかのようになつて靈夢が此方へ視線を向けた。

「ひより、アンタはとりあえず弾幕ごっこを覚えなさい」

「えー……」

「えー、じゃない。現代のルールには従つて貰うわよ。ちなみに分裂も物理攻撃も駄目。……まあ、どつちも弾幕としてなら例外はあるけれど」

うんうんと頷く魔理沙と靈夢を交互に眺め——内心で冷や汗を流す。

先の魔理沙の弾幕を分かつたことだが、あれは鳥になつて避けていたからこそ良かつたけれど、本来なら生物が通り抜けられるようなスピードなどないだろう。いや、多分彼女達からしてみればあるのだ。けれど私にとつては何処からどう見ても弾の壁であり、その中から時折不規則に飛び込んでくる弾丸は厄介以外の何物でもない。唯一の売りである不意討ちも、直接的な攻撃や分裂を封じられてしまうどうしようもない。

どちらかと言えば私は相手の動きを分析して先読みしていく戦法なのに。

『多種多様なスペルカード』を、皆それぞれ持っていること。

「……はあ」

「勿論私だつて手伝うぜ。朝食までご馳走になつちまつたしな。それに、ひよりに聞きたいこともあるし」

昔の紫や萃香のこととかな、と言つて悪い笑みを浮かべる魔理沙。きつと理由がなくても手伝つてくれたのだろうが、それを付けたのは彼女なりの礼儀か。

彼女はスッと右手を差し出した。

「霧雨魔理沙。ま、仲良くやろうぜ」

「……ひより。よろしく」

当然のことながら、この日は夜まで弾幕ごっこに付き合わされる破目になつた。



「あら、じゃあ弾幕ごっこは出来るようになつたのね。おめでとう」

ズズズ、と湯気を放つ湯呑みからお茶を啜り紫が言う。

靈夢と魔理沙の弾幕指導から四日、丁度それくらいの時間が経過していた。本来であれば基本的なルールと流れだけ説明して実践形式——の筈だったのだが、私が『空を飛ぶことが出来ない』という問題が見つかつた為にこの内の二日間は飛行の基礎練習をしていたのだ。動物の姿になつて弾幕を避けることが許されない以上人の姿で飛ばなければならぬのは当然であつて、別にそこに関しては文句はない。……けれど、まさかあそこまで自分が飛べないとは思わなかつた。博麗神社の石畳が頭をぶつけ過ぎて碎けてしまう程といえば分かり易いだろうか。ちなみに例え話ではない。

そうして何とか靈夢から外出許可を貰える位には出来るようになつて。

だから私はこうして紫の家で紫とお茶を飲んでいる。

——訳ではない。

「それで、最初は何処へ行くつもりなのかしら？」

「……そう、だね」

つまりはそういう話。目覚めたという報告を、誰から伝えていくのかという話題。

けれどこれに關しても一筋縄ではいかないのだ。

長らく待たせてしまつたぬえや、何故か私を待つてゐる幽香。結局何も言わずに別れてしまつた妹紅や、全てを話した上で無理矢理納得させた輝夜。ぬえは兎も角、他の三人は出来れば代理を立てて報告したいくらい気が進まなかつた。……嫌いな訳ではない。嫌いな訳ではないが、一悶着以上あるのは間違いないのだ。痛いのも怒られるのも嫌である。

しかしそれでも、順序をつけるとするならば……

「妹紅の所かな」

内心で輝夜の所もあるけど、と付け加えて。

幽香は大丈夫、彼女の性格からして多少の遅延は気にしない。
ぬえは端から心配などしていない。

私が彼女達を優先する理由は——

「妹紅には黙つていたからかしら?」

「……まあ」

全てを話したから、とも言えるのだけれど。

特に輝夜の方はそこはかとなく不安だつた。私は輝夜をよく知つてゐるからこそ分かるが、本来彼女はこういった世情を尊重する性格ではない。あくまで自らが生きる上で楽しく退屈をしないかが重要なのだ。そんな彼女にとつて眞実を知りつつも手を出せないという状況は、ストレスにこそなれど、楽しみに転換できるなんてことはある筈もなく。

それを彼是一千年前程続けて。

本当に、もう何時爆発しても可笑しくはないのだ。

「ちゃんと謝らないと、ね」

そう言つて隣を見ると、紫はそうねと言つてクツリと笑つた。

「大丈夫よ、きっと。だつて、親友なんでしょう？」

「別に親友は関係ないけど。……ま、そうかな」

または爆発の矛先が『お互いへと向かつた』か。

……嫌な予感。

「ね、紫——」

「分かつてるわ。……それで、居場所の検討はつくのかしら？」

湯呑みを片付けに来た藍にお礼を言い、紫が開いたスキマの正面へと立つ。

これはあくまで勝手な推測だが、輝夜が一千年も私を起こさなかつたのは何も私の言葉が原因ではなかつたと思う。少なくとも何回か、永琳の静止を振り切つてでも動こうとしてくれた筈だ。けれどそれが功を奏していないうことは永琳以外の抑止力があつたということであり、それは、少なくともてゐではないだろう。

だとすれば、もう一人。

『輝夜姫、今も何処かで生きてるよ』

彼女の存在を知る同じ存在が、もう一人だけ。

だから間違いないだろう。

『迷いの竹林』へ、お願ひ

開かれたスキマの向こうに映る竹林群は、あの時から変わらずそこにあつて。

「宜しいのですか？・紫様」

スキマへと飛び込んだ少女を見送った後、背後から聞こえた声。

私はスキマを閉じ、何時の間にか湯呑みを片付けて立つていた藍を振り返つた。

「何がかしら?」

「ひよりを竹林に行かせて、ですよ。あそこはまだ全體像も把握できていない未開の地じゃないですか。何があるのか、それこそ検討も——」

「本当に?」

そういうと、藍は一瞬だけ言葉を詰まらせた。

——空気が一巡して、再び口を開く。

「……ひよりの言う『三人目の親友』が居るのは明らかです。紫様のスキマにも感知されない存在が少なくとも一人、あの竹林に居る」「そうねえ……」

藍から視線を外し、考える。

暫くあの蓬萊人の姿も見ていない。もしも幻想郷に残っているとするならば、やはり彼女もあの竹林に居ると考えるべきか。そして出でこないという事は、彼女にとつてひよりと並ぶかそれ以上の理由がそこにあるということである。けれど、妖が跋扈し人々が争い続けてきた時代から生きている彼女があの場所に留まる理由については……やはり、検討もつかなかつた。

検討はつかなかつた、が。

「少なくとも千年の間は大人しくしていたのよ。その理由が何であれ、ひよりを助けに来なかつたのであれば信用出来る。この場合に限つては、ね。……それに、貴方だつてひよりの友人を信用していない訳じやないんでしょう?」

「それは、まあ。人によりますが」

苦々しい表情、恐らく彼女は脳裏に妹紅の姿を思い浮かべたのだろう。

素直じやないと苦笑する。

「なら大丈夫。きっと丸く収まるわ

「ですが——」

尚も食い下がる藍の次の台詞は、自然と私の口から先に漏れ出た。

『一波乱あるのでしょうか?』

「……」

実際の所どうなるかは分からぬ、そう次いで答える。

相手が未知数である限り、その波乱の大きさもまた未知数である。幻想郷を霧で包むか、春を奪うか、はたまた無理矢理宴会を開かせ続けるか——それ以上か。ひよりが目覚めたことによつて動き始めた物に関しては、私は何も先読みする術を持つていないので。私達に出来ることは、彼女しか知り得ない場所で起きた『様々な出会い（エクストラ）』から生じる良いことや悪いことを見守つていくだけ。

それは例えば異変の前触れであつたり

または予想もしなかつたような出会いであつたり

そして幻想郷全体に渡る変化でもある。

「幻想郷は全てを受け入れる。それを実現出来るかどうかは、私達次第なのよ」

幻想郷始まつて以来の大騒動もきつとある。

その度に靈夢や魔理沙も巻き込んで、藍にも迷惑をかけてしまうだろう。

「……いいえ、実現させる」

それでも見据えた先に、彼女が夢見た理想があるような気がして。



ザクザクと音を立てて筐の葉の道を歩いていく。

紫に送つて貰つた私は、とりあえず昔輝夜に見送つて貰つた通りの道をそのまま歩いていた。此処が不朽の竹林群であることは知つてゐるし当然成長はしているのだろうが、とりあえずは誰の手も借りずに歩いてみようという算段である。足元を埋め尽くす筐の葉はどうして昔から変わらず増えないのかとか、そんなどうでも良い事を考えながら。竹に突き当たつては少し避け、筍に躊躇つては道を変える。それの繰り返し。

もしも辿り着けなかつた時は、また蠱毒を遣わせてみるのも良いだ

ろう。

まさかあれから住人が増えたなんて事もないだろうし――

「――ん」

ガサリと一度、横の竹林が揺れたと思つて

「ふはあつ……全く、どうしてこん……な……」

「……」

長い兎耳に、同じく長い紫の髪。

そうして赤い瞳を此方に向けた彼女は、どう見ても私の知らない誰かだった。

『永遠の変化』

月面戦争という史実が一千年程前から月には存在していた。

その概要を搔い摘んで説明するのであれば、恐らくは月に対する最初で最後の地球からの侵攻。何の予兆もなく唐突に現われ、そして影も形も残さず逃げていった魑魅魍魎との争いの記録。編纂したのは、当時月で未知の脅威への対処を担当していた綿月依姫と主に行政へのご意見番を勤めていた綿月豊姫、その人である。彼女達の伝えた事実は月に大きな震撼を与えた。月でも指折りの実力を持つ依姫とそれを最大限援護出来る二人を以つてして『脅威』であると、彼女達はそう結論付けたのである。この事実は当時の軍部内でのみ伝えられ、二人が相手をした侵攻者が残した『傷跡』の残る場所には、一般人はおろか研究者ですら近付くことは許されなかつた。それだけの影響を、ソレはばら撒いていつたのだ。

そして私……鈴仙・優曇華院・イナバもまた、当事者の一人だつた。

——という訳ではない。

当時この戦争が勃発した頃の私はまだ一兵卒にも満たない見習いで、そもそもこんな戦争があつたことすら知られていなかつた。それは軍部に所属してからも同じで、私はおろか上司やそのまた上司までもが知らないような情報だつたのだ。これを知つた当時はどうして黙つていたのかと、そう思つたことも無い訳ではない。——けれど、それを思い直すことになつたのもまた、その史実を知つた直後で。「レイセン、これが当時の記録係が撮影した映像だ」

そういつて私に手渡してくれた上司、綿月依姫の顔は今でも忘れることは出来ない。

彼女は申し訳なさそうにこう言つた。

「相応の立場であるお前には見る権利がある。同時に、見ない権利もある。知らない方が幸せになれることがだつてあるのだから。……けれど『知るべきではないことを知ることは罪』だ。その選択権は、君

にある訳なのだが

結局私はその媒体を受け取り、そして全てを知る。

一度も想像したこともない地球に住む穢らわしき妖怪達の姿を。それ等を処理する為に出向いた上司、綿月依姫の後ろ姿を。

そして――

そして彼女達が脅威と認めた、その黒き穢れを放つ少女を。

畏ろしかつた。

撮影されたのは戦場の遙か後ろ、照準越しでなければ姿すら見えない程の距離からの撮影だというのにそれは今でも脳裏に焼きついている。剣を交えながら後退していく依姫と豊姫、その二人からの指示で光線銃を放つた玉兎達。体勢を崩し、そのまま依姫の能力とフェムトファイバーによつて動きを封じられた首謀者の少女。

そして見る。

糸を崩して刀を腐らせ、そうして立ち上がつた異形の怪物を。その一対の瞳らしき物がカメラの方を向いて――

何も映していなかつた。

光線を放つていた玉兎達は初めから、彼女の視界には入つていなかつた。

否、そもそも生命として認識されていなかつたのである。これは駄目だと、そう思つた。

だつて、自らを殺すために攻撃を放つていた者達に何の感情も抱いていないのだ。故に、きっと彼女は躊躇なく殺しちだらう。玉兎を、月人を、依姫を、豊姫を、私を。自分が認知していなければ、それは『生きていても死んでいても同じこと』なのだから。

だから綿月依姫は私に言つたのだ。

『知らない方が幸せでいられることがある』と。

自分が生きていても死んでいても同じことだなんて、知りたい者が居る訳がない。

後々になつて調べてみれば、彼女と直接視線があつたように『感じた』者達は皆使い物にならなくなつてしまつたらしい。それもその筈、それは殺される」とよりも辛く厳しい宣告である。例えば地面を歩く蟻が踏み潰されるように、存在すら否定されたまま消えるというのは――

当時の私を、どうしようもなく絶望させて。

そして同時にレイセンを殺した。

照準を覗けなくなつたのも、その影響の一つ。

人間の月侵攻の度にそれを思い出し、そうして、私は――

月から逃げ出した。



テープを渡した依姫の顔を、私は今でも忘れるることは出来ない。

眼前に立ち尽くす女性に、少なくとも私は見覚えがなかつた。その紫の髪も長く先端の曲がつた耳も、自身の知る兎妖怪の姿とは大分違う。……いや、億が一だが彼女という可能性も否めないのであるが、まあないだろう。高々一千年ちょっとであのてゐがこんな姿になるとは思えないし、そもそも彼女なら出会い頭でも軽く冗談を飛ばしてくる程のお調子者であるのだから。それに対して眼前の彼女は、驚愕と焦りの混じつた表情で此方を見るだけに留めている。留めてはいるがそこから動こうとはしていない。

その身体は微かに震えているようだつた。

「……ん」

そして気付く、自身に向けられた感情の正体――『畏れ』

初対面で私を恐れる相手なんていないので、つまり彼女は何処かで

私を知つたという事になるが。

それがさつぱり分からぬ。

「ねえ

「つ、！」

声を掛けたら物凄い勢いで下がり——尻餅をつかれた。

……それを見て段々と理解が追いついてきた。此処まで過剰に反応するということは、彼女は何處かで私の本気を見ているらしい。そしてそれを見せた場所なんてのは極一部に限られる訳で、恐らく輝夜を迎えて来た使者の生き残りか紫と共に月へ行つた時にあの都に住んでいた者なのだろう。そのどちらにせよ死を直接撒き散らすような私に近付きたいと思う筈もないでの、この反応は当然と言える訳だ。

前者が此処に居て生きている訳がないので、恐らく後者。であるならば、彼女も輝夜の家族である筈で。

「……何もしないよ。もう帰る」

「え——」

私は長い兎耳の女性に背を向けて、元来た道を歩き始めた。本当は輝夜と妹紅に会いたかったが、彼女に場所を訪ねるのも酷という物だろう。

此処は大人しく、また別の機会にでも——

「ま、待つて！」

「……」

しかし呼び止められる。他でもない彼女によつて。振り向けば、彼女は若干後悔したような顔持ちで立つていた。

「わ、私は……」

それでも、先のような畏れは消えて

彼女は初めてその紅く綺麗な両目を私へと向けた。

「……私は鈴仙（れいせん）。永遠亭に住んでいる、玉兎よ」

私は一体何をしているのだろうか。後ろに居るであろう少女に意識を向け、溜息を吐く。

よりもよつて彼女——自らが地球へと逃げてきた理由を招き入れた理由が分からぬ。今でも本能は注意を促してきているし、身体は何時でも逃げ出せるように浮き足だつてゐる。そして彼女はそんな私の態度に気付いてゐるのであろう、けれど決してそれを口に出そうとはせず唯後ろをついてくるだけ。拍子抜け……というのも些か変ではあるのだが、それでも彼女が何もして来ないのが不思議で仕方なかつた。

……いや、理由は分かつてゐる。

『そうねえ、確かに貴女の言う通りひよりは多分身の回り以外の誰が生きて死のうが関係ないんじやないかしら』

『なら——』

『でも、それは私や貴女も同じよイナバ。それとも貴方は、月にいた頃地球の人間達の生き死にを気にしていたの?』

自分の事だけで手一杯になるのは当然だ、と蓬莱山輝夜は言つて笑つた。

その屈託のない笑顔の所為で、多分今も私は逃げずに彼女と歩いているのだろう。

ザクザクと二人分の足音が竹林に響く。

「——れ」

「つ——な、なに?」

「……」

「鈴仙は、何時から此処に?」

「……五十年前、だけど」

そう、丁度それくらいの時が経過していた。

月では然程意識せずとも経過してしまう時間が、あの映像を見た日から人間のそれと変わらない位細かく私の中で刻まれていた。今は時間が空く度に何か考えごとをしてゐる。黙つて上司である依姫の元を離れたこと、未だ自分の知り得ない地球の様々なこと、そして——何時までこの場所に居ることが出来るのかということ。
多分私は明後日の満月に此処を去ることになるのだ。

筈なのに――

『貴女が此処へ逃げて来た理由は知つてる。けれどそれって言い換えれば、『まだ生きているのに殺された』のが不満だつたんでしょう。つまり貴女はひよりと出会うまでは死んでいた……違う?』

此処五十年の間は、毎日が月とは比べ物にならない程の密度に感じられた。

けれどそれを最初に感じるようになったのは、輝夜の言う通りあの時が初めだった……と思う。

月に居た頃は死んではいなかつた。が、生きてもいなかつた。

どちらでも同じことだと宣告したのは、後ろを歩いている少女ではなく私自身の心。

そして今、私は月への帰還という刃を喉元に向けられている状態なのである。

「お」

背後にいる少女の声に釣られて顔を上げる。見れば、見知った建物が視界に見えてきた所だった。

私は一度立ち止まり、そして背後へと身体を向ける。

少女は建物ではなく私を見ていた。

「……じゃあ、私が師匠に取り次いで来るから。ちゃんと待つてて」「ん、分かった」

少女が頷いたのを確認して永遠亭へ向かい――その中途一度だけ振り返つて動いていないことを確認し、そうして私は永遠亭へと足を踏み入れる。あの少女の元を離れても、私は胸を撫で下ろしたり、安堵の溜息を吐くことはなかつた。彼女に対するそういうつた緊張感や恐怖心は、どうやら何時の間にか消え去つてしまつたようだ。

『この年、この月、来週の満月を以つてして、私の退屈は終わりを迎えるの』

そういつていた蓬莱山輝夜の言葉の真意が、私にはもう見えていた

気がした。



『貴女が再び訪れるまでこの亭が永遠であることを約束しましょう』
『何時かまた合いに来る。その時は、永遠と程遠い変化を持つてくる
から』

一千年前、蓬莱山輝夜とひよりはそれを最後の言葉にして別れた。
それは、決して短い時間ではなかつた。人だけではなく妖怪も、その
生死や在り方を変えざるを得ない程に長い時間。人と妖怪だけに留
まらず都が、都だけでは收まらず世界全体の常識が移り変わる程の経
過。一千年という時間は、まさに生物において全てを殺しきる唯一の
存在なのだ。命だけでなく伝承を。伝承だけでなく噂を、語り継ぐ者
を、聞いた者を、忘れてしまつた者すら消えてしまう。この世界で自
らは消えることなく、他を消すことの出来る概念。

その対象外とも言える存在が、少なくとも世界には三人存在してい
た。

永遠亭とは、その内の二人が住処としている建物である。

八意永琳にとつてはその殆どが予定調和のような物だつた。

明後日への準備を黙々と続けていた集中力が『トントントン』とい
うノックの音で中断される。この竹林の中でそんなことが出来るの
は最近此処に来たあの子だけなので、まず彼女であることは間違いない
だろう。永琳は予測を書き連ねていた腕を止め、長時間座っていた
為に少しだけ重くなつた腰を動かすついでに立ち上がつた。

扉を開ければ、そこには既に見知つた顔と呼べる玉兎の姿が。
『鈴仙・優曇華院・イナバ』と、彼女はそういう立ち位置を与えられた
地上の兎である。

彼女が此処へ來た理由——当然のことながら分からぬ永琳では
ない。その垂れ下がつた耳と自己嫌悪を帶びた瞳を見れば、『彼女』が

鈴仙の案内の元この場所まで来たのは一目瞭然だからだ。……ただ一つ予想外なことがあつたのは、鈴仙がここまで落ち着き払つた状態で永琳の元へと訪れたこと。永琳の予想では、彼女は泣きながらドアを蹴破ると思っていたのに。誰かが何かをしたのか、彼女自身の心の変化か。まあ、悪いことではないのだ。然程気にすることでもないだろう。

だから永琳は予め決まつっていたかのように口を開く。

「通してあげて頂戴」

何を、とは言わなかつた。誰に、とも言わなかつた。

けれど鈴仙はそれだけ聞くと黙つて小さく頷き、そうして踵を返して入り口へと向かう。

扉を閉めた。

「……さて」

此処までは予想通り。蓬莱山輝夜の言葉を以つてすれば、この程度は造作もない。

ただ、それでも月の使者が来る可能性を永琳は考慮していた。恐らくはひよりも此方側についてくれるし、地形や情報量から考えても此方がかなり有利な戦いになるだろう。けれど、それでも、と。可能性が零で無い限り、出来うる限りの予測と準備をして置くのが最善だと考えているのだ。

果たすべきは、その可能性を零にする為の方法を作り出すこと。再び椅子へと腰を降ろしてペンを取る。

その直後、背後の扉越しに誰かが廊下を歩いていく音を耳が捉えた。

「……」

ペンを動かす手は止めない。ただ、意識だけを背後へと遣る。

パタパタと、表現をするならそんな軽い音。鈴仙や輝夜のようではなく、てゐのような忍び足でもなくただ単に廊下を歩くだけの音。何の変哲もないそれを、永琳はこの時久し振りに聞いたのだ。ああそ

いえばこんな感じだつたなと思わず意識だけでなく手まで止めてしまって。今正に自身の部屋を通り過ぎようとしている彼女に、けれど永琳は声を掛けようとはしなかつた。

——しかし、足音は扉の前辺りで一度ピタリと止まる。

そして再び歩き出したようだつた。

「……また、騒がしくなるわね」

本当に聰明な少女だ。そう関心しつつ一人呟く。

もしも此処で私の顔を先に見よう物なら、輝夜はそれを許そうとはしなかつただろう。

どうやら彼女はお咎めなしで輝夜との再会を終わらせたいらしい。

……が

「それは難しいんじやないかしら？ひよりさん」

既に去つてしまつたであろう、彼女を思い浮かべて言葉を投げかける。

例えば輝夜がひよりと別れたままの輝夜であれば何とかなつたかもしれない。或いは、鈴仙と出会わなかつた輝夜ならば許したのかかもしれない。けれど輝夜は妹紅と出会つてしまい、鈴仙を家族と認めてしまつた。永遠にするつもりだつた物が崩れてしまい、輝夜も変わらざるを得なくなつてしまつたのだ。

それはもう一人の蓬萊人にも言えること。彼女もまた、この千年で随分変わつた。

そして今は新しい家族が変わることを迫られている。

「……その後押し位は、私でも出来るかしら」

ひよりに任せつきりというのも些か格好が悪い。やはり自分の家

族は自分で守るべきだろうから。

止まつていた腕は何時の間にか動き出して。

これはあくまで当時の理想だったのだが

私は輝夜と妹紅が良好とまでは言わずとも、それなりに気の合う友人になると直感していた。

「……」

パチリと桂馬が不規則に飛ぶ。

「……」

パチリと今度はそれを邪魔するように金が置かれる。

パチリ、パチリと。

白髪の少女と、それに相対するような黒髪の少女が腕だけを動かしてしていく。

私はそんな二人の間、盤を横から眺めるという役を担当していた。言い換えれば、この勝負が終わりどちらかが敗北するまで待つていてくれと言われたのだ。てっきり開口一番怒鳴られ投げ飛ばされるくらいを予想していた私にとつては願つてもないことだつたのだが、しかし勝負を始めてみればその言葉は取り消さざるを得なくなつた。明らかに可笑しい。少なくとも、駒の一つである王将が『輝夜』と『妹紅』になつている時点で異常はひしひしと伝わつた。それに加えてこの真剣さ加減、そこから導き出されるこの勝負の内容とは、つまり――

いや、まさか今でも殺し合いなんかしてるとは思わなかつた。

そんなものは最初の百年足らずで終わると思つていたのに。

「初めて見ると面白いっしょ？」

そんな私に声を掛けてきたのは私が来るまで審判を務めていたてゐ。

「お前さんの持つててくれたトランプやら囲碁なんてのはもう飽きちまつたつてんで、今は文字通り『命をかけた将棋』の真つ最中つて訳さ。勝つた方が負けた方を無抵抗のまま好き放題殴るつつールールなんだけど……まあ、守られたことは一度もないねえ」

「……お疲れ様」

つまり最初から審判など必要ない勝負なのさとてゐは笑う。

「まあでも、唯殺し合ふよか全然良いと私は思うけどね。輝夜も妹紅も蓬莱人ではあるけれど、それが『死んでも良い理由』にはならないし」

それは確かにその通りだ。

——ふむ。

「輝夜、妹紅」

「……」

「……」

パチリパチリと駒を動かし続ける一人に向けて口を開く。

「忙しいみたいだから帰るよ」

——腕が止まつた。

そして溜息。勿論二人分綺麗に重なつて。

「……はあ、やめよ。今日は機嫌が良いから勘弁してあげる。ほら、とつとと帰りなさい。私はこれからひよりと大事な話があるから」「前半については概ね同意見だけど、帰るのは私とひよりだ。どうせ遅いだの何だの言うだけなんだから、お前は後でも良いだろ」

バチバチと二人の間で火花が散る。幻覚ではなく、多分本当に。

「ふん！」

「けつ」

犬猿の仲というには、些か争い合う程度が幼稚というか何というか。

——でもまあ、上手くやれているようで何よりである。

「ただいま、一人共

私はあえてどちらに話かけることもなくそう言つた。

封印される前、私が妹紅に放つた言葉の真意はちゃんと伝わつていいようだ。少々考えさせられる関係ではあるけど、それでも二人は仲が悪いという訳ではない。少なくとも盤を挟んで遊べる位には互いを許しているのだ。ならば、それ以上は私が何かを言うべきではない。きっと時間は掛かるだろうけれど、それでも二人は最終的に仲良くなるだろう。

ほら、その証拠に。

「おかえり、ひより」

予感はすぐさま確信へと変わつて。

◇

蓬莱山輝夜は上機嫌だった。

その理由は多々あれど、まず第一にあがるのは待ちに待つた親友の帰還だろう。本来ならばそれだけでも充分お釣りが来るのだが、しかし輝夜には他にも喜ぶべき理由があつた。今ひよりを挟んで反対側にいる蓬莱人を加算してもいい程の、だ。

それはつまり、ひよりが戻ってきたことにより動き出す周囲のこと。

彼女が戻ってきたのなら、此処はもう永遠である必要はない。

「ねえ、ひより。少し相談があるの」

「ん」

場所は竹と竹や竹のような物が一望出来る縁側。夕陽は沈み周囲が暗くなり、月が上り始めたであろう辺りの時刻。私とひよりと妹紅はそこに座り、三人とも思い思いに時間を過ごしていた。私は竹を見ていたし多分ひよりも竹を見ていたし妹紅も竹を見ていたのだろうが。私が声を上げたのは数分ほどそうし続けていた最中、丁度竹観察に飽きた頃である。

問い合わせに二人分の意識が此方へ向く。意外にも、妹紅は黙つたままで。

「鈴仙にはもう会つたかしら？なんていうかしょぼくれた雰囲気の子なんだけど、その子を迎えて明後日の満月に月から使者が来るのよ」「……それで？」

「大事な家族なの。追い返すのを手伝つて頂戴」

此方を見つめるひよりと視線が交錯する。ほんの一瞬、けれど考えるには充分過ぎる時間。

ひよりは肩を竦めた。

「嫌われるみたいだつたけど」

「あれは自己嫌悪みたいな物よ。ひよりを嫌いな訳じゃないわ」

『いいよ、手伝う』と、そう言つてひよりは視線を正面へと戻す。
さて――

「妹紅は何時輝夜と会つたの？」

「ん、割とすぐだよ。ひよりと別れて四年経つたかそこいらつて、そんな感じ」

今度は妹紅とひよりの会話に耳を傾ける番。意外にも妹紅が私とひよりの話の最中黙つてしまつていたので、必然的に私も大人しく聞く義務があるだろう。

「で、どう？ 輝夜は」

「まるで駄目だな。世間知らずで高慢チキ、おまけに短気で飽きやすいときたもんだ」

「なつ――」

ニヤリという擬音が似合う笑みを浮かべて此方を見る妹紅。

勿論黙っている訳もなく――

「どうした、輝夜。何か言いたいなら言つてもいいんだぜ？いや勿論、私だつてさつきの話に興味はあつたけどな。再会したばかりの会話を邪魔しちゃ悪いと思つてね」

「ぐ、ぐくく……！」

なのに立ち上がりないでいた。なんとなく、そういう流れであると悟つたのだ。

今回は、多分私が折れてやる番なのだろう。今にも動き出してしまいそうな両膝にそう語りかける。

「仲良くなれると思うけど」

「……ま、それについてや否定はしないけどさ」

そんな事を考えていたからか、笑いあう二人の遣り取りを聞く事は出来なかつた。

けれど此方をチラチラと見る妹紅を見る限り、どうせ録でもないことを話していたに違ひない。

しかし――

「……此処暫くは、あんまり人前に姿見せないようにしてゐる」

不愉快な笑みは、次の瞬間には消えていて。

「彌里と最後まで顔を合わせられなかつたから、かな。何となく気が進まないつていうか、その……怖いのかも、しれない」

そうして見せた表情は、私の見たことのない後悔と悲哀に満ちた表情で。

少なくとも私が妹紅と出会い、殺し合い、時に両者動けぬまま言葉を交わした時には見せなかつた表情だった。そして、年相応の弱々しさを見せる妹紅を見るのも初めてだつた。あれだけ口が悪くて、私にだけ高圧的で、何故か勝手にこの竹林に住み着いている彼女が唯一信頼出来ると考えているのであろうひよりの前で見せたのは、再会の喜びや感動ではなく——自責の念。

何故か、私は胸を締め付けられるように感じた。

普段は多種多様な手を使つて悔しがる様を見ようとする相手に、だ。

「妹紅」

「つ」

そんな妹紅にひよりが声を掛けた。たつたそれだけで、彼女の肩は大きく揺らぐ。

「これ」

グイと、半ば無理矢理顔を掴んでひよりは妹紅を抱きしめた。

「——つ！……これって」

「そう、彌里の」

彌里。ひよりの娘であり、妹紅を師としていた人間の少女。

流石にこの時ばかりは私もそれを唯の帶だと思うことは出来なかつた。ひよりの娘がひよりの為に、一千年という年月を超えて残したものなのだから。月でも短いとは言えない時間、地上の様々が変わつても残り続けたのであろうそれは、多分私がひよりにあげた髪飾りと全く同じ意味を持つ物なのだろう。もし、一つ違うとするならば——

あの帶は、ひよりにとつてだけでなく

「つ、そう、か……っ！」

「……」

妹紅にとつても大切な物であるという事。

帶に顔を埋めてエグエグと泣く様は誰がどうみても無様で、普段なら軽口の一つや二つ出るのだけれど——やはり、そういう気分にはなれなかつた。

だつて、多分それは私にとつての永琳やてゐや鈴仙であつて
そしてやはり、ひよりの大切な物でもあるのだから。
ひよりが口を開く。

『神狼』

「——あら」

ボウンという音と共に現れたのは巨大な白銀の狼。一度も見たことのなかつたその姿に、私は思わず声を漏らす。

とても美しい狼ね、と。そういう為に口を——

「う、ううう……お前も居たのかあ……」

「これも彌里から

「……つ、あんたねえ」

今度は即座に帶から顔を離し、すぐ隣に立つ狼の身体へと埋めて泣き出す妹紅。

ヒクリと、間違いなく頬が引きつったのを私は理解した。

妹紅に悪意がないのは分かつてゐる。彼女にとつてはひよりと顔を合わせず別れたことよりも、彼女が師をしたひよりの娘の方を気にかけたのも分かつてはいる——いるが、少々泣き過ぎではないだろうか。これでは声を掛けるどころか、完全に蚊帳の外である。

……でもまあ、人の為に涙を流す妹紅を見てほんの少しだけ関心したのは事実で。

ニヤリと——

ひよりから丁度見えないように、しかし私にだけ見えるように此方

を覗き口角を吊り上げた妹紅の顔を私は見逃さなかつた。

「——へつ」

そして明らかに笑つた。私を見て嘲笑つた。

……前言撤回。

「……ひより、先に部屋に戻つて頂戴。この白髪婆を土に還したら一緒に寝ましよう」

「へえ、もしかして誰かと一緒にじゃないと寂しくて眠れないのか？私も手伝つてやるよ。ひより、こいつを眠らせたら私の家で話そう」

「……一人共、ほどほどにね」

妹紅と共に縁側から庭へと飛び出し、ひよりが溜息と共に部屋へ戻るのを見届ける。

ピシャリと、障子が閉められて

「おらあああ！」

「うらあああ！」

それでもやつぱり目元は赤く腫れていたので、少し手加減をしてしまつたのだけれども。

◇

トントントンと、ノックの音を聞くのは二度目だつた。

「開いてるわよ、入つて頂戴」

私は扉の方も見ないでそう言つた。陽は落ち、もう月が真上に昇ろ
うかという時間。先ほど休憩をしてしまつたが為に遅れてしまつた
作業を進める為、今度は相手に開けて貰う方を選択したのだった。一
一さて、此処でようやくドアの方に意識を向ける余裕が出て来る。
ノックをしたという事はてゐや輝夜ではないだろうから、恐らく鈴仙
かひよりなのだろう。確立としては五分五分……さて、どちらが入つ
てくるにせよ——

「久し振り」

「……ええ、お久し振りね。ひよりさん」

手を止めなければならぬことは、やはり間違ひない訳で。

「月から使者が来るんだってね」

輝夜から聞いたよ、とひよりはそう言つて此方を見た。

一体輝夜からどの程度まで話を聞いたのかは分からぬ——まあ、多分何も話して貰つていないのである。けれど彼女が此処に来てくれたという事は、輝夜と妹紅の方に決着がついたという事だ。その上で、どうやらひよりも今回の件に協力してくれるらしい。念の為ひよりを含めて計画を立てていたこともあってか、私はそれを聞いても然程驚くようなことはなかつた。

しかしそれでも、やはり心は躍る。

「ただし守る側と攻める側が逆ですけど、ね……そして多分、此方へ来る相手も」

「……」

そう、恐らくだが今回迎えに来るのは豊姫と依姫。

奇しくも私達が月面戦争と呼んでいる史実を逆にしたような形だつた。

「それで、勝算はどれくらい？」

「ひよりさんが協力してくれるなら充分にあるわ。……但し、それは『永遠亭から誰も居なくならない』のが勝利なだけであつて、誰も死がないという訳じやないけれど。説明は、必要かしら？」

「ん、いいや。その役引き受ける」

これも想定していた答え。ひよりは充分に考えた上で、引き受けると言つてくれた。

ならば此方も遠慮をする方が野暮という物だろう。

私は右手を差し出した。

「じゃあ今日は完全に協力して貰う訳だから、形式的にもお願ひさせて貰うわね？……ひよりさん、明日貴女の力を貸して頂けるかしら」

「うん、明日一日永琳の指示に従う」

その小さな手で私の手を握り返し、彼女は強く頷いた。

あとは――

「それともう一つ、明日使う術についてなのだけれど……確実に上手く行く方法を取つて『本物の月』と『偽の満月』を夜が明けるまですり替えるわ。こうすることで両者は完全に繋がりを絶たれて、どちらからも偽りの場所にしか辿り着けなくなる。豊姫の能力があつたとしても、彼女がこの現象に気付く頃にはもう間に合わないでしょう」「ん……ん？」

まあ、当然か。首を捻るひよりを見て、私は内心で苦笑する。

「つまり明日一日月が偽物になっちゃうの。それについては、大丈夫かしら？」

「……あー」

おや、と思ったのはひよりが意外にも悩む素振りを見せたから。

彼女は暫くの沈黙の後、やがてゆっくりと口を開いた。

「多分、知り合いが何人か止めに来ると思う。傍から見れば明らかに『異変』だから靈……博麗の巫女とか、幻想郷の管理者とかが解決しようととするかも」

「……成る程。確かに妖怪や巫女にとつては、この異変は解決しないといけないのね」

そうすると、もしかしたら私達が戦うのは月の民ではなく幻想郷の住民ということになるのかも知れない。勿論私も輝夜も弾幕ごつこという遊びについてはてゐから聞いているし、実践もしている。ただ、その勝敗だけでこの術を止めなければいけないとなるならば――

それ相応の準備が必要になるだろう。

結論付けて顔を上げると、何故かひよりが苦笑していた。

「今、凄く楽しそうに笑つてたよ」

「あら、そうかしら？」

思わず頬に手を当てて確認すれば、確かに若干だが釣り上がつているように感じる。

前回は私と輝夜の都合上自ら月へ行くことは出来なかつた。そして現在も、この竹林からは出ない方が良いという風に結論付けてい

る。だから、もしひよりの言う通り幻想郷の住民達が攻めてくるというのなら、それはそれでまた必要な変化なのかも知れない。妹紅が此処へ辿り着いたように、鈴仙が逃げ込んだように、今回もまた、新しい風が吹き込もうとしている。

目前で此方を見て苦笑する、この少女の手によつて。

私は――

「ひよりさん」

「ん?」

「……ありがとう」

そう言つて頭を下げた。様々な思いを含めた、複雑な礼だつたと思う。

当然、全てが伝わるとは思つていなかつたのだが

「輝夜と約束したからね」

どうやら一番伝えたかつたことは、しつかりと伝わつていたようだつた。

『表と裏、外と内』

異変が起きた。全ての妖怪はそれを瞬時に悟った。

以前のような分かり易さはない。空を丸ごと覆い隠すような紅い霧も、季節を無視して降り積もる雪も、それらを引き起こした者達やその他が日を待たずして神社へと集い宴会を行つていた訳でもない。人に影響がある訳でもなく、誰が死ぬ訳でもなく……けれど、幻想郷に住む全ての妖怪はそれに気付いた。否、気付かざるを得なかつた。何故なら――

覆うではなく、すり替えたと。

「穢れの弱まつた月……永く地上を見続けていない、太古の時代の歪な満月、ね」

月は全ての妖に等しく妖しい力を注ぐ。

その月をすり替えたらどうなるか、ちょっと考えれば誰でも理解するだろう。月の恩恵を奪われ本来なら夜を闊歩する筈だつた妖怪が。本能に身を任せて迷い人に襲い掛かる予定だつた妖獣が。そして何よりこの綺麗な満月を肴に酒を酌み交そうとしていた幻想郷の住民達全てを敵に回したと、つまりはそういうことだ。レミリアも動くだろう、幽々子も混ざるだろう。靈夢や魔理沙が解決に乗り出さない訳はないし、そして勿論私も黙つて見ているつもりはなかつた。

そんな理由で私はこうして靈夢と共に空を駆けていた。

異変の首謀者を――そしてひよりを捜すために。



「さて、最終確認をして置きましょう」

幻想郷から奪つた満月を背に、永琳は此方を振り返つた。

「私達の勝利条件は『月人を地球に降ろさないこと』……つまり、今幻想郷に出現させている偽りの満月の維持。時間は日付が変わつて月

が沈むまで。そして戦う相手は、本物の月を取り返そうとしてくるであろう妖怪達」

「私と永琳とひよりが負けた瞬間が、維持の限界つて訳ね」

……ふむ。

「弾幕で相手して良いんだよね?」

「ええ、そうして頂戴。弾幕でなければ絶対勝利にはなるでしようけど、それは今後幻想郷と関わっていく上で最善とは言い難いわ。だから今回はあくまで弾幕決闘法に基づいて戦うつもりよ」

「ああ、楽しみねえ。弾幕もそただけど、誰が来るのか考えただけでも……」

堪えきれないと言わんばかりに笑う輝夜を見て、私は永琳と共に苦笑する。

永琳がどれだけ考え方詰めてこの計画を形にしたのかを見ていた私は、とてもじやないが楽しむ気にはなれなかつた。けれど、それを口に出して言わない辺りが永琳と輝夜の絆なのだろう。永琳が苦に思わないから、輝夜もそれに感謝をしない。私が感謝される為に彌里を育てた訳ではないのと同じように。間違いなく、永琳と輝夜の間にもそれと同じ物が出来上がつていた。

果たして一体誰がこの繋がりを絶てるというのだろうか。

否、そんなことをさせるつもりはない。

「——ひよりさん、聞きそびれていたのだけれど

「ん」

永琳は少しの沈黙の後、やがて慎重に口を開く。

「本当に私達側についても良かつたのかしら?向こうにも友人が居るのでしょうか?」

「……」

永琳の心配はつまり、私が協力することで仲を裂いてしまうのではないかという事。

……さて、どうなるだろうか。あまり考えずに動いていたので、実際の所どうなるかは分からなかつた。確かにこれだけの現象を起こした側につくというのは中々危うい選択なのだろう。知り合いだけ

ならいざ知らず、今回は数多の妖怪達も関心を寄せている。もしかしたら幾らかの人妖からは反感を買うかも知れない。——知れないが。

『……でも、貴女と紫は友達でしよう?』

そう問うた幽々子に對しては、何と答えたんだつたか。

今でも幽々子を殺したこと後に後悔はしていない。彼女が一度死ぬことで、少なくとも幽々子の気持ちは救われた。紫や妖忌の後先も含めて、出来る限り最善の選択をしたと思つていい。『生きていることが即ち幸せではない』というのは、私自身を以つて良く知つていたから。

だから、永琳の問いに答えを返すとするならば——

「信じてるから、かな」

考えに考え抜いた末、幽々子を救う決断をした彼女を。

だから私は輝夜の側についた。何時かと同じように、紫が私達の『真の狙い』に気付いてくれることを願つて。月を掠め盗るでもなく、月人を地球に降ろさないでもない、私達の身勝手で実現不可能な地球防衛作戦。その鍵を握っているのは、他でもない八雲紫なのだ。

その上で、この異変は輝夜達にとつて必要な物になるだろう。

永琳はニコリと微笑んだ。

「私も輝夜も、ひよりさんの友人を信じるわ」

「……」

いや、そんな笑顔で言われても反応し難いのだが。

「ふふっ、大丈夫よひより。貴女が親友と認めた相手だつたら——私と対等の立ち位置にいる相手だつたら、きっと辿り着く筈よ。本物の満月がある此処に……それとは別の目的を持つ、私達の元に」

その言葉を聞いて、私は輝夜達に背を向けて歩き出した。

「……じゃ、適当に遊撃してくる。輝夜達も準備はしておいて」

竹林中に放つておいた蠱毒達は既に人妖の一人組を幾つか捉えていた。それを迎撃する為に、私は障子を開けて姿を鳥へと変える。

靈夢と紫か、それとも幽々子と妖忌か。魔理沙と知らない少女もかなり近くにまで来ている。……それに、どうやら此方の意図を理解し

ないまま時を止めてしまっている人妖のペアも居るようだ。恐らく誰も彼も一筋縄では行かない相手だろう。何せ、異変を解決する為に迷いの竹林^{此処}まで辿り着くような人妖なのだから。

さて、誰から相手をしたものか。

「……うん」

同時に相手をすることにした。

夜が何時まで経つても終わらないので慌てて家を出た。

今日は徹夜で魔法の勉強をするつもりだつたのだ。少なくとも、月が天辺にある内はそうしようと想えていた。けれど、流石に天辺にあるままでは何も出来ない。魔法の研究に終わりはないのだけれども徹夜に終わりがないのは我慢がならなかつた。なので私は被る予定もなかつた帽子と近所の魔法使いを引つつかみ、そうしてこの終わらない夜の解決を始めたのだつた。既に蛍や雀や半人半妖と目に付く飛ぶものを叩き落しているが、未だにそれらしい者を引き当てることもなく。

そして今は半妖に言われた通りに竹林を飛んでいる真っ最中。

「……魔理沙、本当に此処で良いのかしら？」

「ああ、問題ないぜ。最初から此処に来るつもりだつたんだ。森や里を通つたのは軽い様子見つて奴だよ」

あの半妖の言葉くらいしか手がかりがないからな、とは言わなかつた。

この隣の人形使いは根拠のない搜索を嫌がるのだ。
それに――

「よう、ひより。こんな夜中に竹林で会うなんて珍しいな」
自分と向かい合つている相手が居る内は、進んでいる方向は合つているということである。

まあ、ほんの少しだけその相手が予想外ではあつたが。
「何？知り合い？」

「ああ、この間話しただろ。靈夢んとこの神社に住んでる元神社の管理人だ。家事から炊飯まで何でも出来るから、さしづめ靈夢堕落マシーンつてどこだな」

「……」

相棒にそう答えつつ、内心で返事がないことに舌打ちする。

ひよりは無口で無表情が基本だがそれでも喋らないという訳ではない。それがないということは、つまり彼女はそれなりの理由があつて向こう側——異変を起こした側に立つてているということだ。これでもしも彼女が弾幕ごっこをしてくれなければ正直二人がかりでも勝機は薄いだろう。

「……家事は交代でしてる。食事は私が作ってるけど」

墮落マシーン呼ばわりがそれなりに効いていただけだつた。

「なるほど、明日の朝飯は筍料理にするのか」

「そんな訳ないでしょ」

コクリとアリスに同意するひより。一人分の冷ややかな視線が心地良い。

「じゃあ、貴女を倒していくば問題ないのね？」

「貴女達が倒されても別に問題はないけど」

その言葉を皮切りに冷ややかな視線は一転探るような目つきへと変わり、アリスも軽く肘で私の腕を小突いた。アリスにはこうも話してある。『真剣勝負で靈夢が負けた相手』だと。

「……が

「……被弾三回、スペルカード有り」

弾幕ごっこで一度も負けていないのは、それ以上に良く話してあつた。

「全く、つれないわねえ。もう少し位話をしても良いんじゃない?」
「……」

正直退屈だつた。虫や鳥を相手にするのは、余りに味気がなき過ぎ

る。

けれどもまさか此処で会う事になるとは思つてもいなかつた。『何時か何処かで』私がこの少女と紅魔館で話すことになるのは間違いない筈なのだが、まさかそれ以前に接触の機会があつたとは。隣でナイフを構えた従者——咲夜を手で制し、私は上空で佇む黒衣の少女へと問い合わせた。何故彼女が此処にいるのかは興味がない。けれど、私は彼女自身には多少なりとも興味があつた。様々な企みや思惑を抜きにしても、私はこの変化の塊とも言える少女と一度で良いから話をしてみたかつたのだ。

零を壱にする少女に。百を零に変えてしまう程の混沌^{存_在}に。

運命は未だ定まることなく動き続ける。

「そう、私達全員を以つてして前哨戦か。……結果が目的ではなく、手段。全ては貴女達の目論見通りつて訳ね」

「……？お嬢様、それは——」

「私達は月を取り返す事に専念するわよ、咲夜。こいつも含めて首謀者達は誰一人として私達と同じ場所に立つていない。目的も考えも違うんじやあ、幾ら運命的であつても交わることはないとだから」
交わらない。今回の異変で彼女と此処で戦うのは、本来なら全くのイレギュラー。

それが起きていたという運命^{現_実}に、レミリアはブルリと身体を震わせた。

咲夜を制していた手を退ける。

「……『幻符 《殺人ドール》』

「偽物の月、終わらない夜、本来なら有り得ない筈の邂逅——」
ナイフの弾幕に囮まれても、彼女は眉一つ動かすことなく佇んで。

「……楽しい夜になりそうね」

「幽々子様……これ、凄く見難いんですけど」

「だあめ。言つたでしよう、これも修練の一環よ。この異変はそれを付けたまま解決しなさい」

うわあ、と叫び声を上げながら竹と衝突した妖夢（ようむ）を見て幽々子は溜息を吐く。

この余興の所為で完全に他より出遅れていた。しかし、彼女が何時出て来るのか分からぬ以上油断をすることは出来ない。幽々子にとつて異変はついででしかなく、そして妖夢の苦労は必要な犠牲でしかないのだ。もしも彼女が現れないのならそれでも良い。その時は、恐らくはこの異変が終わつた後にがあるのであろう宴会でお披露目するまで。幽々子の頭の中には、普通に紹介をするという選択肢はなかつた。

けれど――

「久し振り、幽々子」

「……本当、紫といい貴女といい嫌なタイミングで現れるわねえ」

「幽々子さまー！全然前が見えません！」

何時の間にか隣に浮いていたひより。

その奥でひよつとこの面を被つた妖夢が悲痛そうにそう叫ぶが、如何せん面の所為でそれほど切羽詰つてはなさそうだった。やんわりと視線を妖夢からひよりへと戻し、そうして幽々子は手に持っていた扇子をパチリと閉じてひよりへと向けた。

「妖忌、こいつを斬りなさい」

「え、おじいちやん!? 来てるんですか!？」

「……」

「……」

「……あれ？ どなたですか？」

妖忌、という単語を聞き仮面を外して周囲を見回す妖夢がひよりを捉えた。

……訂正をしよう。先ほどひよりにタイミングが悪いと言つた幽々子だつたが、タイミング以前に時期が悪かつたのだ。例えばあともう数年経過していれば、あの愛玩動物のようにキヨロキヨロとし

ている従者も少しばかりは彼に似たかも知れない。けれどもう遅い。ひよりは『どうして欲しい?』みたいな顔で幽々子を見ているし、妖夢は妖夢で『お祖父ちゃんは何処に?』みたいな顔で此方を見る。空回り……そんな言葉が頭を過ぎつた幽々子だったが、それでもそこで終わる程彼女は甘くなかった。

ひよりへと目配せし、次に妖夢に向けて口を開く。

「実は、この黒いのが妖忌を食べちゃつたの」

作戦変更。普段通り、妖夢を弄り回す方へと切り替える。

「ええ!」

「うん、食べた。……ペロツと?」

その表現の仕方はどうだろう。まあ確かに、半靈はペロツといけるのだが。

「こ——このお! よくもお祖父ちゃんを!」

「……自分で宥めてね」

「勿論、普段からそうしてるわ」

隣に居たひよりに妖夢が刀を振り下ろし、ひよりが離れて二人対一人の形で向き合つた。

望む形とまではいかなかつたが、ひよりは充分妖夢に興味を持つたらしい。何故食つたこうだから、と問答を繰り返しつつもその視線が二振りの刀と半靈に向かっていることに幽々子は気付いていた。だからまあ、及第点と言えなくもないか。

「さあ妖夢、頑張つて妖忌を助けるわよ」

「任せて下さいつ! 幽々子様まで食べさせる訳にはいきません!」

息巻く妖夢と並び、幽々子は悠然と佇む黒衣の少女を叩き落す為に扇を開く。

ひよりが口を開いた。

「……被弾三回、スペル——」

「とりやあ!」

「あ」

不意討ち一本。スペルカードでも何でもない縦方向の斬撃。
流石の幽々子もそれしか言えなかつた。

情報を整理する。

異変に気付いたのは夜、月が天辺に昇ろうかという頃合。今日ひよりは朝から用事があると言つて博麗神社を出て行き、以降戻つていな。月がすり替られた時、幻想郷の何処を探してもひよりの姿を見つけることは出来なかつた。規模は最大級、空に浮かぶ月を偽物と交換することの出来る程の実力者が、少なくとも一人。そして道中倒してきた半人半妖の話を信じるならば、やはりこの異変の元凶は迷いの竹林にいるようだつた。

その上で考える。

「……分からない」

「珍しいわね、アンタがそんなことを口にするなんて。異変の首謀者なら、さつきの半妖が言つた通り竹林に居ると思うけど」

そうではない。分からるのは、彼女達の目的だ。

日差しが鬱陶しいから霧を出した。枯れ木を咲かせたいから春を集めた。春が惜しくて宴を繰り返した。……では、何をする為に月を入れ替えた？少なくともそうすることで彼女達には何かしらのメリットがある筈で、それは最低でも幻想郷の妖怪を全て敵に回す程の価値があるということである。果たしてそんな物が存在するのだろうか。『妖怪を敵に回すよりも厄介な何か』が、本当にこの幻想郷にあるだろうか？

現状の突き詰め完了。逆説の可能性を探つてみる。

月の為に月をすり替えたのではなく、幻想郷の為に月を摩り替えた可能性。

妖怪を相手にしたいのではなくて、月を相手にしたくなかった可能性。

厄介な何かが、幻想郷ではなく別の何処かにある可能性。
ひよりとその友人を以つてして、そう判断を下す程の相手。

——月。

「……」

「……ふうん。紫がそこまで考えるつてことは、何だか並々ならぬ事情がありそうね。——でも、私は異変を解決するわよ。今日に映っている『異変』は夜が明けないことと月が変なことだけ。例えその裏に何が待ち構えていようと隠れていようと関係ない。私は今日をさっさと終わらせたいの」

朝になればひよりもご飯を作りに帰つてくるでしょ、と。靈夢はそう言う。

その通りである。

「だからこそ、よ。だからこそ私達はひより達……異変の首謀者である月人から話を聞く必要がある。月を摩り替えるなんて無駄なことをして何がしたいのか、逆に何をされたくないのかを私達は知らなければならない」

「月人つて……あんた、本気？」

決め手はある時の月面侵攻。

何故ひよりがあれだけ反対をし続け、侵攻と同時に撤退をさせたのか。どうして地球上に帰ることの出来る可能性が零の自分ではなく、一応はスキマを使える可能性のあつた私を帰したのか。藍は月に行つたと同時に撤退しろと言われた。妖怪達が動けなくなるより前に、妖怪達が死ぬよりも先に、だ。そして無事にひよりが帰つてきた理由。彼女は頑なに語ろうとはしなかつたが、例え彼女が月の都を滅ぼしたとしても帰つて来ることは不可能である。それを含めて私はひよりを帰すつもりでいたし、恐らくは彼女達——豊姫と依姫も、帰すつもりはなかつたのだろう。

だから逆説。私を帰したかったのではなく、ひよりが残る意味があつた。

『……それで、そつちの目的は達成出来たのかしら？』

『半分は。残りの半分は選択次第かな』

半分。妖怪達を地球上に帰し、私とひよりが帰るので全部なのではなぐ。

半分。妖怪達を撤退させて、月人達を撤退させること自体が目的なら。

全部を含めてそのどちらの為でもなかつたとすれば――

「異変を起こしたのは月から迎えが来るから。……もしもひよりの親友が月の中でも有数の地位を持つてゐるなら、その可能性は充分にある。ねえ、靈夢。知らないかしら？平安末期に記録の残る、月より墜とされ満月と共に月へと帰つていった姫の話を。不老不死の妙薬と解けることのない五つの難題を地上に残して消えた伝説の名前――」

靈夢は少しの間沈黙し、やがて上空の満月を見上げて口を開いた。

『かぐや姫』

「ええ――そうよね、ひより？」

その満月と重なるように、私達の遙か上空で此方を見下ろしていた彼女。

ひよりはふわりと降り立つた。

「うん、そうだよ」

否定の言葉はなかつた。誤魔化す素振りも見せずに、彼女はそう答えた。

私はこの時初めて彼女が立つてゐる場所に共に立つことが出来たのだ。



「ああ、永琳が落ちたのね」

揺らぎ、薄れて消えてしまつた幻影を眺めつつ呟く。

では侵入者の妖怪達は全員を倒したということか。ひよりを、てゐを、鈴仙を、そして永琳を打ち倒し、満月を取り返す為にこの部屋の目の前まで來てゐるということか。果たして何人辿り着いたのだろう。二人か、四人か、それとも全員？けれど何人であつてもそれは同じ事。ひよりを打ち倒して來たのならば、もう満月は此処にある必要がない。もしも夜が終わらなければ月は永遠にあのままだし、彼女達

が私を倒せなければ月は永遠に歪なまま——そんな退屈な状態を、私が許すものか。

襖が開かれる。当然のことながら、入ってきたのは永琳ではない。

「お嬢様、あれが——」

「あれが今回の騒動の犯人だ。……ああいや、騒動の目的でもあったか

繫がりとは無関係に真実を見抜いた主と従者。

「アリス、あれが本物の月……だよな」

「そうね。というか、その程度判別出来るようになりなさい」

真実とは無関係に異変を解決しに来た魔法使い。

「幽々子様、あの人は知り合いじゃありませんよね？」

「ええ、大丈夫よ。——だからと言つてすぐに構えるのはやめなさい？」

真実も異変も構いなしに、ただ騒動に便乗しに来た者達。

——そして

「あれが親玉？」

「私達が倒しても問題ないけれど、取られてはいけない王将つて所かしら」

彼女が認め、真実を全て知った上でやつてきた二人。

誰も彼もがまるで違い、そして同じくらいに面白そうだった。

「早かつたわね。鈴仙やてゐなら兎も角、ひよりが居たのだからもう少しくらい時間が掛かると思つたのだけれども」

「ああ、それならと。計八人は口を揃える。

「吹き飛ばしたぜ」

「串刺しに」

「りよ、両断してしまいました……」

「スキマを使って退場して貰つたわ」

あつけからんと言ひ放つ少女達。ひよりがこの場に居たら何と言つだらうか。

これは後のお楽しみ。

「此処まで辿り着いたのだし、折角だから相手をしてあげるわ。こんな事しなくても月は返すのだけれど、やつぱり親玉を倒してハッピー エンドが王道でしょう?」

「分かってるじゃない。私は正義の味方じやないから、ついでにアンタも救つてあげる」

一步前に出てきたのは紅白の巫女。異変解決のエキスパート、だつたか。

「でもその前に、いい加減夜を終わらせましょう。私は永遠が嫌いなの。そんな物は、精々偽りの満月一つで充分。本当はこれ満月だつて今直ぐ返したいくらいよ」

身構える八人を見据えて、私は予め作つておいてスペルカードを取り出した。

初実践で何処までやれるかは分からないが、ひよりや永琳がそうしてくれた手前私だけおめおめと負ける訳にはいかない。せめて此方側の戦いだけでも勝つつもりでやることにした。……いや、多分勝てるのだろうが、それでいい。夜は明ける。月は沈み、陽が昇る。もしも私が勝つことでそれが覆るというのなら、私は今直ぐにでも舌を噛み切つてやるつもりだ。

出来うる限り大仰に両手を広げ、私は自身の『永遠と須臾を操る程度の能力』を行使した。

「さあ、もう朝はすぐ近くにまで来ている」

ガチリと世界は時を刻む。

今日に見えている地上に八意永琳と蓬萊山輝夜はいない。

そんなことは百年程前から分かつていた。どうやら彼女達はあるの場所とは違う秘境に身を隠しているらしい。姉である豊姫と共に搜

査を進め、試行錯誤をし、そうして辿り着いた一つの結論だった。現実と非現実の間に何かを作り、その間を往来する物を引き寄せる性質を持つ世界——さながら幻想郷といった所か。誰が作り上げた場所なのかも知らないが、道理で見つからぬ訳である。

故に、この百年でその境界を打ち破る術を研究してきたのだ。

「——到着！さあて、準備は良いかしら？依姫ちゃん」

「問題ありません。此処なら人目を気にせず穴を開けることが出来るでしょう」

地上の何処かにある山奥……倒壊したのであろう神社の前に私達は居た。

しかし漸く会えると考えると、ほんの少しだけ私の心に戸惑いが生じる。もしも永琳や輝夜が私を拒絶してしまったら？または、二人共幻想郷にすら居なかつたら？考えるだけ無駄である筈なのに、それらの疑問は消えることなく最近の私を付いて回つた。この一千年の間に随分変わつてしまつたと一人自嘲。原因は分かつている、他でもないあの少女の所為だ。そう――

彼女の名は――

「ひより、お前も永琳様達と共にいるんだろう？」

「今日は『こっち』にいるよ」

振り返る。

「久し振り、依姫」

「……余程有名な怪異でなければ、この世界で生きるのは難しいと聞いたが」

いつの間にか闇に紛れるようにして立つていた少女、ひより。

思い出すのは月での邂逅。永琳と輝夜からの伝言をあえて最後まで伝えず戦い抜き、そうして全てを丸く治めて帰つていつた妖怪——蠱毒。当然死んでいるなんて思いもしなかつたが、しかし外の世界でこうして会う事になるとは思わなかつた。妖怪は人の畏れを糧として生きる種族……故に、人が恐れなくなつた外の世界では生きていく筈、なのだが。

彼女は立っている。其処に、普通に、変わりなく。

「ひよりさんは妖怪じゃないのかしら？それとも蓬莱の薬を飲んだの？」

豊姫の投げかけた質問はしつかりと確信を突いていた。

外の世界でここまで余裕を見せてている理由は、妖怪ではないか消えないかのどちらかなのだ。

——そう思っていた。

ひよりは私達から視線を外し、そうして背後の、向こうに聳える建物の群れを眺めた。

「人は妖怪を畏れなくなつた。闇夜に恐怖を抱かなくなつた。……この場所を見れば分かる。此処には、多分妖怪達の居場所はもうないんだろうね」

「でも私達は違う」

「私達は畏れから生まれたのではない。私をこうしたのは人間で、その理由は恨みだつた。相手への殺意がそれ以外を殺すことを上回つた。その結果生まれたのが、私達」

「ねえ、依姫」

「世界は未だに人を恨み殺し続いているんだね」

『生殺与奪』

妖怪達の月面侵攻

月の史実に一生綴られることになるであろう戦争の幕引きは、依姫と豊姫が師とする八意永琳と月の姫である蓬萊山輝夜からの伝言によつてひよりを逃がしたことであつた。勿論当初は最後の最後まで逃がす予定など毛頭なく、それでも攻めてきた妖怪達を一人たりとも殺すことが出来なかつたのは素直に永琳と輝夜の作戦、そしてひよりの実力あつてのことなのだろう。

その敗北自体に疑問を抱いたことはない。

けれど一つだけ、腑に落ちないことが依姫と豊姫の胸中で渦巻いていた。

『何故、八意永琳はひよりを月へ送り出すことにしたのか？』

「——それだけが不可解だつた。他の全てには妖怪か私たちの為の配慮や気遣いがあるのに、その一点だけに關しては何の根拠も理由もない」

正確には違う。ないのではなく、辿り着けなかつたのだ。

師である八意永琳が、ひよりという少女の何に行き着いてしまつたのか——それがこの疑問に対する答えとなる。そんな確信にも似た予想を抱いて、私は姉と共に地球を調査する傍らそれを考え続けた。「淨化装置が働いても動ける理由は直ぐ分かつた。お前は穢れそのもの、そういう事なんだろう」

それ自体に可笑しい部分はない。

しかし淨化装置を無効化することは妖怪と殆ど同質であるひよりを月へと送り出す決定打にはならない。幾ら突破したところで、私と姉が他の妖怪にするように攻撃するのは間違いないからだ。そして蓬萊の薬を飲む以外に、絶対に死ぬことのない存在というのは恐らく一生現れないだろうと確信している。であるならば、やはりの方には何らかの確証があつたのだ。八意永琳と蓬萊山輝夜の名前を出す

という相手任せの奥の手ではなく『ひより自体が何かをしなくて死なない』……そんな理由が。

そしてその理由に、多分私達も追いついてしまった。

私は彼女に——ひよりの背中へと語りかける。

「穢れは地球に住む生物全てに含まれている。人間も、妖怪も、動物も……その量こそ違えど、な。それを私は地球にいるからこそ存在する呪いのような物だと思つていた」

言つて、私は自分の利き手が震えていることに気付いた。

嘗て私はレイセンという玉兎に『知らなくても良い事を知るのは罪だ』と、そういうことをなぞがあつた。そして今、私は同じように知りたくもなかつた世界の理を知ろうとしている。きつとこれを口に出してしまえばもう二度と後戻りは出来ないだろう。それが分かつても尚、私は自らの人生よりも月人達が目を逸らし続けてきた眞実と向き合うことを決めたのだ。

「けれど、やはり月人にも微かだが穢れがある。地球の生物に比べれば無に等しい程度の物だが、やはり我々ですら穢れを放たないということは出来ない」

震えは止まらない。口に出すのはやめろと、そう言わんばかりに。「では、地球ではなく生物に理由があるとしたら?……妖怪にも人間にも動物にも月人にも共通していて、且つ私達月人が地球に居た頃から変わらない物がただ一つある。それは——」

私は震える腕をもう片手で押さえるようにして、その結論を口にする。

「殺意」

他者を害するという、究極の悪感情。
黒衣の少女は答えなかつた。



負の感情こそがひよりという少女を構成する唯一の性質だと。

そう思い至つたのは、もう随分と昔の話だ。

月に移住することを決めた時、その発案者である月夜見と私はそうは思つていなかつた。生きているからこそ穢れを持つ。持つていてるから何時か死ぬ。地上で行われる全ての争いや他の生命の捕食が、やがては自らをも死に至らしめるのだと、そう考えて過ごしてきた。ある時一人の少女と再会した。

彼女は人間ではなく、妖怪ではなく、他の何でもなかつた。敢えて言葉で表すのならば、彼女はどの生物にも分類カテゴリされていなかつたのだ。出自が特殊で誕生も特殊。尚且つ自身の愛する家族の友人ということもあつて、私は地上に来てから抑え付けていた探究心に再び火が灯るのを感じた。そんな私に彼女は嫌な顔一つすることなく知る限りの事を教えてくれた。

『ひよりは妖怪である』

人よりも遙かに長い時を生き、人間であれば死んでしまうような負傷もすぐに治る。無理に食べ物を食べる必要がなく、また夜目も効く。身体からは妖力を放つてゐるし、靈力は放つていない。知能のある妖怪からは同じ妖怪として認識され、人間達からは妖怪の一種として認識されている。時間の経過によつて姿を変えることがなく、自らの意思で様々な動物へと姿を変えることが出来る。

『ひよりは妖怪ではない』

彼女は蠱毒という術ただけであつて、明確に言えば妖怪ではない。幾ら自身を妖怪と分類していようと、その本質は他の妖怪とは明らかに異なつてゐる。夜に活動する必要はなく、朝に頻繁に活動する。時に人を助け、時に妖怪を助けた。人を襲う必要がなく、驚かす必要性がなく、そして人々に語られない。

——語られない。妖怪の存在の拠り所が人々の恐怖や伝承に依存しているというのに、彼女は語られない。どころか自分から自身の伝承を隠したのだ。永遠亭にある唯一の書は、恐らくもう一生誰の手にも渡ることはないだろう。それでも彼女は存在し続けている。人に

依存しないようにと修行を重ねていた妖怪達を尻目に、妖怪に食われまいとしていた人間達を嘲笑うかのように存在していた。依存せず、喰らわず、ただ存在しているのだ。

『では、ひよりは蠱毒なのだろうか』

蠱毒とは本来人を呪い殺す為に作られた術である。その使用方法に諸説あれど、最も使われたのは間違いない呪殺だ。……であるならば、ひよりが外見上は人の形をとつていたとしても本質は奪命である訳で、そうであるならば彼女はその責務を全うすべきである。

例えは人が子孫を残すように。

例えは妖怪が伝承に沿つて人を襲うように。
それぞれが『人間』『妖怪』と定義されているから、彼等はそのように生きている。

けれど

行き着いた先は、そんな推論とは全く関係のない結末だった。

因果の誤り——

事柄と事柄の間ににある関係性の思い違い。この場合は「無数の生物と共に閉じ込められ、最後にひよりが残つた」という過程と「故にひよりは蠱毒である」という結果の勘違い。蠱毒と同じ製法を体験した、あるいは聞いた者は皆、ひよりが蠱毒になつたのだと思つただろう。人は誰でも先に定義されているものと同じであれば、そうであると信じてしまい易いのだ。そして事実、私も同じ見落としをした。多分ひよりは他のどの生物よりも自覚していたのだ。

他者を喰らうということは、その存在を殺してしまうという事を。そしてそれを繰り返し続けた結果、彼女の 中は他者の殺意で一杯になつた。

それがひよりの正体である。

「ひよりさんはあそこに混じらないのかしら？」

魔理沙に手を引かれて喧騒の中に混じつて行く輝夜を眺めつつ、私は後ろの賽銭箱に座つてゐるのであろう彼女に問う。

時は私達が満月を奪つた日から一日、異変解決を祝う宴会が行われている真つ最中である。異変を起こした側として招待されたこの宴会だが、やはりというべきか私自身はあまり気乗りがしなかつた。幾ら月からの使者が来ないと分かつていても、この宴会が親睦を深めるためだとしても、此処へ来るために残してきた問題が余りに大き過ぎる。全壊した永遠亭の修復、幻想郷と今後付き合つていく上での話し合い……特に前者は全くと言つていいほど手を付けていないのだ。当分の野宿は避けられないだろう。

そして後者を話し合う相手である八雲紫に、私は輝夜共々宴会へと招待された訳だ。

どうやら彼女は余程私達に野宿をさせたいらしい。

「此処から眺めてる方が、私は好きかな」

振り返れば何処か愛しそうに喧騒を見つめているひよりの姿。その瞳はまるで、眩しい物を見つめるように細められていて。

「……昔は此処で、彌里と妹紅の組み手を見ていた。毎日やつてたけど、毎回見に行つちゃうんだよね。今まで妹紅と彌里だったからつて、そう思つてたんだけどさ——」

私はその時の彼女の顔を一生忘れることはないだろう。

「私があの時見続けていた理由が、多分此処にある」

座っちゃうのはその所為と。ひよりはそういうつて、微笑むのだった。

「……」

私は外の世界でひよりと豊姫達が何を話していたのかを知らない。

私と輝夜の意志と謝罪を伝えることを頼んだ以上、それ以外について訊ねるというのも野暮だろう。例えひよりが二人に何を言おうと、何を言われようともそれは彼女達自身の物だ。向こうから話して來ない限りは、此方が手を出すような事をする必要はない。

だからこそ不安だつた。

『結果は報告して欲しいかしら?』

『いい。知らなくても五百年は何とかなつた』

そう言つてくれた彼女の決断を、私は出来うる限り尊重したい。
けれどそれと同じ位、そう上手く行かない事にも気付いていた。豊
姫と依姫——蠱毒という定義を知らないあの二人が彼女について考
えれば、きっと答えて辿り着いてしまうだらうという確証があつたの
だ。

ひよりは自身が妖怪でありたいと、そう思つてることを知つてい
る。

けれどもし、あの二人がそれを口にしたのならば——

「……御免なさい。ひよりさんには、迷惑をかけてしまつたわね」
「別に。靈夢達と戦うのも依姫と豊姫と話すのも、楽しかつたよ」

それに、と彼女は続ける。

「輝夜がああやつて笑えているなら、私はそれで良いかな」

彼女の言葉に釣られるようにして、私も視線を正面へと戻す。

最初は魔理沙に手を引かれて恐る恐るといった様子の輝夜が、今で
はもう吸血鬼と取つ組み合いをするまでに発展している。吸血鬼の
帽子を投げ捨て、輝夜の長い髪が引っ張られて——けれども、何故だ
かそれを止めようとは思わなかつた。永い間一人で永遠亭に居た頃
には見せなかつた笑顔を、私はこの時久し振りに見たのだ。

それを見て私は、先の言葉が相応しくないことに気付く。

「ねえ、ひより

「ん」

謙らない。今私の後ろにいる彼女は、私の友人でもあるのだと気付
いたから。

「ありがとう。今回のこと、本当に感謝しているわ

「うん——」

スタンと足が地に着く音がする。そして私の横を通り過ぎ、彼女
はどうやらあの宴の中に混じるつもりのようだ。

その後ろ姿は相変わらず小さくて、触れれば消えてしまう程儂げ
で。

「そつちの方が、永琳らしくて良いと思う」

けれどその歩みは、決して緩むようなことはなく。

「……」

その後ろ姿から視線を外し、私は喧騒の中にいるであろう輝夜の姿を捜す。

取つ組み合いは終わって、今度はどちらが正しいかを弾幕ごっこで証明する所のようだ。

輝夜の顔には、相変わらず笑顔が浮かびつ放しで――

足は自然と、その方へと向かった。



「それでは、失礼します」

プシュウと音を立てて閉じた扉を背に、溜息。

二つの報告を同時に済ませた。一つは今回の地球探索で八意永琳と蓬莱山輝夜を発見できなかつたという物。もう一つは、今後二人の搜索の為に地球へ人員を派遣することを取り止めるという物。そのどちらも私と姉上に一任しているとはい、僅かな期待を持つて待ち続けてきた者達に偽りの報告をするというのは余り気分の良い物ではない。

けれどそれ以上に心躍つて。

「嬉しそうね、依姫ちゃん」

「つ……居たのか、姉上」

そんな私を待つていたのだろう姉は、ニマニマとした笑みを浮かべながら近付いてきた。

「それで？ 永琳様と輝夜様の搜索は？」

「ああ、無事打ち切られたよ。もう月の使者が地上へ降りることもないだろう」

それが、ひよりから伝えられた伝言の一つ。

『八意永琳と蓬莱山輝夜を搜索することを固く禁ず』

「嬉しい半分悲しい半分ねえ。永琳様は兎も角、輝夜様は月では少し物足りなかつたでしようけど、それでも一言くらい言つてくれれば良

かつたのに』

「最初は普通に迎えにきていたとひよりは言つていたぞ。……まあ最も、輝夜様が帰るのを望んでいない上にひよりが居たのでは結果は変わらなかつただろうな」

結局力では二人と再会することは叶わないという事だ。

それでも新たに用意された道がまだ私達には残されている。

「そして今も帰るつもりはない。けれど、会わない理由はない」

「ああ、そうだな」

それはひよりから伝えられたもう一つの言葉。

『豊姫と依姫で来た場合は、その限りではない』

つまりは、月の使者としてや八意永琳と蓬莱山輝夜の捜索という目的でなければ来ても良いと言う事。本来であれば本人達と話が出来ない以上絶無の可能性だったのだが、ひよりが仲介をしてくれたお陰で何とか向こうの望む形で会いに行ける可能性が出てきたのだ。

姉は呆れと苦笑が混じった複雑な表情で頬を搔いた。

「そうは言つても……これお姉ちゃんが手を回すのよ？仕事を押し付けたり役割を分担したり重要案件を優先させたりって」

『頑張つてください、姉上』

「くっつ！依姫ちゃんにも手伝つて貰うからね！」

そういつて半ば泣くように走り去つていく姉を私は見送る。

まあ、勿論彼女だけに任せたまま悠々と過ごすようなつもりはないのだが。

「……」

そうして漸く一人になつて、私はついつい想い出す。

つい先程まで地上で話していた、あの黒衣の少女との遣り取りを――

ままそう答える。

『……すまん』

『ん、別に。もう過ぎたことだから。悲しくは、あるけれど』

素直に強いと思った。地球で生きる彼女は、きっとこれからも多く生き死にに触れるだろう。

そこから悲哀の感情だけを抜き取つて前を向くというのは余りにも難しい。例えば綿月豊姫が、八意永琳が、蓬莱山輝夜が去なくなつてしまつたら私はどう思うだろうか——どうすれば良いのだろうか。考えただけでも心に冷たい何かが広がっていくこの感覚を、一体彼女はどうやって切り抜けてきたのか。私よりも短い年月を生きている筈の少女が、月人達が月へと逃げることで諦めた運命を背負つている。

きっと彼女も多くを失つてきた。少なくとも、私にはそう映つた。

『そうでもないよ。少なくとも、私はそう思う』

私の心を見透かしたようにそう言つて、ひよりはゆるりと首を振る。

『例えば、さ。草や木が枯れなくて、動物は他の動物を食べる必要がなくて、人が死ななかつたら——きっと世界には、新しい誰かが生きる場所がなくなる』

『……』

『生は恒常的であつてはならない。死は普遍的でなくてはならない。生きる為に奪つて、死ぬために与えなければならぬ』

本当に殺意の権化なのかと思うほど、その口から零れる言葉は躍動感に満ちて。

『生きて死ぬ。月人にとつては忌々しいことで、人間にとつては悲しいことだけど、意味がなかつたことはない』

死は多くを奪う。それ以上に、彼女はそこから多くを得たように見えた。

『……そつか』

不思議と胸に収まつた。実感がないまま、そういう物なのだと思つてしまふ程に。

私も彼女と同じように夜空を見上げる。

そこには多分、月人と地上の妖怪という隔たりはなかつた。

◇

斯くして、幻想郷から満月を奪うという大胆不敵な異変は無事解決された。

表と裏、外と内。それぞれの思惑や目的が交錯した故の、複雑怪奇な異変ではあつたが。

今回異変を起こしたことによつて存在を知られることになつた永遠亭とそこに住む不思議な人間達は、どうやら薬師として人里と関わっていくつもりらしい。しかし迷いの竹林という場所は迷い易く、しかも数多の妖怪が出没する場所でもある。彼女達が果たしてどのように人々との仲介を行つていくのか……を知るのは、もう少し後のお話。

それと、ひよりは宴会の途中から何時の間にか戻つていたようだ。紫と二言三言交わしその後暫く蓬萊人の片割れと話していたようだが、それが終わつてからは静かに輪の中で弾幕ごつこを眺めていた。正直に言えば紫が何処へ送つたのか、今回の異変の犯人達とどう関係があるのか興味の尽きない所ではあつた——が、それを聞く勇気は残念ながら私にはなかつた。幾ら同じ屋根の下に住んでいるといつても、何となく私もひよりもお互に遠慮しているような気がしてしまつて。

そんな蟠りを抱えたまま迎えた、異変解決の宴の次の日。

私は寝室から良い匂いが漏れてくる居間へと続く襖を開ける。

「おはよう」

「……おはよう」

挨拶も程ほどにして席についた。

白米、筍と旬の野菜の佃煮、焼き魚、菊と豆腐の味噌汁……恐らく

は私が起きる時間に合わせて作ってくれたのであろう、まだ湯気の立つそれ等へと箸を伸ばす。

確かに今日は昨日ずっと竹林に居たのだから、この筈は――

「そ、うちの竹林で取れる筈よ。驚いたわ、こんなに美味しいのね。おかわりは?」

「……貴うわ」

はいどうぞ、と白米を盛った茶碗を差し出したひよ——蓬莱山輝夜を睨みつける。

何の因果でこうなつたのかさっぱり検討もつかなかつた。宴会が終わり、吸血鬼も亡靈も蓬莱人も各自自分の家へと帰つた筈だ。いや、蓬莱人の家は今はいいのだけれども、神社に泊めるのも面倒だからと帰らせた。なのにこうして目の前に蓬莱山輝夜が居るというのは、一体どういう訳なのだろうか。……よくよく思い返してみれば、挨拶を返してきたのも彼女だつたような気がする。

そして私は漸くこの朝食を作つたであろう張本人がいない事に気付いた。

「ひよりは?」

「盛り付け任せて遊びにいつちやつたわ。酷いと思わない? あんな奴の何処が良いのかしら」

どうやら彼女は朝からひよりに会いに来て、そして振られたらしい。

自分の分のおかずを食べ終えて私の方へと伸ばしてきた箸を叩き落とし、急いで口に運ぶ。

「で、あんたはどうして此処にいるのよ」

「靈夢と親睦を深めに来た……って言つたら信じる?」

自分の茶碗と私の茶碗を重ねて流し台へ持つていく輝夜。

「信じない」

「ま、そうよね。でも実は本当よ。私は貴女と仲良くなりに来たの」

そういつて再びテーブルへと戻ってきて、彼女はニマリと笑みを見せる。

「正確には貴方とひよりの仲を取り持つ為に来たのよ」

「……」

「貴女、ひよりとの付き合い方に迷走しているんでしょう？」

輝夜は私の答えを待たず、その笑みを柔らかい物へと変える。

「確かに関係は複雑よねえ、ひよりは元々娘が居たし、貴女は早くに亡くなつたとはいえ先代が居た。お互い思い浮かぶ人がいるから踏み込めない。自分は良いとしても、相手に思い出させたくない……違う？」

「……そうよ」

これが魔理沙や他の近しい者ならば誤魔化しだろう。

けれどこの話題に関してだけは、私はほぼ他人である彼女になら素直になれる気がした。

「そうね……じゃあ、私から一つ難題を出しましよう」

「……難題？」

すわ弾幕かと身構えたが、輝夜は慌てて両手を振つて苦笑する。
「もう、弾幕ごっこ一直線ね。……そうじやなくて、私のちよつとした遊びに付き合つてくれれば良いわ。それに応えることが出来たら、貴女が間違いなくひよりと仲良くなれるひよりの『秘密』を教えてあげる」

両手をパンと打ち鳴らし、輝夜は立ち上がりつて口を開く。

「迷いの竹林で肝試し——どう?面白そうでしょ?」

その笑顔から、私でなくても嫌な予感を感じさせる邪氣を纏つて。

『一步前へ』

「此処から先は通行止めだ」

不意に頭上から聞こえてきた声。

輝夜の提案で肝試しをすることになった日の深夜。紫と共に再び竹林へと訪れていた靈夢は聞こえてきた声に足を止める。迷いの竹林は人も妖も殆どと言つていい程近寄らない。それこそこの間叩き落した雀や蛍、あとは迷い人くらいの物だと思っていたのだが。

声を掛けてきた相手の姿に、靈夢は思わず眉を顰める。

「……『慧音』」

「人里の守護者ね。全く、この竹林には何かその手の呪いでも掛かってるのかしら？ 来る度に予想外の相手と対峙させられている気がするのだけど」

私の呴きに賛同した紫は、しかし何も間違ってはいない。

眼前にて道を阻んでいる彼女——『上白沢慧音』は、普段は人里で寺子屋の教師をしている半人半妖だった。正義感が強く、知性に溢れてい、それでいて誰に対しても平等……そんな性格。靈夢自身、彼女とは何度も話をしたことがある間柄である。勿論仲が悪いという訳ではない。隣にいる隙間妖怪だけで来たのならば兎も角、私も共にいるこの状況で敵対するような人物ではなかつた。

それに、彼女とは本来この時に居合わせるような事はない筈なのだが。

「満月の夜に出て来ている所、初めて見たわ」

「出来ることなら見られたくはなかつたさ」

慧音は半人半妖。妖怪の力が強くなる満月の夜の間、彼女は種族妖怪となる。

それを後ろ向きに捉えて満月の夜の間は家から出ようとしないという事を靈夢は良く知っていた。阿求の誘いにも、靈夢の呼びかけにも応えないのだ。だからきっと、それは彼女の決意なのだろうと思っていた。人と共に生き、人として生きたいと願つてゐる彼女にとつて誰にも譲ることの出来ない大切な物である、と。

そしてそれを捨ててまで、彼女は私達を止める為に立ちはだかっているのだ。

しかし――

「私達、特に止められるような事はしてないと思うけど」

「今日という日にお前達が此処へ来た、それが理由だ。それも私の目の前にまで到着したのならば間違いないだろう」

私達を止める理由はないが、此処へ来た者を止める必要はあるといふことらしい。

そこで今まで黙っていた紫が口を開いた。

「……姿を見ないと思つたら、まさか慧音を懷柔していたなんて」

「普通に友人だ。それにそれを言うなら、お前の方こそ姿を見る度靈夢としか活動していない気がするが?……もしかして、お前――」

「叩き落すわよ靈夢。彼女の登場にはもう充分に驚かされたし、肝試しの前座にこれ以上割く時間はないわ」

「友達少ないもんね、アンタ」

紫からの呪詛混じりの視線を軽く受け流す。

慧音を睨んだ。

「私達は此処を通る、慧音は此処を通さない……それで良いのよね?」

「……ああ。お前達が相手では、どちらかと言えば私の肝を試すことになりそうではあるがな」

そういうて距離を取つた慧音を見据えつつ、先の紫と慧音の会話を思い出す。

今回もどうやら私の知らない所で様々な思惑が入り乱れているようだった。この分ではこの先にいる肝試しの目標が全うな幽霊や何かという可能性は殆ど皆無と言つてもいいだろう。それは提案をしてきた輝夜の顔を見れば想像には難くなかったし、例えそうだとしても私は私で自分の目的を達成する為に動くつもりである。

博麗の巫女としてではなく、博麗靈夢として。

「じゃあ、慧音の肝試しと行きましょうか」

「あの二人の元へは絶対に行かせんっ!」

頭上から降り注ぐ月の光が、慧音の持つスペルカードを照らした。

◇

私が妹紅と出会ったのは今から丁度二年前。

満月の夜、半人半妖であるが故に妖怪化してしまい、案の定眠れなくなってしまった日のことだ。

仕方なく人目につかないようにしながら里を抜け出して周囲を散歩していた私は、そこで月明かりが霞む程の光を見た。

正確には、天まで届き得るかと思うほどの火柱。

足は自然と火柱が立ち昇った迷いの竹林の方へと向いていた。

迷いの竹林に入るのは、実はこの時が初めてだつた。人里の者達も妖怪も等しく近付くことのない秘境。私も人里に住む者として例に漏れず、何度か遠巻きに眺めたことがある程度である。けれどこの時の私は普段とは違つた。まるで何者かに導かれるかのように迷いなく進み、竹と笹の葉を搔き分けて、そして――

不死身の蓬萊人である妹紅と出会つたのだ。

――彼女は不思議な人間だつた。

竹林の外の事について詳しく、そして幻想郷のことについて詳しかつた。妖怪の退治の仕方も、人との付き合い方も、その知識と技術はとてもではないが人一人の人生をかけても学びきれない程の量を持つてゐる。その辺りについて訊ねてみても、彼女は曖昧な答えと共に自分が師事してきた相手が良かつたと、そう言つて話を終わらせてしまうのだが。

『私が此処にいる理由？いやいや、輝夜は関係ないって！』

一度だけ、どうして彼女が未だ竹林にいるのかを訊ねたことがある。

妹紅はこの場所が幻想郷と呼ばれる以前から竹林で生活をしている。しかし彼女の口振りと態度を考えれば、人と妖の間に壁のなくなつた今の人里で充分にやつていけるのではないかと思つたのだ。

そして、彼女は人と暮らすことが好きだと言う。輝夜姫との因縁があるというだけで竹林に居続けるのでは、余りにも勿体ない。

しかし、そんな私の問いかけに彼女は困ったように頭を搔いた。

『最後の最後で、私も見届けるべきだった事を師匠に丸投げしちゃつてね。昔はそうは思ってなかつたんだけど、今になつて考えてみれば多分——私はあの時逃げたんだと思う』

別れるのが辛くてねと自嘲気味に笑う妹紅。

——その時の彼女の仕草に、私は未だ知らない彼女の師の姿を見た気がした。

「なあ、妹紅」
「んー？」

時は少し遡つて、永夜の異変の前日。

満月が近いという緊張の所為もあつてか、私は人里を離れて迷いの竹林にある友人——藤原妹紅の家へと訪れていた。特に理由があるの訪問ではない。どうやら何かに備えて靈符作りをしているらしい妹紅と、ただ他愛もない話をする為だけに来たのだ。

忙しなく手を動かしている妹紅を見、次に外を見て喉から声を絞る。

「その、明日はこっちに泊まつても構わないか？」

妹紅と知り合つてからはそれが毎月の恒例であつた。

「そりやいいけど……あんまり気にしなくとも平気だと思うけどねえ。もう今は姿形で相手を判断するような奴なんて殆どいないつしよ」

「何というか、踏ん切りがつかなくてな」

それは人間である里の者達に、自身の人ではない部分を見せることへの躊躇。

そんな私を見かねたのか妹紅は作業を止めて私へと向き直つた。

そして、口を開く。

「多分、私もこれからは人里に入りすることになるからさ」

「——え」

今、何と言つたのか。

妹紅も、これからは人里に来るのだと？

それは——

「——それは本当かつ？」

「おおうわつ!? ちよつ、待つて待つて落ち着いて！」

思わず身を乗り出してしまつた私を反射的に抑えようとした妹紅の手から筆が舞い、宙に踊る。

気が付くと眼前には、顔の前に両手を掲げて身を引いている妹紅。

「……落ち着いた？」

「……もう少し」

……。

カラカラと地面を転がる筆の音で我に返つた。

「実は、一昨日師匠が帰つてきて——ストップ!! ありがとう慧音、気持ちだけでも充分伝わるから両手は膝の上、な？」

「う、うむ」

しかし高揚感は收まらない。

そもそもその筈、自身が長い間望んでいたことが二つ同時に叶つてしまつて いるのだから。

「んで師匠と少し話した結果、私は人里と関わるべきだつて言われちゃつた訳。ちなみに師匠もこれからは人里に出入りするつもりらしいよ」

「そうか……」

口から漏れた声は、自分でも驚くほど喜びに満ちていて。

何時か妹紅と、妹紅を育てたという彼女の師匠と共に人里を訪れたいと長い間願つていた。二人共自分達が居た時代から恐らくは訪れていないであろう、今の人里を見せて驚かせてみたかったのだ。稗田家の当主も、民家の配置も、里のルールもきっと何もかもが違うのだろうけれど、それでも彼女達が当時夢見た『幻想郷』を見る事が出来るならと、そればかりを考えていた。

堪えきれず顔に出てしまつていたのか、妹紅は恥ずかしそうに頬を

搔いた。

「慧音がそんなに喜ぶとは思わなかつた」

「嬉しいさ。妹紅は今こうして話せているが、それとは別に妹紅の師匠とは是非一度話をしてみたかつた。君の師となれば、多分仲良くやつていけるような気がする」

「その事なんだけど、実は明日慧音が来る事を見越して呼んで——はいはい、勿論来るよな。……今の慧音とは動きだけで会話出来る気がするよ……」

返事の代わりに浮きかけた両手を膝の上へと戻す。溜息を吐く妹紅。

「つたく、多分慧音が思つてる程の奴じやないぞ?」

「期待するのは自由だろう?少なくとも私が妹紅から聞いた話では、期待しない者の方が少ないと思うが」

勿論、彼女が師についての全てを話してくれた訳ではないのだろう。

しかしその数少ない体験談だけでも、彼女がこの幻想郷に残してきた物の形が窺える。

即ち、彼女が成した事が今の幻想郷を形作っているのだと——

妹紅はそんな私の様子を見て頭を抑えた。

まるで頭痛を堪えるかの様に。

「……私としては何というか、慧音の方が心配になつてきた。大丈夫か?ちゃんと今日帰つたらしつかり寝て、火の始末とかしてから来るんだぞ?私、火は出せても消せはしないからな」

「ぜ、善処する……」

じゃあ念の為、と言つてスラスラと紙に筆を走らせる妹紅。

そうして差し出された紙に書かれた、まるで子供の留守番表のようない覧を見

妹紅を睨み——

紙を睨みつけて——

「……」

でも一応受け取った。



「……までね」

ビシリと、靈夢は自身の右手に持つ靈符を此方に突きつける。

「……」

スペルカードを破られた私は、それを冷静に見つめていた。
最初から勝算のある勝負ではない。それでもあの二人が少しでも長く邪魔されずに楽しんでくれればと、そう思つて出てきたのだ。一本音を言えば私も彼女の師である彼女と話をしてみたかった。顔を合わせて、名を名乗り、握手位はしたかった。……それ等を我慢してまで靈夢や紫を相手取つた私の気持ちを、しかしこの二人が汲み取つてくれることはないのだろう。

だからせめて、そう思い通り過ぎる一人に向けて口を開く。

「……満月の夜に人前に出た私ほどの覚悟が、お前達にあるか？」

それは、普段の自分であれば絶対に言わないような言葉。

背後の妖力は一瞬たりとも停止しなかつたが、靈力——博麗靈夢は、私の呟きに足を止めた。

「……もしもお前が私の姿を見て驚いたのなら、どうか頼む。今日だけで良いんだ、引き下がつてはくれないか」
「……」

靈夢は悩んでいるようだつた。

彼女は横暴にして粗暴な性格と思われ易いが、理由なく我を通さない事を私は知つている。

だから——

「悪いわね、慧音」

そう返事が返ってきて、私は不思議とその時点で納得してしまつた。

「私も、今日は博麗靈夢として来たのよ。紫の指示でも、幻想郷の為でもなく、私自身の為に」

靈夢の声は、普段の無気力を微塵も感じさせない声で。

「……驚いたな」

思わず喉から洩れた言葉は、紛れもない本心である。

少なからず博麗靈夢という少女と付き合ってきた私からしても、それは驚愕に値する言葉だった。博麗靈夢という少女は、基本的に他人に本心を語ることがない。それこそ彼女と真なる意味で付き合いの深い白黒の魔法使いでもない限り、彼女はそういった『弱み』を見せるような事はしないのだ。私が人前で自身が妖怪化した姿を見せないよう、彼女もまた、恐らくは自分なりの決意を以つて為しているのだろう。

そして彼女は私がそうしたように、今度は自身の覚悟を示してみせた。

彼女は問う――

「通つていいかしら?」

もう通り過ぎている私に向けて

「ああ、私の負けだ」

唯一勝っていると思つた覚悟でさえ先を行かれては、そう答える他無かつた。

そうして既に遠くなつていて、背後の靈力も段々と離れていって――

「……ふ」

私は、その方ではなく人里へと足を向けた。

妹紅はこれ以降人里にも出入りすると言つていた。彼女ならばきっと自身が人ならざる部分を持つていてることを隠したりはしないだろう。――ならば、いい加減私も躊躇を捨てる時なのだ。自身と同じ半ば望まない形でその立ち位置に居たと思つていた少女靈夢ですら変わろうとしている。彼女よりも先を行く『人里の守護者』として、これ以上後塵を拝する訳にもいかない。

もしかしたら妹紅はこうなる事を見越して今日に定めたのだろうか。

……それを聞くのは多分、野暮であるという物。

上白沢慧音はその姿を竹林群の中へと投じた。

一軒の小さな家屋を発見した。

横にいる紫に止まるよう片手で促して、私はその小屋を見据える。慧音を倒した場所から数分飛んで見えたこれが、恐らく輝夜の言つていた肝試しの標的が住んでいる家なのだろう……いや、肝試しに来て標的を探しにくるというのも不思議な話ではあるのだが、慧音と紫の会話と輝夜の様子から察するに、きっと此処に住む何者かを『試して』やれば良いのだ。

いや、あるいは――

「よう、お一人さん」

本当の意味で、私の肝を試すつもりだつたのか。

私にも紫にも気配を悟らせることがなく宙に浮いていた彼女は、その口角を愉しそうに吊り上げてそう言い放つた。――月の光を受けて白銀に輝く髪、永遠亭に居た兎とは違う燃え上がるような赤い瞳。恐らくは袴の類だったのであろう物を、動き易くする為だけに整えたといつた感じのモンペ。そして何より、彼女の髪の所々で揺れる奇怪な文様のリボンが目を引く。

「……藤原妹紅」

隣で紫が忌々しげに呟くのを聞いた。

妹紅はそこでようやく隣に立つ紫へと視線を向け、向けて、固まる。

「げっ」

そして表情を苦々しく歪めた。

具体的には、厄介事を持つてきた紫に私がするような顔を。

「あー……何でいうかお前、付き合う相手はちゃんと考えた方が良いぞ？私は今まで色んな人妖を見てきたけども、その中でもお前の隣にいる女はとびつきりの極悪妖怪だ」

「知ってるわよ。ついでに言うと、私も博麗の巫女の中ではとびつきりの不良巫女らしいから不便を感じたことはないわ」

「ああ、良く知つてゐるとも」

その咳きの意味を私が尋ねる前に、妹紅は続けざまに口を開いた。

「それじゃ、改めて自己紹介。私は藤原妹紅、この竹林に住む不老不死の人間さ。お前には『ひよりの弟子』つて言つた方が伝わり易いか?」

「……アンタが?」

「おう。何なら隣の隙間妖怪にでも聞いてみれば良い。そいつだつて、一応は私の顔見知りだからな。一応は」

そう言われて、私は隣に浮く紫へと視線を遣る。

紫は観念したように溜息を吐き、そして渋々と言つた様子で口を開いた。

「ええ、認めたくないけれどその通り。彼女はひよりが公言している数少ない親友の一人よ。まさか、本当に竹林に住んでいたのね」

「なんだ、分かつて来たんじゃないのか?」

「分かつてたから貴女以外である事を願つたのよ」

それは誰が聞いても分かるような挑発だつたが、妹紅はそれを軽く笑つて受け流す。

「そりや私も同じだ。見たところ、お前さんは八雲以外にも連れて来れる奴が居たんじゃないのか?私としちゃあ、その方がやり易くて助かつたんだけどな」

ああいや、と妹紅は態どらしく片手を使つて謝る仕草を見せた。

「そうしたらお前が一緒に行く奴が居なくなつちまうのか」

「ぐ、ぐぐ……靈夢!」

私の背後へ回り、両手で肩を掴みながら妹紅を睨む紫に内心で苦笑する。

藤原妹紅を正面に捉えた。

「さあ、始めましょうか」

「違うわ靈夢、フオローをして頂戴?」

「唯勝負するだけつてのもつまらないし……そうだな、何か報酬でも付けるか」

紫がクイクイと両肩を引くが、そんなことに構つてゐる余裕はない。

「——うし、決めた。お前達が勝つたら、一つ良い事を教えてやるよ。安心しな、お前達が負けても、私は何も要求しないから」「どういうつもり?」

紫の両手が私の肩から離れた。私も紫も、互いに数メートル程幅を開けて身構える。

今まで紫から囁かれ続けていたことが事実ならば——

「どういうつもりも何も——」

今まで普通に笑っていた顔が一転、博麗の巫女と妖怪の賢者をしても畏怖する物へと変わる。

まるで獲物を見つけた時の獣のような、凶暴な笑みで

「有り得ない方に不利な条件をつけて、何の問題があるってんだ」

——蓬莱『凱風快晴——フジヤマヴォルケイノ——』

彼女は高らかにそう宣言した。

『認めたくないけれど妹紅は強いわ。多分、弾幕ごっこなら貴方や魔理沙に並ぶ程』

『でもそれと同時に、彼女はその実力を人を傷つける為には使わない』

『だから靈夢、貴方が勝つて頂戴』

……とは言つた物の。

「……っ、ちょっと、もう!」

少々此方に弾幕をばら撒きすぎなのではないだろうか。

妹紅は靈夢相手に全力の弾幕を仕掛けることはない。紫が一緒ならば兎も角、彼女単体で挑めばまず間違なく勝てるだろう。だから二対一ではなく、一対一と一対一になるように距離を取つた。此処までは良い。此方の方の弾幕が靈夢よりも難しいのも、勿論想定内だ。

ただし、その量とレベルだけが思つていた物と違つただけで。

改めて、藤原妹紅という少女の生真面目な姿勢に感服させられる。

彼女が竹林の外へ出ていないのは紫自身が良く知っている。その上でこの強さ——恐らくは、相当練習を重ねて来たに違いない。永遠亭の永琳や輝夜の弾幕は確かに難題ではあったが、此処まで『完成』されてはいなかつた。即ち、妹紅はこの弾幕を習得する為の練習を一人ないし慧音としかしていなかつたという事である。

だというのに、妹紅の弾幕はまるでそれ自身が自分の代わりとでも言わんばかりの美しさと、何より彼女らしい激しさを併せ持つていた。相手によつてこうも手を加えたり抜いたりしてしまつのも、やはり妹紅らしいもので。

紫は炎と靈符の隙間から見える妹紅の表情を窺つた。

楽しそうな、彼女の顔を。

「相変わらず、気に食わない顔ね……」

誰にも聞こえていないであろう、紫は一人呟いた。

思えば、妹紅が笑つている所を見るのはこれが初めてではなかつただろうか。嘲笑や当て付けのような笑いならばあつた。けれど、彼女がああも自然に笑つているのを見るのは初めてだつた。私や藍が居る時は決まつて口をへの字にして、常に藍と睨み合つていたのをよく覚えている。

『断言してやるよ。お前がその理想郷をひよりと一緒に作つても、お前は一生人と仲良くする事なんて出来ない。幾ら他の妖怪を嗾けた所で、お前に対する人間の印象なんか変わらない。だからお前は紫さんで、ひよりは母さまなんだろうが』

そう言つた彼女に、果たして私は何と答えたのだったか。

「ちつ、これも凌がれたか」

スペルカードを限界まで使い切つた妹紅が舌打ちと共に姿を現す。チラと横を見れば、そこには此方と違ひ然程消耗した様子もない靈夢の姿が。

「……驚いた」

妹紅のそんな言葉を聞き、私は靈夢に対する称賛かと内心で歓喜する。

けれど、妹紅は靈夢ではなく私を見ていて――

「昔、お前に言つたよな。お前じや人と仲良くなんてなれないって、もう覚えてないだろうけど」

そんな事はない。あの日から、一時たりとも忘れたことはないのだ。

しかしそれを口に出すのは癪なので私は沈黙を貫いた。

妹紅は続ける。

「――訂正するよ。紫、お前もやつぱり師匠の『親友』なんだな。どうしても納得がいかなくて今までずっと考えてたけど……うん、今なら分かる。結局、私達の目指した場所は一緒だつて訳だ」

私やひよりに比べて些か不器用ではあるけどな、と彼女は小さく呟く。

だが、私はそんな軽口にも反応出来なかつた。驚愕の余り、言葉を忘れていた。

……妹紅が私を認めた？

「ちよつと、戦闘中に空気を湿らせないで頂戴」

「ごめんごめん、この機会を逃すと言える気がしなくてさ。靈夢は知らないだろうけど、昔の私はこいつの事好きじやなかつたんだよ」

「私は今でも好きじやないわよ。厄介ごとばっかり持つてくるし、修行しろだの何だのつて煩いし、この隙間妖怪が絡むと碌なことが起きないわ」

でも、と今度は靈夢が横目に此方を見る。

「妖怪の賢者じやない時の紫は、まあ、嫌いじやないけど」

妹紅はニヤニヤとしながら此方を見ている。靈夢も、妹紅に攻撃する素振りを見せない。

どうやら私の言葉を待つているようだつた。

――否、答える必要はない。

「……靈夢、とつとこの蓬萊人を倒して帰るわよ」

「おいおい、素直じやないなあ。此処は普通、互いを認めあつてハツ

ピーエンドじゃないのか

「ハツ。ピーエンドも何も、私達は肝試しの為に此処へ来たのよ。私達にとつてのハツピーは肝試しを終えることだから——そうね、頭に付いてる紙切れを一枚くれればそれで良いわ」

妹紅は困ったように肩を竦めて、靈夢はクツクツと笑つて札を構えた。

「そういう訳だから、えーと、妹紅だつたかしら？ 話はまた今度、ゆつくり紫として頂戴。とりあえず今は、私達とアンタは退治役と嚇かし役つてだけよ」

「……今更ながら、私はいきなり押しかけられてきて『さあ嚇かせ！』って言われてる状況なんだな」

来るわよ、と靈夢が私に促す。

——そう、答える必要はない。思い出す必要もない。

「でもま、精々嚇かしてやるとするか！」

ただ、彼女にも分かるように示すだけで良いのだ。



全てが終わつた後、妹紅は大の字になつて竹林の中に倒れていた。

「はあー」

負けた。二対一とは言え、一切手加減はしなかつたというのに。

地面に倒れている妹紅の姿には傷一つない。それもその筈、余りにも苛烈な弾幕の所為で靈夢も紫も反撃すら許されなかつたのだ。本来ならそれだけでも誇るべきことなのだが、当然妹紅は二人の外での評価を知つてゐる訳でもないので。

全てのスペルカードを避けきつた以上、自身の負けであると。

その証拠に妹紅の頭からは一つリボンが消えていた。

「ん……」

ザクリと、そんな足音を耳にする。誰かは語るまでもないだろう。

「いやあ、完敗だつたよ。これでもそこそこやつた自覚はあつたんだけど、まさか当たりすらしないなんて」

頭上にて自身を見下ろす少女——ひよりにそう言つて、妹紅は身体を起こす。

当然のことながら本来慧音と妹紅と共に一夜を明かすつもりだったひよりは先の弾幕ごつこの最中妹紅の家の中に居た。二対一にも関わらず妹紅がひよりの助力を求めなかつたのは、そういう戦いではなかつたからだ。大事なのは勝敗ではない。肝を試す為に、彼女達は此処まで来たのだから。

「肝かん……知つてる？」

「ん、何だそれ」

「肝と同じ字で意味が違う奴……何だつたつけな、意味。確か——」

「まさかころ」

そういつて私に手を差し伸べたひよりは、珍しく優しい微笑みを浮かべていた。

「お疲れ様」

「本当に。いい迷惑だつての……つたく」

手を取つて起き上がり、今頃私のリボンを見て喜んでいるであろう輝夜に悪態を吐く。

実は今日此処にひよりが来ることを知つているのは、私と慧音とひよりを除くとたつた一人しかいないのである。それは、何やら忙しそうに準備をしている所を邪魔してやろうと自慢げに話した相手——蓬萊山輝夜。靈夢は何かしらの口車に乗せられて紫と共に私を退治しに来たのだろう。自分で直接来ない辺りが見事に私の機嫌を逆撫でしてくれている。

けれども、今回だけに限つては感謝しても良いのかも知れない。

ひよりと共に家へと向かいながら、妹紅はポツリと呟いた。

「良い機会だつたよ」

「そうだね」

良い機会。慧音にも、靈夢にも。

そして勿論、私と紫にも。

「正直、私は妹紅が紫を認めるとは思わなかつたけど」

「……本心だよ。今のアーツを見たら、昔言つた言葉が相應しくなつて氣付いた」

靈夢の背に隠れる姿はお世辞にも格好良くはなかつた

それでも、そこに人へと歩み寄ろうとする紫の姿を垣間見たのだ。

「ああ、歩み寄ると言えば……」

と、此処で自分の失態から何食わぬ顔で横を歩くひよりへと承先を変える。

「『靈夢とどう接してあげればいいか分からぬ』——だつけるか」「……」

フイと視線を遠くの竹藪へ移したひよりを見、口角を吊り上げながら覗き込む。

それはつい数刻程前、まだ妹紅が家中でひよりと祝宴を交わしていた時に彼女が打ち明けた悩みだった。——曰く、『靈夢には元々先代が居た。自分は良いとしても、靈夢に思い出させたくない』と。真剣な顔でそんなことを言うひよりを初めて見たものだから、大事な事だと分かつていてもついついからかってしまう。

素直に羨ましいと感じた。

ひよりに想われる靈夢を、靈夢に想われるひよりが。

「大丈夫だつて、師匠。二人を見た私から言わせて貰うけど、もう時間の問題だと思うよ」

時間の問題。あとはひよりが神社に帰つて、靈夢と会うだけで良いのだ。

もうその為の後押しはしてある。

「……だと良いんだけど」

「それより問題なのは慧音だよ。話しただろ？人里で教師をしてる奴なんだけど、ひよりと会うのを死ぬ程楽しみにしてたんだぜ？」

一昨日の様子から考へるに、恐らく相当後悔しているに違いない。

「そういえば、戻つて来なかつたね」

「まあ、慧音も何か思うところがあつたんだろーよ。妖怪化したまま帰つたつてことは、そういうことさ」

彼女もまた一步先へ進む決心をしたらしい、と。

目前にまで迫つた自分の家の扉へと近付いて、自分の身体だけを滑り込ませて、パタリと閉じる。

「という訳で、ひよりもとつとと帰るように」

「——え」

「はい、おやすみ」

そう言い放つて、扉に背を預けたまま外のひよりの様子を窺う。彼女は数秒程その場で啞然としていたようだが、やがて小さな溜息と共に踵を返していった。

「……ふう」

誰もいなくなつた我が家で深く息を吐く。

正直言つて非常に疲れた。戦うのも、認めるのも、本当はそんなつもりはなかつたのだが。

けれど不思議と悪い気分ではなかつた。自覚しているが、こう見て自分は他の人と居るのが好きなのだろう。だからこそ、いがみ合う奴が一人減つて少し気を許せる奴が一人増えたのは嬉しかつた。ひよりが此処に来てくれなければ、果たしてそうなつていたか如何か。

「相変わらず、師匠は停滞だけ許してくれない」

独白。思い出すように、確認するように。

輝夜との喧嘩も、紫とのいざこざも、竹林暮らしも、これで止められてしまつた訳だけども。

「——よしつ」

その分、前へと進めるような気がした。



「（）苦勞様、靈夢。私、ますます貴方と仲良くなりたくなつちやつた」

「……どうも」

竹林からリボンを片手に神社へ帰ってきて、数分。

私は妹紅のリボンを片手に上機嫌な輝夜の隣に座っていた。風が縁側に吹き込み、輝夜の持っているそれもヒラヒラと靡く。その様子を眺めながら、私はそのリボンを手渡してくれた真紅の蓬萊人の言葉を思い出す。

その顔にとても良い笑顔を浮かべた妹紅の言葉を――

『ひよりは、お前さんが先代を思い出しちまうんじやないかつて遠慮してるんだ』

『……ありがと、それだけで充分よ』

『会つてかないのか？』

『良いわ、別に。だつて紫もアンタも当然来るでしょ』

『そりやまあな……恥ずかしいか？』

『……』

『冗談だよ、冗談。んじや、輝夜に会つたら精々よろしく言つて置いてくれよ。多分あいつのご褒美を奪つてやれただろうから、念入りにな』

『はあ……アンタも性格悪いんじやない』

『だからこそ、お前とも仲良くなれそうだ。また今度、ゆつくりと話そ
うぜ靈夢？』

最後の提案には結局答えなかつたが、彼女ならば勝手に来るだろ
う。

「――という訳で靈夢には約束通り、良い事を教えてあげる！」

よく聞くのよ、と。輝夜はそう言つて息をゆつくりと吐いた。

そして

「ひよりも靈夢のことを心配して踏み出せなかつたのよ。この間の異変を準備してる時にそう言つてたわ。それで、宴会の時に魔理沙から話を聞いて思わず来ちゃつたつて訳！どう？驚いた？」

驚いた。妹紅の予想はピタリ的中してくれた訳だ。

しかし何故彼女、ここまで見抜いて置きながら私に任せたのだろうか。

「……」

「あら、何だか微妙な反応」

彼女ならば、私はこういう事が得意でないことも分かつていたのではないか。

「えーと、輝夜。ちょっとその、良いかしら？」

「？……ええ、勿論。何かしら」

演技は出来ない。嘘も苦手。であれば、残る手段は唯一つ。

「実は——」

「ただいま」

「おかえりなさい」

誰に宛てるでもなく言つたそれに、居間でお茶を啜つていた靈夢が答えた。

妹紅の家から閉め出しを食らつて真っ直ぐ帰つてきたものの、時刻は既に夜中の二時を回つている。本来であれば靈夢も私も寝ている時間なのに彼女が起きているのは一体如何いうことだろうか。もしかしたら、黙つて出ていったことで余計な心配を掛けてしまったかも知れないと——

そう思い到つた辺りで、靈夢はバタリと卓袱台に倒れこんだ。

「……肝を冷やしたわ」

「？」

「来るつて分かつても、怖い物は怖いわね」

独り言よ、気にしないでと靈夢は言つた。

靈夢達と妹紅の対決には然程肝を冷やす要素はなかつたと思うのだが——気にしないことにした。

……今まで巻き込まれたら嫌だし。

「ねえ、ひより」

そんな余計な事を考えていたら、靈夢は伏せた顔を此方に向けて私

の名を呼んだ。

「……」

「……」

沈黙。

靈夢は少しの間目線を何処か遠くへ遣つて、それから小さく、本当に小さく言葉を発した。

「……ひよりにとつて、私は何なのかしら」

ともすれば外の森の虫達の羽音にすら搔き消されてしまうような声。

妖怪である私の耳には、勿論しつかりと聞こえていたが。

「」

そして考える。私にとつての靈夢とは何か。

答えは出ているのだ。それを言葉にするのが、とても難しいだけで。

それでも――

それでも、私の本心を口にするのであれば――

『家族』……かな

娘ではなく、家族。この言葉を選んだ私の気持ちは、果たして靈夢に伝わってくれるだろうか。

「私は」

靈夢は一瞬迷ったように口を噤み、ゆっくりと体を起こして、私へと向き直つた。

「私も今はひよりのことを家族だと思つてる。顔も知らない先代よりも、ひよりの方がそう思える」

ほんの少しだけ先代が哀れに思えたが、心の中で謝るだけに留めておく。

何故なら今、私はたつた一人の家族からお願いされているのだ。

「でも――」

でも、と。博麗靈夢はそこで一度言葉を切つた。

彼女の顔にはその理由がありありと浮かび上がつていた。それは、人が絶対に為し得ないことを願う時のような顔だった。月へ行きた

いだとか、地獄を見に行きたいとか、三途の川を渡つてみたいとか——そんな無理難題を叶わないと知つていながら願う時の表情によく似ていた。

けれども、その願いは——

「でも、私は母親が欲しい」

——それは、見た目相応の少女が望むに値するさきやかな願いであつた。

「うん」

私は頷いた。頷いて、靈夢の前に座つた。

靈夢は頬を真っ赤にして、今にも部屋を出ていきそうな勢いだった。

そうまでして本音を口にした靈夢。返す言葉は、一つで良い。

「私も靈夢が娘なら嬉しいな」

「——つ」

バツと音がする程強く、靈夢は身体ごと私とは正反対の方向にやつてしまふ。

いや、そんな露骨に背を向けられると流石にこつちも恥ずかしくなつてしまふのだが。

「靈夢」

「つな、何？」

回り込みつつそう呼んだが、見事に反対を向かれる。

「……夜も遅いし、今日はもう寝ようか」

何時までもこうしていても仕方ないので、私はそう言つて立ち上がつた。

後はもう、何も言わなくて大丈夫。妹紅の言うとおり時間が解決してくれるだろう。

「……そうね」

続いて、靈夢も立ち上がって湯呑みを片付けに流し台の方へと向かう。

私はそんな靈夢の後ろ姿を眺めつつ、寝室への襖に手を掛け――

「一緒に寝る?」

「寝ないわよ」

一緒に寝た。

『地の底に華ありて』

博麗神社の一日は、寝室から出てきた靈夢の大きな欠伸から始まる。

まずは私が靈夢に挨拶。数秒遅れで思い出したように靈夢が同じように挨拶をし、卓袱台には着かずそのまま縁側へのそのそと移動する。日光を浴びると目が覚めるらしい。妖怪であるが故にそういうた感覚とは無縁の私だが、確かに陽が昇るのを見ると今日も一日頑張ろうと思える。

そんな彼女の後ろ姿に視線を配りながら手元にあつた櫃からご飯を手の上へと乗せ、そのまま手の中で何度も柔らかく握りこんでオニギリにする。私が封印される前にはない風習なのだが、今時はオニギリには具を詰めたり海苔という物を巻いて食べるのが主流だそうだ。靈夢に言われてその通りに作つてみたが、確かに具が入っている方が楽しいし海苔のお陰で白米が手に付かないのは非常に喜ばしい。ねえにも今度作つてあげるとしよう。

程なくして、大皿には小さいお握りが大量に盛られることとなつた。

……。

大事なのは大きさではないのだ。例え手の大きさの問題で二口サイズ程度の物しか作れないとしても、それで味を損なうとかそんな事はない。そう、大事なのは外見ではなく中身。愛情さえ込めてあれば良いのだ。

——と、

風切り音。誰かが庭先へ降り立つ音。

何者かが庭先に来たことで、私は嵌りかけていた沼思考から脱却して料理を再開する。

「いよつ、靈夢！ひより！タダ飯食いに來たぜ」

「帰れ」

「おはよう」

靈夢の横を通つて入つてきたのは、もうすっかり見慣れた白黒魔法

使いこと霧雨魔理沙。

此処までが博麗神社の基本的な朝の日常風景である。私が料理をしている間に靈夢が起きて、魔理沙が来て、偶に起きていたら萃香も交えて朝食を食べる。魔理沙もどうやらあまり自分で料理をしないらしく、且つあまり良い物を食べていないので此処最近は毎日朝食を食べに来ていた。

魔理沙は一度卓袱台の上のおかずを見、そして私の居る台所の方まで来た。

「お、今日は御握りか」

これ運んでおくぜ、と申し出てくれた魔理沙に皿を任せる。

恐らくは一番上に積んであつた奴が一つ卓袱台に着く前に消えることになるだろうが、魔理沙に任せることその程度は黙っているのが一番良い。というか、無駄だつた。

空になつた櫃に水を流し入れて、私も二人が待つ居間へと向かう。

「はあー、美味かつた……」馳走様！」

「美味しかつた、ご馳走様」

思い切り両手を上げて、そのまま床に倒れる魔理沙。

その横で同じく食事を終えた靈夢はそんな魔理沙を白い目で見ながら両手を合わせた。

「ん、お粗末様」

そんな二人を見て、私はここ数日で二人に表れるようになつた変化に思いを馳せる。

魔理沙は見ての通り、博麗神社に居る時は彼女らしく振舞うようになった。元々靈夢と萃香だけの時はそうだつたようだが、私が来てからの数日は借りてきた泥棒猫のように大人しかつたのだ。別段何をしたという訳でもないので、一体私の何を見て彼女が自分らしく振舞つても大丈夫と判断したのかは分からぬ。彼女の緊張が解れたのは私が飛行練習の時に石畳を頭で碎いた辺りからだが——詳細な

追求はやめておこう。聞くと傷つく氣がする。主に私が。

二人が食べた食器と自身のそれを重ねた所で、私の手は隣にいた靈夢に止められてしまった。

「もう、良いつてば。私が片付けるから」

大人しく待つてなさい、と言つて台所へ消える靈夢。

肝試しから数日。靈夢は分かり易く態度を変えたりするような事はないのだが、何処となく雰囲気が柔らかくなつた氣がする。それに、一緒に縁側や賽銭箱の上で日向ぼっこなんかをする事も多くなつた。元々私も靈夢ものんびりとするのが好きなので、これは正直に靈夢との距離が縮まつたと喜んでも良いのだろう。最近では彼女の方から手伝いを申し出してくれることすらある。

……まあ、食器の量と私を見て何か思う所でもあつたのかも知れなけれど。

食器を流しに置いてきたのだろう靈夢が、再び私の隣へと座つて口を開いた。

「ひより、アンタ次に行く場所は何処にするか考へてるの？」

ちなみに母さまやお母さんとか好きに呼んでくれて構わないと言つたのだが、何やら俯いてボソボソ言いつつ却下された。彌里の時は母さまだつたので、是非とも母さんと呼ばれてみたい気持ちはあるのだが。

と、そんな下らない思考を切り上げて靈夢の言葉を反芻する。

「何処に……何処にしよう？」

「そんな一杯あるのか？」

上半身だけ起こして訊ねてきた魔理沙に頷いて答える。

この間は会えなかつた慧音や当代の稗田がいる人里、何故か私を待つてゐる幽香。それに、この間の宴会で輝夜と喧嘩していた人からは是非『紅魔館』に遊びに来てくれと言われていた。輝夜と妹紅も似たようなことを言つていたが、彼女達とはついこの間色々したばかりなので二人で仲良く遊ぶように言つてある。

だからまあ、優先するとすれば――

「地獄かな」

「……」

何故か靈夢と魔理沙が顔を見合わせて沈黙。

程なくして口を開いたのは魔理沙だった。

「えーと、余りに多すぎて地獄みたいな気分ってことか？」

「ううん、地獄」

「……地獄つて言うと、閻魔だか何ちゃらが居て死んだ奴が行く所だよな」

「あ、えーと……旧地獄、だつたかな」

紫と映姫が話していた時、朧気にだがそんな風に言っていた気がする。

二人の可哀想な人を見るような視線から察するに今はまだ地底の存在は地上には知られていないのだろうか。その辺りは萃香か紫に聞いてみないと分からぬが、だとすれば、今は靈夢や魔理沙に詳しく述べをし過ぎない方が良いのかも知れない。

さてどう言い繕おうかと考えた矢先、靈夢がゆるりと首を振った。
「決まつてるなら別に良いわ。ちゃんと帰つて来なさいよ」

とりあえず今日の昼と夕はコイツと何とかするから、と卓袱台から靈夢の側へと飛び出していた魔理沙の足を指差してそう言う。卓袱台の向こうから親指が立てられた。

であれば、お言葉に甘えさせて貰うにしても早い方が良いだろう。
私は立ち上がり、軽く身嗜みを整えて縁側から外へと出た。

振り返る。

「それじゃ、行つて来る」

いつてらつしやい、と。

二人分の声に背を向けて私は妖怪の山に向けて飛翔した。

◇

數十分後、私は妖怪の山の中腹辺りにある巨大な洞窟の淵に立つて

いた。

ぬえを助けにいった時は紫のスキマで直接飛んだので正確な場所が分からず困っていたのだが、途中出会った白狼天狗の少女が親切なことに道案内を買って出てくれたのだ。妖怪の山は今でもあまり余所者を歓迎しないと聞いていたので疑問ではあつたが、少女の話を聞くにどうやら天魔が方々に手を回してくれていたらしい。なので、私は道中彼女——犬走樋から妖怪の山の内情について教えて貰うことが出来た。

曰く、文は新聞作りに没頭していてまともに仕事をしていないらしい。今もどうやら人里に新聞を届けている真つ最中らしく、そうでなければ樋は文を私の元へ向かわせてくれるつもりだつたとか。何故樋が私と文の関係を知っているのかと思えば、どうやら彼女、この一千年の間に鴉天狗から大天狗へと昇格したらしい。そして樋は数多く居る白狼天狗の中で、唯一とも言えるトンデモ上司の下に就いてしまつた白狼天狗の一人であるとのこと。

「——つと、到着しました、此処が地底への入り口です。……すいません、結局私の愚痴ばかりでしたね」

何處かスッキリとした顔の樋が申し訳なさそうに頬を搔く。

そんな樋に楽しかつたと告げると、彼女は本当に嬉しそうに微笑むのだった。

「では、ひより様。また今度、私用で会える事があれば」

そう言って森へ戻つていく樋を、私は心の中で密かに応援しておいた。

さて――

意識を再び正面に向けて、ポツカリと開いた空洞の中を覗き込む。「……深」

洞窟内部は只管下へと続いているようだ。吹き込んでくる風から察するに数百は下らないだろうか。

此処を飛び降りた筈の萃香達は誰も怪我していなかつたが、あれは参考にしてはいけない。

「よつと」

故に私は姿を蜘蛛に変えて風穴へと飛び込んだ。

今まで確かめた中での最大は鳥居の上からの十数メートルだが、その高さまでなら蜘蛛は他の動物に比べて高所からの落下で然程衝撃を受けずに済む。その辺りの理由は紫に訪ねれば判明しそうではあるが、如何せん蜘蛛の苦手な彼女にこの話を振るのは酷なのでやめておこう。

ちなみに蟻なんかでも問題はないのだが、これには佐渡島で狸を選んだのと同じ理由があつた。

即ち、捕食。

「……」

人の姿で降りるよりもゆつくりとした視界の隅で同業者の巣を見かけて安堵する。

少なくとも蜘蛛の姿なら、こいつた蜘蛛の巣に引っ掛かってしまうという事はないだろう。

……と思ったのだが。

「——つ」

引っ掛けた。それはもう、見事なまでに。

一体何が起きたのかと下を見てみれば、自らの八対の足が巨大な蜘蛛の巣に引っ掛けた。……いや、引っ掛けたというよりは乗つかつたという方が正しいのだろうか。人間の姿の時の私を二人分程並べただけの大きさの蜘蛛の巣が、洞窟の途中を蓋で塞ぐかのように張られていたのだつた。

一応足搔いてみるも、糸は見事にくつ付いて離れる気配すらない。仕方ないので妖術で火を起こそうかと考えた矢先に――

「ふんふふーん」

彼女は現れた。

「ふんふんふふーん」

いや、現れたというよりかは昇つて来たという方がしつくりくる。

とても奇妙な格好をした少女だつた。魔理沙の着ている服を茶色と黒にして、そのスカートの先を膝下辺りで纏めていると言う他表現の仕様がない服装。恐らくは西洋風の格好だと思われるが、今までに出会つた内の誰にも当て嵌まらないその姿に思わず言葉を失う。

否、唯そういう格好で来られたのなら驚きはしなかつただろう。私が絶句したのは、そんな言葉では表せないような格好の少女が上下逆さまの状態で私の視界へと映り込んで來たからだ。

一瞬自分がひっくり返つてゐるのかと思つたが、しかしそうであるならば彼女は鼻歌を歌いながらこの縦穴を落下してゐることになる。流石にそれはないだろう。

と、不意に逆さ吊り少女の焦げ茶色の瞳が私を捉える。

「ふんふ——……ん？」

ツツイと、そんな音が鳴りそうな動きで少女の顔が間近に迫つた。彼女は一瞬目前の現象に理解が追いついていなかつたようだが、もがき続ける私と巨大な蜘蛛の巣を見、途端に顔を青褪めて私へと手を伸ばしてきた。

「うわあつごめん！」

彼女の指が腹の下へと差し込まれ、不思議な事に糸とくつ付く事無く私を掬い上げる。

普通の向きに戻つた少女は私の隅々を確認し、やがてホツと胸を撫で下ろした。

「よかつたあ……同族を引っ掛けて怪我させたとあつちやあ、表を歩けなくなつちやうよ……」

大丈夫かい、と問うて來た少女にとりあえず感謝の念を送つておく。

「いやいや、謝るのはこつちの方さ。誰も通りやしないのに見栄張つて横糸を太くしちやつたんだよ、ついこの間。丁度、君の引っ掛けた辺りがそなんだよね」

なんと彼女は私の声なき声が聞こえるらしい。この姿では話すこ

とが出来ないので如何しようかと考えていたが、少女の反応を見るにそれは杞憂であつたようだ。

とすると、彼女は……

「自己紹介が遅れただけだ、私は黒谷ヤマメ。——そう！蜘蛛社会きての出世頭、土蜘蛛の黒谷ヤマメ様とは何を隠そこの私の事なのさ！」

勿論知つてゐよね？と期待の眼差しで此方を見るヤマメに首肯する。

土蜘蛛といえば、私とぬえが京で大暴れした少し後に都を大きく騒がせたことで有名だ。確か鬼のような顔で、虎の胴体を持ち、クモの手足でワサワサと動いて人々を恐怖させたのだつたか。当時ぬえの痕跡を探していた私は、密かながらにその目撃談と噂話を元に正体を探つていた。まさかそんな姿で人を驚かせる妖怪がこの世に二人も居たなんて……と、これはどちらの前でも言わぬ方が良いだろう。

特に自慢げに胸を張つてムフーと鼻息を鳴らす彼女には。

「にしても、君は一体何処から来て何処へ行くつもりだつたんだい？どうやらこの辺の蜘蛛じやなさそうだし、それにほんの僅かだけど妖力も持つてる。態々こんな所まで来なくとも円満にやつていけるだろうに」

ツイツイと背を突かれつつそう問われる。

私は素直に答えた。

「この先の旧地獄に行きたい？何ていうか、物好きだね君。あそこ、普通に蜘蛛の串焼きとか売つてる所だよ？」

旧地獄には人の姿で行くことを固く決意。

ヤマメは暫し悩んだようだが、やがて仕方ないとばかりに肩を竦めた。

「……まあ、良いや。君がそういうなら止めないさ。これが普通の仲間達だつたら止めたんだろうけど、君みたいに話の通じる奴が行くつてことは何か勝算があるんだろう？」

ヤマメの問い合わせ再び肯定の意を示す。

ここでヤマメに自分の正体を明かすこと考えたには考えたのだ

が、彼女の同族好きから想像するに話が出来ると分かつた瞬間引き止めようとしてくる気がした。無論彼女のことが嫌いな訳ではないが、靈夢との約束もあるので今回は私情を優先させて貰おう。ヤマメが私の正体を知つて尚同族だと思つてくれるのであれば、またこうやって話す機会もあるだろうし。

ヤマメは私を手に乗せたまま先の巣よりも下り、そして壁の傍に手を伸ばした。

「はい、此処から降りていけば引っ掛かることなく下まで行けるよ。分かってはいるだろうけど、ちゃんと下が見えて来たら壁に糸張つとくんだよ？幾ら蜘蛛つていつても、この高さで糸なしさ自殺も良い所だからね」

「！」

思わず洩れてしまつた衝撃にヤマメが白い目で私を見る。

「……訂正。君、私の巣に引っ掛けながら糸を張らずに下まで行くつもりだつたんでしょう？私が謝ったの取り消すから、代わりに君が感謝して頂戴」

八本の足を彼女に見えるように掲げて合わせた。蜘蛛が出来る最大限の感謝の姿勢である。

ヤマメは苦笑しながら顔を近づけた。

「それじや、この借りは何か別の形で返して頂戴ね？」

言外に無事帰つて来いと言つてくれているのであろう、私はヤマメに了承の意を示して。

そして、長らくいた彼女の手の上から飛び降りる。

一番下へと辿り着いたのはそれから数分後のことだつた。

「……」

ヤマメの忠告通り、壁に糸を張つてスルスルと下つていく。

ちなみにこういった動物固有の動きをする時私は彼等に任せつ放しにしている。鳥の翼や犬のような四足歩行位ならば自分でも出来

るのだが、蜘蛛なんかはサツパリなのだ。増えた足を動かすのは体の延長線上だからか問題ないが、糸を吐き出すことだけはどうしても出来ない。何度か彼等に教えを請うた事もあつたのだが、結果はこの通りである。

そうこうしている内に地面へと降り立ち、私は姿を人へと変える。「よつと」

文字通り、地に足が着く感覺。

何度か手を握り、足を前後に振つてから風穴から外へと出る。
そして

「」

視界一面に広がつた燈の灯と絶える事のない喧騒に私は息を呑む。嘗てぬえと都に出入りしていた時に見かけた祭事に勝るとも劣らない賑やかさ。けれど幟のような物は見えていない。であるならば、この景色こそが今の地底の日常なのだろう。

一千年前、此処には岩と怨霊しかなかつた。僅か数ヶ月で、彼女達は都と変わらない程の町並みを築いてみせた。

そして今、目の前から聞こえてくる喧騒はとても四十そこいらの妖怪達の声ではない。鬼の、鬼以外の、人ならざる者達が笑い、怒り、叫ぶ声が聞こえてくる。それはまるで、結局私が人間だった頃に楽しむ事の叶わなかつた都の祭りのようであつた。此処までこの旧地獄を発展させて来たのだろう彼等の絶え間ない努力が、喧騒と共に聞こえてくるようで。

地底の都へ向かつていた筈の足は、その直前——大橋の途中で止まることになる。

「……」

一人の少女が橋の手摺に座つていた。

これまた奇抜な格好の少女である。ただし彼女に関して言えば、先に出会つたヤマメよりは普通の服装だとは思う。余り見慣れた格好ではないが、佐渡より遙か北の方に住んでいる者達に近い服装をして

いるのだ。ともすれば、占い師か何かのような印象を受ける少女だった。

そして金の髪に、淡い緑の瞳。

少女はスタンと手摺から降りて、そうして私の目の前へと立つた。

「……」

視線が交錯する。彼女の瞳の内に、彼女を見つめる私自身の姿が映る。

彼女は、まるで――

「はあ……まるで鏡を見ているみたい」

溜息と共にそう言い放つた少女。その言葉は、正しく私の心の内を代弁していた。

少女の緑色の瞳がゆっくりと閉じられる。

「水橋パルスイよ」

「ひより。よろしく、ぱるしい」

「……まあそうよね。良いわ、とりあえずパルシーよと呼んで頂戴。但し、期間は一月」

それまでに発音出来る様にしなさいとパル……パルシィは鼻を鳴らした。

彼女の瞳が再び私を映す。

「それで、そつくりさんは如何してこんな地の果てに来たのかしら?」

「……そつくりさん」

「名前を覚えていない訳じやないわ。ただ、この呼び方の方がしつくりくるだけ。……大方私達の起源が似ているからとか、そんな感じでしようけど」

起源。彼女が何の妖怪なのかは知らないが、悪感情に関係した妖怪なのだろうか。

気になる所ではあつたが、とりあえず彼女の質問へと答える。

「友達に会いに」

「ふうん?」

パルシーの瞳がユラリと煌き、仄かにその中に光が混じる。

程なくして彼女は疲れたように肩を竦めた。

「……余計な心配は止めなさい。貴女の心配しているようなことは、万に一つもないから」

「……」

まるで心を見透かされているようだった。否、見透かされたのかも知れない。

橋の途中で足を止めたのは何もパルシーが居たからという事だけが理由ではなかった。長い間待たせてしまったぬえや、村紗達と再会するのが何となく怖くなってしまつたのだ。何か言われてしまうのではないかと、昔のように接してくれるのだろうかと、そんな不安が足を止めてしまった。そんな事はない、そう思つてはいるのに。

だがパルス……パルスイは、何の事もないよう心配はいらないと言つた。

その言葉を聞いた途端、何故か私の中に菓食つていた不安が霧散する。

「今回だけの特別サービスよ。この事、旧都の誰かに言つたら二度と貴女の事名前で呼んでやらないから。貴女なら普段の私がどういう性格か、分かるでしょう？」

見た目も在り方も何もかも同一とは程遠い彼女、水橋パルスイの本来の性格。

私が頷くと、パルスイは再び橋の手摺に座つて外を向いてしまつた。

その右手がヒラヒラと舞う。

「分かつたらとつと行きなさい。私、自分の在つたかも知れない未来とか考えるの好きじゃないの」

「うん、ありがとう。パルスイ」

そう呼ぶと、彼女は本当に驚いた風に私の事を見た。見て、慌てて視線を外へと戻した。

私もそんな彼女から視線を正面へと戻し、そして今度こそ旧都へ向けて足を動かす。

——懐かしき友と再び再会する為に。



正しく魑魅魍魎と表現する他ない妖怪の群れをすり抜ける。

既にヤマメやパルスイと出会つて分かつていたことではあつたが、どうやら地底は本当に鬼や封印された妖怪達が共に暮らす都にまで発展しているようだ。おでんや蕎麦の屋台といった定番の物から、ヤマメが散々注意を促していった蜘蛛の串焼き屋。ちなみに一番多いのは居酒屋である。普通の店、居酒屋、居酒屋、居酒屋位の比率だろうか。しかもそのどれもが妖怪達で埋まっているのだから、彼等は案外一日中居酒屋に居るのかも知れない。

私は立ち止まり、周囲を見回してみる。

赤ら顔で笑う鬼。その鬼や他の客に一片に料理や酒を提供する形容し難いウネウネ。向こうでは、たつた今近くの居酒屋で清算を済ませて出て行つた大柄な男が獣混じりの妖怪と取つ組み合いになつてゐる。囁き立てる声。物を壊すなど飛ぶ怒号。ふと視線を先の居酒屋に戻してみれば、店主も客も喧嘩を見るのに夢中のようだ。

見物人の顔には笑顔。組み合つている二人も、心なしか楽しんでいるようにすら見える。

私は暫しの間、彼等に混じつてその様を眺め続けることにした。

男が殴り

獣が噛み付き

けれどそんな事は構いなしに、男は相手の首を掴んで地面へと叩き付けた。

湧き上がる歓声。

「どうだい、旧都は。これはこれで、まあ面白いもんだろう?」

周囲の歓声は相変わらず煩いのに、その声だけはハツキリと私の耳に届いた。妖艶で、芯が通つていて、そこはかとなく楽しげな彼女の声。ポンと肩に手の甲が置かれる。見れば、その手には私の顔よりも

大きいであろう朱塗りの杯が乗っていた。それをグイと顔の方に押し付けてくるので、思いつきり肩を跳ね上げてやる。

おおつ、と声がして——けれど中身が零れるような音は聞こえない。

私は振り返った。

「久し振り、勇儀」

振り返つて、彼女が真後ろにいたので私は限界まで顔を持ち上げる。

着崩れた着物、ほんのりと赤く染まつた頬、先の鬼の顔よりも赤い角。

星熊勇儀は屈託のない笑顔で応と答えた。

「という訳でようこそ。『ひよりはいい加減帰つて来ても良いんじやないか』の会へ！……つつても、もう殆ど終わつちまつてるんだけどね」

たははと笑つて勇儀は彼女達の他に誰もいない店内へと入つていく。

私も同じように彼女へ続き、そして——

「……すう」

「……ぐう」

重ねた座布団を枕に眠る村紗と、村紗のお腹を枕に眠るぬえの姿を見た。

「……」

「丁度お前さんが居なくなつてから一千年つて所だつたろ？今日偶々、酔つた勢いでこの二人が命名したのさ」

まあ昨日も一昨日も飲んだんだけどね、と勇儀は恥じらいもなく笑う。

私はそんな勇儀の傍、ぬえと村紗の元へと近付く。

近付いてみれば、確かに色々と終わっているようだつた。テーブルの下に落ちた村紗の白い帽子。猪口の代わりに使おうとでもしたのだろう、柄杓は熱燗用と思わしき桶の上で所在なきげに揺れついて。ぬえの槍に至つては、その先端に何らかの魚を刺したままテーブルへ無造作に投げ出されている。

私は二人を起こさないようにそつと彼女達の傍へと座つた。

左手をぬえの頭へと伸ばす。

「良く帰つて來たよ、本当に。よく自分の足で此処へ戻つて來た。何があつたにせよ、お前さんが無事で何よりだ」

ぬえの髪を手で何度も梳かし、次に村紗へ。

「だからそんな顔しなさんな。泣き腫らした顔なんて、もうこいつ等で見飽きちまつたよ。萃香も地上に行つちまつたからね、私あ今子供の笑顔に飢えてるのさ」

ツウと、頬に涙が伝つた所で自分が泣いていた事を自覚する。

けれど決して冷たくはない。胸の中に温かい物が広がるのを感じた。

「……勇儀」

「ん、どうした」

私は村紗の頭から手を離し、そして右腕を蛇に変えて中に突っ込む。

ぬえや村紗は良い。彼女達になら、私は素直に感謝をすることが出来る。けれど勇儀にそれを言うのは何だか恥ずかしかつた。同時に他でもない勇儀だからこそ、私は言葉ではないもう一つの感謝の仕方を知つてゐる。彼女には悪いが今日だけは此方を使わせて貰うとしよう。

取り出したのは二つの酒器。嘗て妹紅と共に鬼と戦つた際に勇儀から貰つた杯と、目が覚めた時私が寝ていた社に置かれていたもう一つの杯。

萃香は、私の知つてゐる限り瓢箪から直接酒を飲んでゐるので。

私は勇儀から貰つた方を彼女に差し出した。

「よろしく」

「あいよ——つたく、お前さんも律儀だねえ」

そら、と彼女の瓢箪が宙を舞う。

私はそれを空いている手で掴み、今度は社にあつた方に中身を注ぐ。

「主役は寝ちまい肴は全滅……門出祝いにやあ、ちと寂しいが」

「今日は泊まるよ、ぬえも水蜜も寝てるし」

どうせ明日もやるんでしょ、そう言うと勇儀はニマリと笑つて杯を差し出してくる。

私はそれを受け取り、今度は私が先程酒を注いだ杯を彼女へと渡した。

「それじゃ」

「ああ」

「乾杯」

カツンと乾いた音が他に誰もいない店内に響き渡る。

結局、その一杯で二人だけの門出祝いは終わってしまったのだが。「酷いよ、勇儀さんもひよりちゃんも。私のこと、言ってくれても聞いてくれても良かつたでしよう?」

私も混じりたかつたーと、一輪はそういうてーブルに倒れる。

あの直後、私は勇儀の頼みでぬえと村紗の為に毛布を取りに行つていた一輪と再会した。彼女は曲りなりにも僧なのでと、あまりお酒を飲んではいなかつたようだ。ここで重要なのはあまりという所。この場合それは、つまり村紗やぬえのように眠りこけるまで飲んだくれたという訳ではない。

つまり、何が言いたいのかと言えば

「いえーい！お帰りなさい、ひよりちゃん！」

「ただいま……」

彼女は見事に出来上がっていた。それはもう、完膚なきまでに。

ちなみに村紗とぬえに掛けるつもりで持つてきた毛布は床に散乱している。私の顔を見た一輪が言葉通り諸手を挙げて喜んだ結果だ。これでいよいよこの居酒屋は死屍累々という言葉が相応しい物になつて来たのではないだろうか。多分これから、私も彼女に撫で殺されてしまうが故。

容赦ない抱擁と頬擦りを遠ざける為、私は彼女の両肩に手を置いた。

「本当、一輪達が無事でつ……良かつた！」

「ええー、それはこっちの台詞だよ。ぬえさんに起こして貰つたら地獄だし、聖は居ないし、ひよりちゃんも……グスン」

グググと一瞬力が拮抗したのも束の間、再び私は一輪の胸に埋まつた。お酒を飲むと私の中の彼等も同様に酔つてしまふので、今の状態ではとても一輪に対抗することは出来ない。

……だから私がお酒は好きではないのだ。

「ちよつと、勇儀、助けて」

「んー？ああすまん、今ちよつと毛布を拾うのに難儀してる」

カラカラと笑う勇儀は、しかし正面の席に座つたままニマニマと此方を見ている。

更にその奥、一輪の体を通した向こうで雲山が散らばつた毛布を片付けているのが見えた。一体勇儀は何をどう難儀していたというのだろうか。鬼は嘘が嫌いだというのに、嘘にもならない嘘なら良いのか。というか雲山も見ていないで助けて欲しい。そんな、微笑ましいと言わんばかりの顔で此方を見ていないで。

——と、一輪の抱擁がいよいよ圧しかかりに差し掛かつた所で。

酔いが回つたのであろう、一輪は私の上で勝手に寝てしまつた。

ご丁寧にガツシリと両手で私を抱いたまま。

「勇儀

「おう

「助けて」

「無理無理、毛布が全然片付かなくて」

ちなみに毛布は雲山が一人にちゃんと掛けてくれた。勇儀は動いてすらない。

この惨状、雲山や勇儀が助けてくれなければどうしようもないのだが。

「なあに、一千年振りの再会だ。ちよつとは素直になりなよ。此処の片付けとかお前達の運搬は、私と雲の旦那でやつておくからさ」

なあ？」と訊ねる勇儀。頷く雲山。

あまり回らなくなってきた頭で考えを巡らす。村紗もぬえも寝ていて、だから今日は泊まるしかなくて、しかも動けない。折角寝てくれた一輪を起こすのは論外。しかし此処の片付けが——ああいや、勇儀と雲山がやつてくれると言っていた……言っていたか？まあ、良いだろう。勇儀だけなら兎も角、雲山がいるなら平気だ。もし勇儀が役に立たなくとも、雲山ならきつと。

なら私が寝てしまつても、良いだろうか。

一輪を退かそうとしていた手をゆっくりと降ろし、手だけを動かして辺りを探る。

何か、枕になる物でも——



雲山は入道雲である。故に、喋ることはない。

けれど雲山は全てを見てきた。命蓮寺の面々が封印された後、封獸ぬえの手によつて聖輦船の封印が解除された時から。ぬえと村紗のひより自慢を、一輪と村紗の苦心する様を、ぬえが時々静かに涙を流すことを、勇儀に誘われ皆で酒を酌み交すのを。最初は落ち込んでいた彼女達が、段々と本来の感情を取り戻していく経過を。地の果てにまで来て見つけた、妖怪である自分達を迎える最後の『良心』を。

だからこそ雲山は誰に何を語ることもない。

この鬼も、きっとそう――

「なあ、雲の旦那」

だから星熊勇儀の問いに、雲山は顔を向けたりはしなかった。

ただ力チャ力チャと小さく食器の擦れる音が響く、誰もいない貸切の居酒屋の中。この旧都を作り出した張本人の一人である星熊勇儀は、誰に向けるでもなく言葉を漏らす。

「実は昔、閻魔に説教食らつたことがあつてね。『萃香に全てを任せつきりにするな、お前も何時か周囲を纏める立場になるのだから』――だつたつけな。まあ、速攻逃げたから覚えてないんだけど」

机の下に落ちた村紗の帽子を取る。故に彼女の表情は窺えない。

「本当、萃香がやつてた事をやるのは大変だつたよ。古明地の奴に幾らか任せたつたつて、絶対私がやんなきやいけない事もあるらしくて」

帽子は回収した。後はこれを、彼女の手にでも握らせて置けば良いだろう。

しかし雲山は暫くテーブルの下に居ることにした。

「だから仕事は真面目にやつてるけども、やつぱり責任のある立場つてのは最悪だ。今でもそう思つてるし、多分これからも変わんないだろう」

でも、と彼女は続ける。

「それでもこいつ等の幸せそうな顔見ると、その笑顔に少しだけでも私のやつた事が繋がつたと思うと――どうにも嬉しいもんだ。……はは、らしくないのは分かつてるけどな」

彼女は鬼である。故に、その言葉に嘘偽りはない。雲山はそのことが非常に残念だと思つた。

もしも彼女が嘘を吐ける身であれば、きっとその言葉は雲でしかなり自分でなく、別の誰かにもつと違う形で言えていただろうから。

「――さて、と……馬鹿二人は兎も角、ひよりと一輪はとつとと船まで連れて行かないと風邪引いちまうかね。んじや旦那、下の掃除が終わつたらそつちを頼む」

その言葉を合図にテーブルの下から出る。

見れば、先程一輪に圧し掛けられたまま眠りについたひよりの手がぬえの腕を掴んでいた。そのぬえは、両の手で村紗の手を包むようにして寝ている。どちらも枕を求めての行動だったのだろうが、前者も後者も全くと言つていいほど空振っていた。

けれど確かに、彼女達を見ていると勇儀の気持ちが分かるような気がした。

勇儀は何処からか持つてきた大きな桶を傍に置き、ぬえの腕を掴むひよりの手をそつと解く。そうして、ひよりに抱きついたまま寝ている一輪と一緒に優しく持ち上げて桶の中へと降ろした。

雲山もそれに倣つてぬえと村紗を持ち上げ、勇儀と共に外へと向かう。

勇儀は出口の所で一度雲山を振り返った。

「この話、内緒にしてくれよ？ほらあれだ、雲を見て何とかみたいて言う奴。あれと同じだ。じやないと恥ずかしくて死んじまう」

言われなくても雲山はそのつもりだった。

何も語らないが故に聞かせて貰つた彼女の本心。それを誰かに話そう物なら、それは嘘を吐いたに等しい行為であるだろう。

雲山の心が伝わったのか、勇儀は助かると言つて笑つた。

雲山は入道雲である。故に、喋ることはない。

ぬえや一輪や村紗がこそつて遠慮した勇儀の強い酒を彼女があえて黙つてひよりに飲ませたことも。ひよりに圧しかかつたまま寝てしまつた主にして半身が実はこつそり起きていることや、そんなことは欠片も気付かず本心を語つた鬼のことも。ぬえの槍に刺さつていた魚を刺さり放しにしておいたことも。

気付くべき物は何時かきっと、彼女達自身が気付いてくれるだろう

と信じて。

『ただいまといつてきます』

◇

長い間、夢を見ていた。

それは一つの理想を信じて集まつた者達が、信じた物によつてバラバラに引き裂かれてしまう話。犠牲の上に立つのであれば自らの信ずる道ではないと断言していた彼女は、けれどそつして人々の平穏の為に犠牲となつた。

彼女の言葉を信じて目前に迫る絶望に身を委ねたあの瞬間、皆は何を考えていたのだろう。怒りか、恨みか、憎しみか、哀しみか。少なくとも、喜びではなかつただろう。彼女——聖白蓮でさえ、最後の瞬間に浮かべた表情はやはり悲哀に満ちていたのだ。

私達が志^見していたのは、悪い夢だつたのだろうか？

昔ならばすぐに否定の言葉が出てきたのに、今では答えることすら怖くなる。もしも何時か私が目覚めて、命蓮寺の皆も目覚めたとして、それでまた同じ理想を追い続けるのだろうか。

——怖かった。何の躊躇いもなく聖を封印した人間達が。そして何よりも、こんな事を考えてしまつていてる自分が怖かつた。

それはきっと、封印される瞬間に脳裏に過ぎつた物の所為なのだろう。

命蓮寺^{家族}を引き裂いた人間が

人間を喰らう妖怪が

それ等を形作つている常識が

悲しくて、悔しくて、虚しくて——

私はきつと、あの時初めて世界を憎んでしまつたのだ。

『私が昨日言つた事を意識していれば、もしかしたら共存出来る様になるかも知れない。でも此処に今人間達を入れるなら、それは絶対に叶わない』

『人間達の勝手な行動で、貴女の理想が邪魔されても良いの？』

彼女が問うた、あの瞬間。

もしもあのに戻るとしたら、皆はどういう結論を出しただろうか。

……答えは分かつていて。こんな物は、一時の氣の迷いでしかない。

きつと目が覚めた頃には忘れていた。それこそ、夢でも見ていたかのように。私が村紗水蜜である限り、絶対に諦めたりはしないだろう。星やナズーリンと再会し、聖を助け、そうしてまた理想実現に向けて頑張るのだ。

その先で待つていてる筈の、彼女と再会する為に――

「ぐ……うう……」

頭に響く鈍痛。

氣怠さを通り越して身体が重くなつたような感覚と洞窟内にいるかの如く響く音。いや、音なんて鳴つてはいらないのだが、それすら聞こえてきそうな勢いである。

ここまで思考して漸く、これが俗に言う二日酔いの状態であること気付いた。そして二日酔いであるということは、私はお酒を飲んだという事なのだろう。：確かにえと一人で歩いている所を勇儀に見つかって、そのまま半ば強制的に飲み屋に連行された――のだったか？

記憶が曖昧である所が少々不安だが、身体の訴えかけを見るにどうやら相当飲んだらしいので無理もない。どうしてそんなに飲み明かしたのかは忘れてしまつたけれど。

兎にも角にも、まずは現状を確認するのが最優先である。

「ん……ああ、聖輦船か」

目を開けて、飛び込んできた木目の天井を見て直ぐに理解する。
恐らく勇儀と一輪が運んでくれたのだろう。別に起こしてくれても良かつたのに。

「ほらぬえ、とつとと起き——」

とりあえず私は隣で眠りこけているであろうぬえを起こす為に声をあげた。今まで何度も酒を飲み酔い潰れた仲ではあるが、未だ彼女が私よりも先に目を覚ましたことはない。大抵一輪か雲山が此処まで運んでくれて、私が彼女を起こすのが通例となっている。
だから私は隣を向くよりも先に手を伸ばし

そうしてひよりの頭に触れたのだつた。

「……」

意外にも初めて触った彼女の頭を堪能。サラサラである。
そのまま一分ほどひよりを楽しんだ後、私は更に奥で眠るぬえに手を伸ばす。

「……ちょっと、ぬえ」

「む、むり……頭が……」

そう言つて此方を見もせずに片手を振るぬえの頭を引っかみ、無理矢理此方を向かせる。

面倒臭そうに開けた彼女の目が、次の瞬間見開かれて——

「——どうえ」

翻訳するならば『えつ、どうしてひよりが』と言つた所だろうか。
ぬえは恐る恐るといった様子でひよりに手を伸ばし、何故か頭を一分程撫で続け、次に私の方を見つめてきた。私としては先程のどうえについて追求したい所ではあつたのだが、まずは私とぬえの間で寝息をたてている彼女が夢でないことを確認しなければならないだろう。
どうやらぬえも同じことを考えていたらしい。私もぬえに手を伸ばす。

「……いひやい」

「……うん」

互いにしつかりと抓つた上で、再び私とぬえはひよりに視線を落とす。

そんな私達の事など知らぬと言わんばかりに寝息をたてているひよりの、綺麗な髪飾りを、サラサラの黒髪を、変わらない身長を確認して――

「ひよりっ！」

二人して彼女の寝ている布団へと飛び込んだ。



「それで私の所へ逃げてきたと」

そう一人呟いた私に彼女は何処か疲れたように苦笑した。今の私の言葉で色々と思い出したようで、私にはぬえと村紗の二人から揉みくちゃにされる彼女の様子が鮮明に流れ込んできた。

なるほど、確かにこれは酷い。私はあまりこの身で体験したことはないが、やはり妖怪の力は恐ろしい物なのだと知覚できる。それこそ彼女が一度死にかけて、こうして命からがら逃げ込んでくる程度には。

手元にあつたカップを手に取り、その中で湯気を立てている紅茶を一口。

コトリと置いて私は彼女を見つめる。

「私としては大人しく死にかけていた方が良かつたと思いますよ、ええ。今貴女の情景を読んだ上での結論ですが」

そう答えると彼女はその無表情を少し崩した。それと同時に表情と同じ焦りが流れ込んでくる。

私は続ける。

「こんなこと私に言われるまでもなく分かっているとは思いますが、あの二人は本当に貴女の帰りを待つっていましたからね。長らくその

気持ちを見続けてきた私からすれば、むしろ死んでいないことに感謝すべきだと思いますけれど……それに満更でもなさそうでしたよ貴女』

それは今思い起こしているであろう彼女の感情からしても明らかである。私としては寝ている所に突然自分より体格の良い二人から全力で圧し掛けられ、死にかけても満更ではないという気持ちはてんで理解できない物だが。

彼女はその照れを隠すように、自分の手元にあつたカップに口を付ける。

そこには正しく一人分の生き物らしい恥ずかしさが見えた。

「……便利ですね、その体质。揉みくちやにされている自分と、更に此処で話している貴女、そしてお燐達と遊んでいる彼女ですか。人型で形取るとそれぞれの時点では記憶の共有が出来ないということを除いても、こうして目の当たりにしてみればそんな欠点は霞んで見えます」

少なくとも今日の前で話している彼女の他に、最低でも二か所で彼女は活動しているということになる。一人は聖輦船での二人に捕まっているであろう一人。そしてもう一人は先ほど自身のペツト達と共に動物同士積もる話をしにいったという一人だ。

ちなみに目の前にいる彼女は本体ではない。本体は今はお燐達と共にいる。

私は先ほど初めて本体である彼女が訪れた時のことを思い出した。

『すみません、それ以上近づかないでください』

『私は古明地こめいじさとり、心を読むことの出来る覚妖怪です。ご存知ですか?』

『……っ、そうですか。では搔い摘んでご説明致します……私には貴方たち全員の声が聞こえている、と。これで分かつて頂けるでしょうか』

……今思い出しても頭が痛くなつてくる。

私は覚妖怪であるが故にあまり雜踏を好まない。生き物が近づけば、私が目を向ければ、その人々の心を読むことが出来てしまうからだ。心の声はその思いの強さによつて多少ではあるが強弱がつくし、それが生き物の行き交う往来で数十人分ともなると私の間近で人々が言葉を交わしているのと何も変わりがない。

更に自分はあまり騒がしいのが好きではないときた。

「なので今後私の所へ遊びに来る時は今みたいに一人で来てください。……ああいえ、別に責めている訳ではないです。私としても恐らく一生に一度体験できるかどうかという経験をさせて貰いましたし。……勘違いしないでください、一生に二度も体験したいことではありませんよ」

そんな私の元に彼女が訪れてどうなつたか。

数千を超えるであろう彼等の声が一斉に私へと向かつて流れ込んで来たのだ。

それはまるで世界中の生き物を一堂に集めて私についての意見徵収を行つたかのような嵐であつた。興味、関心、警戒、それに突然近づかないでと言われたことによる悲しみ。彼女達自身が殆ど動物のようないき方であるが故にそれらは素早く簡潔にころころと変わつていくのだ。私と対峙し、彼女が一人になるまでの間一度だつて全員が静かになつた瞬間はなかつた程に。

ちなみに彼女が一人になないのであれば、私は金輪際彼女との関わりを絶つ覚悟すらした。

しかしそれは杞憂に終わつた。他ならぬ彼女自身のお陰である。

「まあ、私としてはまた是非遊びに来て欲しいとは思っていますよ。言つてしませんでしたか？私、動物が大好きなんです。動物としての姿だけではなく思考も私好みですし、もしも許されるなら一人地_{ちれいでん}靈殿に住んで貰いたい位です。……冗談ですよ、冗談。普通に遊びに来て下さい」

本心をありのままに前半部分で伝えた所為か、後半も真に受けて身構える彼女に私は苦笑しながら紅茶に口を付ける。成程、分離自体は造作のないことではあるが彼女はあまりそうすることを良く思つて

いないようだ。……確かに彼女をありのままに受け入れている者たちからすれば、むしろその内の一人だけ——というのはきっとあまり良い気はしないだろう。

そう、だからこそ私はちゃんと言つたはずなのだ。

「ひーよーりー！」

「此処にいるのは知つてゐるんだよ！ 目撃者がいたんだから！」
ビクンと、廊下から響いて来た声に対面に座る彼女の身体が震える。

その感情は焦りと後悔。次いで私に対して助けを求めてきた。

「全く、貴女自身そう思つていたじやありませんか。貴女をありのままに受け入れてゐる彼女達からすれば、その内の一人だけを置いて逃げてくるなんて方法で通用する訳がないでしよう。大体、自分自身を分けて苦痛を代替わりさせようとした所で、相手も自分自身なんだから今度は貴女の存在を売るに決まつてゐるじゃありませんか」

貴女も分離した一人な訳ですから、揉みくちやにされて本体を売ることになるでしょうね。

そうハツキリと告げると、いよいよ彼女は逃げ道を探すべく立ち上がりつた。

その背後から扉を叩く音。

「さとりさん！ ちょっといい？」

「ええ、なんでしよう村紗さん」

答えつつ、私は隣で窓に手を当てる彼女を眺める。

「ひよりが私たちの所に一人だけ残して何処か行つちやつたのよ！ 問い詰めてみたら、私と村紗が落ち着くまで別の所に行つてるつて！」
村紗の代わりに答えたのはぬえだつた。

「此処にくる途中で勇儀に会つたんだけど、ひよりが此処に入るのを見たつて言つてたから」

「なるほど、それで地靈殿ですか」

はめ込み型の窓であるが故に諦めた彼女が小さく勇儀め…と呟くのを聞いた。

「勇儀さんが言うには、きつとりさんとお茶でもしながらやり過

ごすつもりなんだらうつて」

「なるほど、それで私の所ですか」

怖いくらいに当たつてゐる。隣の彼女を見れば今頃は旧都にいるであろう勇儀に対して恨み言を言つてゐる最中であつた。

「それでひより、今此処にいる?」

もう一度彼女がビクンと肩を震わせた。

私はそんな彼女からあふれ出てくる狼狽と困窮を感じ取り、自然と口角が上がつた。

「さて、どうでしようね?……逆に村紗さん達に聞きますが、ここで私がひよりさんは此処にいませんと言つた所で確認もしないで帰りますか?あ、答えは結構です。心を読むまでもなく分かりますので」

扉の向こうが数秒沈黙した。

しかしもうカウントダウンをするまでもなく寸前である。私があえて長々と言葉にして村紗とぬえに問いかけたのは、今横で進退ここに極まれり、といった表情で私と扉を交互に見遣る少女に僅かながらの時間を与える為であつた。彼女との会話は有意義であつたし、何より彼女が無事に二人をやり過ごせたのであれば、そのままもう一度話をするのも悪くないと、心の隅でそう思つて。

そんな私の心境など心の読めない彼女に伝わる筈もなく。

しかし彼女は小声で匿つて、と言つて引き出しの中に滑り込んだ。だああん、と扉が開かれる。

「迎えに来たわよ、ひより!――つて」

「…いない?」

勢い良く扉を開いたぬえと、その背後から顔だけ覗かせた村紗。

私は一人を静かに見遣り、そして私の机の引き出しから此方を伺う鼠を見た。

「なるほど、そういう答えですか。お見事です、動作に迷いがありませんでしたね」

「そういう答えつて…心を読むまでもなく分かつてたでしょーに」
中に入ってきた二人からは見えていない、引き出しの中の彼女に向けた称賛の言葉。しかしそれを先ほど自身に課された問い合わせに対する

反応だと勘違いしたぬえがそう言うので、思わず私は声に出して笑ってしまった。

「二人はその人のことを大切に思つてゐるんですね」

部屋を探索していた村紗も、ひよりが飲み残した紅茶とお茶菓子に手を出していたぬえも意外そうな顔で此方を見た。そうして流れ込んでくる二人分の感情、想い。そして思い起こされる彼女たちの気持ち。

私はそれらを受け止めて、そうして引き出しを引く。

「だから言つたんですよ、私は。貴女は満更でもなさそうでしたし、それに彼女達は貴女の帰りをずっと待つていて。私には心が読めますからね——死にかけたからなんて唯の言い訳で、本当はただ氣恥ずかしかつただけでしよう貴女」

私が手を伸ばしても彼女はもう抵抗しなかった。

軽くつまんで持ち上げた彼女に二人からの叱責が飛ぶ前に、私は村紗に向かつて放り投げた。

「それではぬえさん、村紗さん、後は三人で仲良く本体を探してください。恐らく私のペット達と遊んでいるでしようけれど、早くしないと逃げられてしまうかも知れませんよ?」

そう言うと二人は感謝の言葉を述べながらひよりを片手に部屋から出していく。
扉が閉じる瞬間、村紗の手の中で捕まっていた鼠が一瞬口を開いた。

しかし言葉は紡がれることなく扉は閉じる。

残された私は一人、残り僅かとなつた紅茶を飲み干して地霊殿の中庭に躍り出た三人を眺めた。

「言葉は必要ありませんよ。私、心読みますので」

それは先ほど、彼女が退室する前に言おうとした言葉への返事。

彼女から流れ込んできたのは安堵と感謝の念。

素直じゃないなあ。



「はい、じゃあここ座つて」

ボスンと置かれたのは愛用の座布団。

私とぬえが使用し始めた時期から言えばこの座布団も大妖怪並みの年月をしかも封印抜きで過ごしている筈なのだが、一体どうして完璧なまま形が残っているのだろうか。もしかしたら、長年使っていた所為で私の髪飾りと同じように身体の一部として認識されているのかもしねれない。

……いや、流石に座布団が自分の身体の一部になつてしまふならよいよ私は紫や永琳に相談する覚悟すらある。この調子で私が長年使つている物が私の一部として認識されてしまうのなら、何時かは付喪神か何かと勘違いされてしまいそうだ。

と、そんな風に座布団を眺めていたのにぬえが気づいたのか。
彼女は少し寂しそうに笑つた。

「それ、実はもう三代目なんだ。受け取つてから使い続けて…ひよりが来なくなつた頃に丁度かな？流石に中の綿も潰れちゃつて外側も補修出来なさそうだから捨てちゃつた」

その後に同じ柄のを作つてそれも壊れて三代目、とぬえが言う。
成程、これで一つ疑問が解けた。流石に肌身離さずといった訳でもない唯の座布団がそんなに長持ちする筈がない。ぬえの言う通りこれが三代目なのだとしたら充分納得できる話だつた。

ちなみにそれでも平均して五百年使つてることになるのだが。
寿命の長い妖怪だからこそ確認出来る物の寿命という物は、実はこれくらい長いのかも知れない。

もしそうでなかつたとしても――

「二代目までには、三代目までにはつて思つてひよりを待つてたら

……まあ、やっぱり大事にしちゃうよね」

こんなにも使い手に大切に使われればきっと大往生を遂げるのだと

ろう。

話が逸れちゃつたね、とぬえは言つて私と向き合う。

「それじゃ……おかえりなさい、ひより。随分長かつたじゃん」

それは先ほど合流して記憶を共有した『私』の時に何度も聞いた言葉。

しかし泣きじやくりながら一人してしがみつき、何度も繰り返していた時のおかえりとは違う。それを聞いて漸く私は、目覚めてから今まで心の片隅に残り続けていた後悔が小さくなしていくのを感じた。私は何も伝えられなかつたけれど、ぬえはずつと私を待ち続けてくれていたのだ。

だから私も正面で笑うぬえに対して、出来る限りの笑顔で答える。

「ごめん……それと、ただいま」

意識してするのは得意じゃないのできこちない笑顔だつただろう。けれどぬえは何故か満足そうに頷いて、そうして聖輦船の外に繋がる扉を見た。

「村紗、もう入ってきていいよ！」

そう言つて暫くして、開いた扉から水蜜がひょっこり顔を出した。

「もう？ 早くない？」

「そもそも村紗が気を遣い過ぎでしょ。私とひより、別にそんなに悲劇的な別れ方をした訳でもないんだから。積もる話も言いたいことも聞きたいこともあるけれど、それは村紗も一緒だろうし」

何でもない風にそう言つたぬえ。確かに私たちは涙を流しながら別れた筈だが、彼女にとつてはあれは悲劇的な別れ方には含まれていないらしい。一体彼女の中の悲劇的な別れ方はどれくらい悲しいのだろう。ほんの少しだけ聞いてみたい気持ちはある。

けれど彼女自身がそう言うのであれば今は特に言う事はない。私は二人を待つた。

「うーん……じゃあ私も相席させて貰おうかな。とりあえず、おかえりひより！」

「うん、ただいま水蜜」

そう言つてストンとぬえの横に座つてにへへと笑う水蜜。

二人がそうして私に向いた所で、今度は私の方から話を切り出した。今までのこと、起きてからのこと、娘と別れたこと、今は靈夢と暮らしていること。地上で流行っている弾幕ごつこの話や、水蜜には封印される前に行つた命蓮寺の話、そして聖の封印されているという法界についての話も知つてゐる限り伝えた。

二人は驚き、時に目を輝かせながら私の話を聞いている。特に、人間の娘がいたと知つた時の二人の反応は、きっとさとりであれば椅子から転げ落ちたかもしれない。私は両手で耳を塞ぎながら、大人しく二人が落ち着くのを待つた。

すうはあと興奮を落ち着かせるように息をする二人を見て苦笑。
最初に口を開いたのはぬえだつた。

「私聞いてないよ娘なんて！い、いつ？封印される前？え、じゃあもう会えないの？嘘お……」

そう言つて項垂れるぬえ。しかし、私も何も理由もなしに彼女に伝えなかつた訳ではない。

「うーん……でもぬえ、私に娘がいるつて言つて会わないでいたられた？」

「うつ」

「地上と地底、今でも行き来するのは良くないんでしょ」

「ううつ」

それにきつと『お互い離れ難くなつてしまふ』だろうから。

これが人間のただの友人であれば伝えたかもしれない。けれどあの子は私の娘で、私は母であつたのだ。であれば、私は妖怪とはいえ母としての義務を果たすべきだった。だからこそ、妖怪であるぬえを含めた友人たちには出来る限り伝えないように、そして遊びに来ないようにとお願ひしたのだ。

私はあえてこの一言は胸の内に仕舞つておくことにした。

次に口を開いたのは私の話の後半部分から考え込んでいる水蜜。
「ひよりの娘のこともびつくりだけど、私としてはナズの言つていた法界のことが気になるかな」

『私』の聞いた話によると、水蜜達が封印から目覚めたのは二三百年前。

私が最後にナズーリンから話を聞いた時には、どうやら飛倉の破片と星の持つている宝塔がどうたら……と言つていた筈なのだが、生憎永琳のする話も含めて学の浅い私にはその手の話を聞いた上で他人に説明するのは非常に難易度が高い。

先ほどの話でもそこはある程度曖昧に伝えたのだが、相手は水蜜。聖の封印解除の為の方法があまり良く分かつていないが故に考え込んでしまつてているようだ。心中で謝罪。

「今度星達の所に行つて詳しく聞いてくるよ、二人のこととも気になるし」

「うん、お願ひ。あとは……手紙とかも書いた方がいいかな」

「あ……じゃあさひより、ついでにマミゾウのことも見てきてよ。流石に千年ともなると、私も多少は気になつちやうんだよね」

命蓮寺はともかく佐渡島。気になつてはいたが、何故。

水蜜と私が首を傾げる中、『それに』とぬえは神妙な顔で本音を吐露した。
〔封獸〕にはもうウンザリ。正直今すぐ地底を出てぶつ飛ばしに行きたい

「ああ……そうだね」

息巻いて手のひらと拳を打ち合わせるぬえを見て苦笑する水蜜。つまりこういうことだ、と水蜜は語る。

「地底だとぬえつて鬼達と同じ位の古株だから皆苗字で呼ぶんだよね、封獸さん封獸さんって。字だけが伝わった人には封獸さん。それ位なら良いんだけど、ぬえと親しい古株の鬼なんかは封獸のぬえつて」

「だあーれが惚け者だ！ 鬼に言われたくないやい！」

その怒号に私も水蜜も苦笑。呼び方の発端は果たしてどちらの鬼か。

まさかマミゾウもそんなつもりで付けた苗字ではなかろうが、こと地底においては彼女の付けた苗字は良い意味でも悪い意味でも浸透しているらしい。これでは今更変えた所でもう取り返しづかないのでは——そう思つたが、しかし今のぬえをしてそんな残酷なこ

とを伝える勇気はなかつた。

それを誤魔化すように口を開く。

「じゃあ、命蓮寺と佐渡島の様子は見てくるとして……一人とも、その後はどうするつもり？」

「後？」と二人して首を傾げる。どうやら何も考えていなかつたらしい。

「ぬえはともかく、水蜜は地底より命蓮寺に居た方がいいと思うけど」

「え、私も地上に出たい」

「行きたい行きたくないの話じゃなくて、聖復活の為についてことでしょ」

即座にぬえにツッコミを入れる水蜜。『あ、そうか』と納得するぬえ。

仲良くやつているようで何よりだ。

「結局ぬえもマミゾウに用があるならどつちかが地上か地底に行かなければいけないけどね」

「……それなんだけど、今つて地上と地底の行き来の約束つてどうなつてるんだろ？私が勇儀達と地底に来た時には駄目つて言われてたけど、萃香は勝手に出て行つたし」

遠回りな言い方をしていることに気づいてくれたのはぬえだつた。恐らくは水蜜も伝えられているとは思うのだが、地底を封印された妖怪たちが過ごす場所として使用するにあたつて紫は管理人であつた四季映姫と『地底から絶対に封印された妖怪達を出さない』という約定を結んでいる。人間が封じ込める意図で地の底に送つたのだから、無遠慮に解除して地上へ戻すというのは見過せないとということだ。

無論私や水蜜、ぬえとしてもこの約定に異論がある訳ではない。

でも萃香出て行つちゃつたし。

「紫に聞かないと分からなければ、もしかしたら閻魔様の言葉が関係してるのかも」

「閻魔様？閻魔様つて……あれだよね、地獄の偉い人」

「こそ、前に地底を貰う時に一回だけ会つたんだ。えーと、何て言つて

たかな……確か——

『もし地上で人と妖怪が共存出来るようになれば、この地底に封印された妖怪を留める必要もなくなるでしょう。それを貴方達が成せば、ですか』

確かにこのような事を言っていた気がする。

であれば今回萃香が地上に出ることが出来たのは、地上で人間と妖怪が共存出来るようになつたからということになるのだろうか。

二人に視線を送つてみるも、二人ともさつぱりという風に肩を竦めた。

「じゃあまずは紫に聞いて、それから命蓮寺と佐渡島。それからの結果次第だけど、地上に出れるようだつたらとりあえず水蜜と一輪達だけでも地上に……だね」

地上に出れるとしても聖輦船を含めた水蜜達をどうやつて地上に送り出すのかという問題がある。

ちなみにこの問題は予想だにしていない形で解決することになるのだが、それはもう少し後の話。

異議なーしと声を揃えた二人を見て私は立ち上がった。

「じゃ、早速行つてくる」

「待つて待つて、まだ手紙書いてないって！」

私の言葉を聞いて慌てて立ち上がる水蜜。

手紙のことをするつかり忘れてしまつていたのでなんだか申し訳ない気持ちになつてしまつた。

「そうしたらひよりとちょっと旧都を見てくるねー！勇儀にもお礼言いたいし、あとは私の傑作建築物も見せてあげなきや！村紗ー、風穴前で集合ね！」

そこに間を入れずにフォローを入れてくれたぬえに心の中で感謝。もしかしたら唯彼女の作つた傑作建築物を見て欲しかつただけなのかも知れないが、お陰で多少申し訳なさが薄れた。

了解と声を上げながら遠ざかっていく水蜜を二人で見送る。

「じゃあ行こつか」

ぬえは嬉しそうに立ち上がりつて私に手を伸ばした。



そうして風穴前には数人の人だかりが出来ていた。

「それじやこれ、皆を代表して私と一輪から！こっちが星宛てで——

「そしてこっちがナズーリン用ね。ひよりちゃん、お願ひします」

「ん、分かつた」

急いで手紙を書いてくれたのだろう、息の上がつた二人から手紙を受け取り仕舞う。

「悪いねひより、私達はそういう氣の利いた物はない組だ。とりあえず萃香にたまには帰つて来いつて伝えておいてくれ。ぬえの作った萃香の小屋が寂しそうにしてるつてな」

「私からはそんなに具体的に伝えて欲しいことはないんだけど……とりあえずマミゾウにはありのままの私の怒りを伝えておいて。あと萃香には、少し改造して快適にしておいたよつて」

自称気の利いた物のない組である勇儀とぬえからは、二人の友人たちに込めた言葉を受け取つて。

萃香の家のことについては触れないでおく。いざれ語らざるを得ない日もあるだろう。

私は一人一人と顔を合わせて、そうして皆に背を向けた。

「それじや行つてきます」

『いつてらつしやい！』

背中から押された勢いのままに、私は思い切り風穴に向かつて上昇した。

『目に見えぬ約定』



「ん、早かつたわね。お帰りなさい」

地底に続く風穴を抜け、妖怪の山を出て真っすぐに博麗神社へと飛翔した戻つた私を出迎えてくれたのは参道を竹箒で掃除している靈夢だった。手にもつてゐるそれは博麗神社に備え付けてあつた竹箒とは少し違う新しめの……多分、魔理沙の箒である。

それで何の気もなしに石畳に散つた葉を片付ける靈夢を見て、私は居間が縁側で寝ているであろう魔理沙に心の中で合掌をしておいた。葉を散らさないように静かに靈夢の前に着地。

彼女も手を止めて私の方を見た。

「ただいま」

「てつきり三日位ゆつくりしてくるものだと思つてたわ。どう? ちゃんと会えたの?」

「うん、お陰様で」

じやあいいわと言つて靈夢は集めていた木葉を参道の脇に散らす。
「そういうえば、ひよりが出た後のお昼に慧音が来てたわよ」

「ん、寺子屋の人だつけ」

慧音……確かに、妹紅と再会を記念した祝宴をしていた時に聞いた名前だつたか。

『それより問題なのは慧音だよ。話しただろ? 人里で教師をしてる奴なんだけど、ひよりと会うのを死ぬ程楽しみにしてたんだぜ?』

妹紅の話だと半人半妖で、更には人里で寺子屋で先生をしているらしい。

何故そんなに私に会いたがつてゐるのは分からないが、どうやらあの日慧音は私と妹紅の再会を邪魔しないようにと肝試しに来ていた

靈夢や紫の相手をしてくれていたらしい。

本来ならばその後戻つてくる筈だつたらしいが何故か戻つて来ず。あの日は外から声を掛けた慧音と顔だけ出して答えていた妹紅の会話の一部しか拾うことが出来ず結局会うことは出来なかつたのだ。

それが昨日のお昼、態々博麗神社に来てくれていたのだという。

「……怒つてた？」

「なんで怒るのよ。ふつーにひよりに会いに来たつて言つてたから、今日明日くらいは多分帰つて来ないつて伝えただけよ……まあ頃垂れるくらい残念がつてたけど」

そう言つて何かを思い出し苦笑する靈夢。

彼女がそんな風に同情するということは余程慧音は落ち込んでいたのだろう。

「寺子屋……」

「そ、人里の中央に近い横長の建物。何だつたらこつそり授業を受けてくると良いんじやない？この近くの湖でうろちょろしてゐる氷精達も参加することがあるから、席は余分にあるだろうし」

そう言つて此方を見る靈夢の顔は悪戯心に満ちた笑みを浮かべている。

成程、飛び入りで参加も出来るのであればそれも楽しそうだ。これ以上慧音の方から態々来てもらうのも申し訳ないし、それに寺子屋というのも興味がある。靈夢の悪戯に乗るかは別としても、それは此方から赴くには十分な理由であつた。

一帯の掃除を終えた靈夢は良し、と呟いて神社へと歩き出す。

「まあ慧音の件はひよりに任せるとわ。それよりもご飯にしましよう、早くしないと魔理沙が飢え死にするわよ」

「ちゃんと二人が食べても三日は大丈夫な様にしておいたと思うんだけど……」

「魔理沙は朝から『ひよりが帰つてくるかも』の一点張りで林檎位しか食べてないけど？白炊を殆どしないアソツにとつてひよりの料理は致命的過ぎたのよ。才能つて残酷ね」

私は慌てて背後を見る。既に夕日は落ちかけて夜になろうかとい

う時間だ。

「靈夢、私は先に戻つてゐるから」

「ええ、私もすぐに行くわ。水だけ汲んで来るわね」

あとこれだけ魔理沙の横に転がして置いて頂戴、と言われて手渡された箒を掴んで飛翔する。

出発前にサムズアップと共に見送つてくれた魔理沙の姿が脳裏に……いや、あの時彼女はちやぶ台の向こうで寝転がつていて私の側からは掲げられた手と足しか見えなかつたか。思いの外信頼度の低い魔理沙の『任せろ』のサインに内心で愕然とする。彼女の言を信じる時は、もしかしたら正座で帽子を取り敬語を使うレベルではないといけないのかも知れない。

しかし差し当たつては二人の為に夕飯を作ることが先決だ。聞きたいことは幾つかあつたけれども、本当に魔理沙が餓死したら困る。二人とも育ち盛りの年齢なのだ、先ほどの靈夢の林檎一個は冗談だと思いたい。

居間に入つた私は結局それが冗談ではなかつたことを知る訳だが。



「はー、生き返つた。ご馳走様！」

「ん、お粗末様」

隣でそんなことを言つて腹を撫でる魔理沙を横目で睨む。

紫が定期的に食料を持ってきて、且つひよりも毎日必要な分だけ調達してくれている。それでも朝から晩まで入り浸つてご飯だけ食べるというのは如何な物だろうか。彼女が逆の立場であれば絶対に小言の一つや二つは言つたであろう、故に私もそんな思いを込めて魔理沙を見た。一瞬不思議そうな顔で此方を見た魔理沙だったが、私の視線が意図する物をすぐに感じ取つたらしい。

食器に手を伸ばそうとしていたひよりを手で制して魔理沙が腰を

上げる。

「さつて、じゃあ今日は私が片付けるか」

言うが早いかそそくさと食器を片付ける魔理沙を見て、私と魔理沙の無言のやり取りを見ていたらしいひよりが苦笑する。彼女にとつては一人分多く作る手間よりも、一人分多く食卓を囲む方が良いから気にしていないという風だが。

それはそれ、これはこれである。食べた以上は働いて貰う。

「魔理沙はともかく、魔理沙の箒が代わりに働いたと思うけど」「んー？ 私がどうかしたかー？」

台所で洗い物をしていた魔理沙が耳聴く聞きつけて顔を出した。

「何でもないわ。あんたの住んでる森について話をしてただけよ」「……おう？」

少し疑問は残つたようだが、再び洗い物を再開するべく顔が引っ込む。

そして再び顔が出てこないことを確認して、私はひよりに目だけで魔理沙の箒のことは言わないで置くようにと伝えた。私が縁側で魔理沙と共に昼寝をしていた時に、掃除に使う竹箒を取りに行くのが面倒で魔理沙の箒を引っ掴んで出て行つたのだ。当然魔理沙はそのことを知らない。

良くも悪くも周囲の人妖から普通の魔法使いと呼ばれている魔理沙の箒は、しかし彼女の中の魔法使いとしての誇りのお陰もあってか普通ではないようだ。実際、先代の頃から神社で使つている竹帚よりも驚くほど綺麗に掃除することが出来た。まあ、本人に言える話ではないけれど。

ひよりもそこまで魔理沙の肩を持つ氣はないらしく静かにお茶を啜る。

程なくして洗い物を終えた魔理沙が戻ってきた。

「もう十月つてことを抜きにしたつて、此処の水は冷たすぎるんじやないのか」

手をプラプラと振りながらちやぶ台に戻ってきた魔理沙は、何故か座つたちやぶ台の足元から空気を掴み、自身の膝に掛ける動作をし

た。私とひよりが訝し気な様子でそれを見ていると、どうやら無自覚だつたらしい魔理沙がハツとした表情で私とひよりを見る。

そして次第に赤みを帯びていく頬。

「……おい霊夢ー、そろそろ炬燼を出しても良い頃なんじやないのか？」

「ああ、成程。

「こたつ？」

「もしかしてひよりの居た頃にはなかつたのか。炬燼つてのはえーと、電気やら炭やらで机の下を暖かくしてくれる奴だ。こう、布団を掛けてな……わかるか？」

「……あんまり」

その説明でこたつを知らない人間に理解して貰える方が可笑しいだろう。

「ま、見せた方が早いわよこういうのは。修理に出しているから今はないけど」

「霖之助の所か？」

「あの人じや直せないとと思うから河童の所に回されるとして、戻つてくるのは十二月頃かしら」

それを聞いた魔理沙はいよいやり切れなくなつたのか、深いため息を吐いてちやぶ台に倒れた。

「うう、くそ……二ヶ月は家で過ごすか？いやでも、ひよりの飯は捨てがたいし……とはいえ、今後の寒空を毎朝飛んできてたら寿命が縮んじまう……」

そうではなく、どうやら暖かさと食を同時に解決する方法を探していたらしい。

呆れた魔法使いである。私とひよりは肩を竦めて魔理沙から視線を外した。

そうして家といえば、とひよりが話を切り出す。

「一人は紫の家つて知つてる？」

そういえば思い当たる節がない。私は自身の頭の中を探る。

「紫の家？」

そういうれば思い当たる節がない。私は自身の頭の中を探る。

普段妖怪退治を依頼する時は紫の方から博麗神社に来ていたし、修行だなんだと言いながら私の様子を見に来る時も彼女の方から。食料を定期的に持ってきてくれる時は、最近ではそもそも紫ではなくて藍である。それも時たま藍であるのは、果たして紫の怠慢なのか二人の従者として藍の仕事なのか。

私の沈黙を否と受け取つたのか、ひよりは少し考えて口を開く。

「少し紫に聞きたい」ということがあって。前は旧地獄と地上の行き来つて禁
止されていたんだけど、今はどうなっているのかな」

その言葉を皮切りにしようもないことを呟いてい

を起こした。

三

「そういえばそうね……」

朝餉だけ食べてそぞくせと居なくなつた鬼の姿を脳裏に浮かへる

彼女——伊吹萃香が地底から地上へと出てきて異変を起こしたのは今から三ヶ月程前。吸血鬼や亡霊が起こした赤かつたり白かつたりする異変の解決祝いとして行われた宴会の熱が丁度引いてきた七月頃である。なんとはなしに開催した筈の宴会が何故か数日置きに行われて続けて、しかも次第に参加者が増加していくというものであつた。

いやまあ、何回目かまで誰も疑問に思わないのも問題ではあるのだ
が。

流石にこれはおかしいと、参加者がそれぞれ解決に乗り込んだ直後に伊吹萃香は自分から姿を現した。それぞれが伊吹萃香と対峙した日にちがバラバラだつた故に皆から話を聞いてみたが、どうやらあの鬼、対峙_{退治}した全員に対しててんでバラバラな目的を伝えていたらしい。桜が短くて残念だつたからとか、賑やかな宴会が見たかつたからとか、あるいは殴り合いたかつただけだつたとか。ちなみに私は後者である。

博麗神社に居候として住んでいる彼女だが、その件については何度聞いても曖昧な答えではぐらかされてしまうが故に真相は闇の中

だつた。少なくとも以前までは。

——だが、地底と地上でそんな条約が結ばれていることは知らなかつた。

「そんな決まり事があるんだつたら、そもそもただ宴会をさせたり賑やかな様子を楽しみたいってだけで地上に出てくるのが変になるよな」

「そうね、私もその事については初耳。とはいえて今まで興味のある話ではないけど……ひよりの疑問を解決するには根本的に考え直した方が良さそうね」

「根本的？」

ひよりが首を傾げるのも無理もない。彼女には萃香が起こした異変については概要しか伝えていないのだから。それも『萃香らしいね』の一言で終わらせていた辺り、彼女達にとつてはそれほど不自然なことではないようだ。

だから推理するのは私と魔理沙。今度は二人から視線を外して空を見る。

「……あの異変、誰が参加してた？」

「私とアリスだろ？ 紅魔館の奴らと冥界の二人、それに妖怪の山の鳥天狗も取材に来てたか。

……あとは、えーと確か、一回だけ阿求と慧音も見に来てたと思うぜ」

私の独り言染みた呟きに反応した魔理沙。

「その辺りについては特に問題ないわね。夜中に慧音がいるとはいえ阿求が一人は少し気がかりだけど、まあ多分今回の件とは関係ないんじゃないかしら」

「いや、お前が阿求に過保護過ぎるだけなんじゃないのか」
無視。余計なノイズはカットするに限る。

だがその僅かな私と魔理沙の冗談めいた遣り取りの間に、ひよりが声を上げた。

「ん、その宴会つて紫は——」

「……ああ、そこだな」

「そう、紫は参加していなかつた。……正確には、異変として始まる前の宴会に、結構な人妖の前に現れたみたいだけど」

「私は後で何かを漬けようとしてた焼酎を、靈夢は供えてあつた御神酒をだつたか？ 皆それぞれ何か食料系を持つてかれたみたいだつたな。結局宴会では出てこなかつたし」

そして全ての人妖は異変解決の為、一度は紫と出会つてゐるのだと
いう。

「じゃあその辺りが焦点か。即ち『どうして萃香が人妖を一堂に会したのか』『どうしてその場に八雲紫がいなかつたのか』……どうしてだ
と思う？」

「本当の理由を話していないなら、異変の時に話した理由は全て嘘つ
てことでしようね。残つて いる有力な理由は『地底と地上の行き來の
約束』の為よ」

だが、それらが何を意味するのか。私たちの持つて いる情報では此
処が限界だ。

しかしここに一人、更に踏み込める可能性のある人物がいる。

ひよりは私たちの話を聞くや否や立ち上がつた。

「二人ともありがとう。少し紫の所へ行つてくる」

「もしも紫が家にいるんだつたら、家を探すよりも藍を探した方がいい
いと思うぜ。この時間なら橙(マヨヒガ)と迷い家にいると思うから——ひより
！ 妖怪の山の麓、人里寄りの場所の中腹辺りだ！」

「あんたよく覚えてるわねそういうの……私には到底真似出来そうに
ないわ」

何はともあれ結論は出た。私達に背を向け縁側へと向かうひより
に声を掛ける。

「ま、ただの食後の雑談として話に出ただけだから報告は任せるわ。
萃香も紫も別に意味もなく理由をはぐらかす奴じやないし。もしも
話すべきじやないと思うならそのまま胸に秘めておいて」

分かつた、といつて縁側から夜空へと飛び立つたひより。

不服そうに此方を見る魔理沙を無視して、私は彼女が視界から見え
なくなるまで見送つた。

「さて、じやあ片付けも終わってるんだし私は寝るわよ。アンタはどうするの？泊まつてく？」

「うーん、折角だし私としては真相を知りたかつたんだが」「どうやらそれが不服だつたらしい。私は魔理沙を見ることもせずに言葉を繋ぐ。

「そ、じやあ聞けばいいんじゃない？もし二人の目的が酒に酔つた魔理沙の行動観察日記をつけることとかだつたらその日記そのまま阿求に渡してあげるから」

寝室への襖を開けて中に入り、そして明かりを点けて襖を閉じる。

押し入れから二人分の布団を取り出して、とりあえず自分の分だけ敷いて中に潜り込んだ。何も問題はない。あとは全自动式の白黒魔法使いが全てやってくれるだろう。

数秒を待たずして襖が開かれた。

「くそっ、一つの真相を闇から暴くよりは一つの真相を闇に葬る方が良いに決まってるだろ。世の中は知らなくていいことの方がが多いんだ」

特に私の悪醉いした姿とかはな、と言つて魔理沙は私の用意した布団を敷き始めた。

程なくして明かりも消えるであろう。私は目を瞑つて想いを馳せる。

自分を隠したままにしがちな二人の友人に――

真相

八雲紫と伊吹萃香



「紫、萃香。今ちょっといい？」

二人で縁側にて酒を酌み交わしていた時に突如背後から聞こえた声。

振り返れば、そこには見知った黒衣の少女――ひよりの姿。彼女は

私の家の場所も来る方法も知らない筈なのだが……と、彼女の更に背後にて私達の様子を伺つてゐる狐と猫の姿を捉えた。

ああ、成程。

「ひよりを此処に連れてきたのは貴女ね、藍」

式神に對して使う事の出来る言靈を飛ばしてそう声を掛けた。

程なくして申し訳なさそうな声が返つてくる。

「申し訳ありません、一応指示通りに弾幕ごっこで戦いはしたのです

が」

「驚いた、まさかひよりが弾幕ごっこで勝つだなんて」

一瞬だけ沈黙。迷つたらしい藍のうめき声が聞こえた。

「いえその、先に橙と遊んで貰いまして。その時に見事に花を持たせてくれたというか」

その言葉を聞いて私はとうとう笑いを堪えられずに口元に笑みを浮かべてしまつた。正面で私と萃香を見据えるひよりが怪訝な顔をするが、その程度で抑えられる物ではない。成程、万全だと思つていたがまさかそういう落とし穴があるとは思つてもみなかつた。

そもそも今日、私も萃香もひよりと会う予定はなかつたのである。それは私たちが昨日から常に彼女が地底に向かう様子や、地底の面々と再会する様子をスキマから覗き見ていたからだ。

この覗き見ともいえる行為を誤魔化す為に萃香は今日の朝まで神社で過ごし、朝食を食べてから此方に来ている。その後にこうして覗き見た内容を肴に私と酒を酌み交わすことを約束して。

だからこそ、藍にはひよりが来たら弾幕ごっこで追い払うように指示した。実際弾幕ごっこをなら藍が勝つだろう。しかし橙となら本來はひよりが勝利する。

そして私と対等の友人であり、藍が尊敬するひよりに勝てば橙がどうなるか……想像に難くない。

「ちよ、なんでひよりが……おい紫！もう既に色々と計画がご破算なんだが！」

そして藍からの報告が聞こえない萃香は小声で私に声を掛ける。

既に私の中では解決した疑問ではあつたのだが、萃香の為に口を開

いた。

「ふふ、どうやら最後の最後で読みを誤つたみたいね……地底でぬえ達と地底と地上の約定について話すことも想定内、戻つて靈夢や魔理沙達に私の家について聞くことも想定内。ただ――」
靈夢や魔理沙がひよりの為に知恵を絞つたこと、それは私の想定外であつた。

二人のことだからてつきり萃香の起こした異変の詳細なんてとうの昔に忘れていたと思っていたのだ。それも多くの人妖が集まり一日とて同じ様相を見せなかつた宴会の異変である。ひよりと共に過ごし、仲良くなる上で二人にも『変化』が訪れたということか。

そして理由は兎も角、ひよりは私と萃香の予想を裏切つて目の前に立つて いる。

「――こうなつた時点で私と萃香の今回の企みは失敗ね」

「くう、嘘こそ吐いちゃいないが前回の異変もこの二日間のことも鬼としては大分ギリギリだつてのに……しようがない。甘んじて受け入れるしかないか」

落胆する私たちを無視してひよりは縁側へと座る。

そうして萃香が振り返つた際に置きっぱなしにしていた瓢箪に口をつけた。

「……」

瞬間訪れる静寂。私と萃香は息を呑んでひよりを見守る。

それはまるで自分たちが重ねた罪に対する裁判判決を待つようであつた。

コクリコクリと小さく鳴つていた喉が止まり、口が瓢箪から離れて

「最初から全部説明して」

あ、終わった。

据わつた目で此方を睨むひよりを見て、萃香もきつとそう思つたことだろう。

だから私は会いたくなかったのだ。

紛れもない本心である。最後にあつた一千年前からその気持ちは変わつていない。

だから私は目前にいる彼女から逃げるよう視線を外した。開け放された部屋に縁側から差し込む日の光。風情を重視する従者が庭に備え付けた池と鹿威しが微かに音を此処まで運んでくる。恐らくは池にいるであろう何かの生き物が水を撥ねる音、お茶を淹れるよう頼んだ橙がパタパタと廊下を移動する音、ほのかに香るお茶とお茶菓子の香り――

「そんなに私が苦手なら、最初から逃げていれば良いでしよう」

無論そう出来るならそうしている。そう出来ないから私は正面に座る彼女を見た。

「お久しぶりですわね、閻魔様。旧地獄で会つて以来かしら」

「ええ、その節はどうも。その件についてだけは地獄を代表する者として妖怪の賢者に感謝を」

四季映姫はそう言つたが、その声音と視線には感謝の念など欠片もない。私の頬が引き攣つた気がする。

程なくして、私と閻魔の間にはお茶とお茶菓子が置かれた。

「……とりあえずはお茶菓子でも如何？自信作ですよ」

「自信作ですか。人から奪うという行為の結果得た作成物という意味では、まあ確かに自信作ではあるのでしょうか。強奪に自信を持つてい

るのであればですが」

そう言つて此方を睨む四季映姫。バレている。完全に、何もかも。萃香が異変を起こした時、私たちには二つの目的があつた。一つは、文字通り萃香が異変を起こし人妖が一堂に会する場を設けること。もう一つは、繰り返す宴会によつて持ち寄る物を消耗させ、幻想郷の人妖が持つてゐる様々な秘蔵の品を半ば強引に手に入れるというものである。

そして今四季映姫の前に出されているこれは、魔法の森に住む人形遣いお手製のクッキーである。

「それは言つても口持ちするものでもないし、作つた本人の為にも駄目になつてしまわない内に食べてしまうのが最善だと思うのだけれど? ほら、こんなに美味しい!」

「今からでも早くはありません。地獄に落ちませんか?」

「まだ判決を出すには早いのではなくて? 挽回の余地くらいあると思うけれど」

もう手遅れですよと言つて溜息を吐いた映姫。

その右手が魔女特製のクッキーを掴み口に運んでいった所で、私は内心で歓喜する。

これで同罪。

「……なんですかその目は」

「いえ、結局食べるのだなあと」

「食べますよ、ええ食べますとも。確かに現状これは食べてしまう他ないでしよう。私が叱り貴女が謝つて作った本人にクッキーを返した所で、もうこのお菓子の行き先はゴミ箱以外ないでしようから」

少なくとも私が本人ならそうします、そう言つて映姫は此方を見た。

「さて、雑談はこの位にしておきましようか。これ以上貴女の罪を探した所で判決が変わる訳でもなし。何度でも言いますが私は暇ではありませんので」

「あら、てつきり雑談をしに来た物だと思つたからお茶菓子まで出したのに」

あと数分遅ければ橙の胃の中に行く予定ではあつたが。

一瞬映姫の視線が氷点下のような鋭い物に変わったが、気づかないふり。

少しの間を置いて彼女の口が開く。

「今回伊吹萃香が地上へと戻ってきた件についてです。覚えていないとはいいませんよ」

そりやあ勿論、今も結託中です。

「勿論覚えてますわ。『封印されていた妖怪達は地上へ出さないようにする』……これが、かつて旧地獄を貰い受ける際に交わした約定で間違いないでしょう？」

「ええ、その通りです」

「そしてそれと同時に『もし地上で人と妖が共存出来るようになれば、この地底に封印された妖怪を留める必要もなくなるでしょう』と、闇魔様は確かにそう言つたわね」

「……それが今だとでも？」

訝しき目で此方を見る四季映姫。私は右手を持ち上げて、静かに降ろした。

「今だと言つたのよ」

彼女にも見えるように開かれたスキマに映る大宴会の様子。

ワインを嗜む吸血鬼の主と人間の従者が、鳥居にしがみついて眠る白黒の魔法使いが、嘘を吹き込む亡靈とそれを信じる半人半妖の二人が、その様子を呆れたように見守る巫女が、それらを記録しようと、記事にしようとして樂しむ烏天狗と人間の少女の姿が。

そこには正しく人と妖の区別があつて、しかし隔たりはどこにもなかつた。

私は横目でそれを見つめ、そして言葉を紡いだ。

「……システムとしてはまだまだ不完全。全ての人や妖怪が従つてくれている訳でもない。それでもスペルカードルールで戦つた者たちがこうして過ごしているのを見て、私は確信したのよ」

この先どのような異変が起こり、どのように解決されるかは分からぬ。

それでもそれぞれに歩み寄ろうとする者たちが居てくれる限り、きっともう大丈夫なのだと自信が胸の内にあつた。不満を持つものが異変を以て主張し、それに対してもスペルカードルールで以て決着をつける。解決した後は、双方に不満が残らないように負けた方が勝った方に譲歩する。そうして擦り合わせていく内に、少しづつ様々な者たちが共に生きることが出来るようになると。

期待と信頼の入り混じった感情をそのままに――

「約束するわ、闇魔様。この景色が特別なものではなくなるということを。今までのよう、これからも、こうやつて少しづつ人妖の輪が広がっていくことを」

そう言い切つた私の心境は果たして上手く隠せていただろうか。

本当のところを言えば誇張表現も甚だしい。紅霧異変や春雪異変の結果に嘘偽りはないが、萃香によるこの異変は宴会を行わせる後押しにもなっている。参加者の純粋な気持ちから生まれたものであるとは正直言い難いのだ。

それでも私は彼女達に賭けた。

歴代でも怠け者の博麗の巫女と、普通の魔法使いの少女に。

「だから闇魔様、チャンスを下さいな。世界は変化したということを確かめるために。かつて人々と対立し地底に封印された妖怪達が、今この幻想郷で受け入れられることを証明する機会を――」

彼女達を中心として、地底の妖怪達は地上でも上手くやつていける筈だと。

私はそう言つて四季映姫の瞳を真つすぐに見つめた。

「――で、本当のところは?」

「皆が美味しそうなものを準備してたから、つい欲しくなっちゃつて……」

「私がいない間に地上の酒がどんな味になつたのか知りたくない

……

そして現在、私と萃香は正座させられていた。

無論、四季映姫との会話の内容は全て話した。萃香の異変は映姫に人と妖が歩み寄つていけることを証明するためのものであつたこと。人形使いのクツキーはとても美味しかつたこと。映姫も食べていたので彼女も同罪であることも。

割と強めに頭をはたかれた。

そして萃香のことも軽く叩いた彼女は深く、深くため息を吐いた。

「あんまり変な暗躍ばかりしていると靈夢たちに嫌われるよ」

そう言つて苦笑するひより。だが、その声音はどことなく嬉しそうだ。

「……まあそうよね。普通に萃香が異変を起こしていれば、その解決の流れで宴会自体はしたでしようし」

「奪つた分は次の宴会でしつかり返しておくさ。当然ひよりにも手伝つてもらうから覚悟しといてくれよ」

そんな調子の良い萃香の言葉に頷くひより。

普段であれば嫌、と即答しそうなところだが。やはり地上と地底の行き来に関する取り決めが撤廃されたことで内心浮かれてしまつているのだろう。

私も同じ気持ちだった。

「宴会の準備もいいけれど、地底の妖怪達の進出方法についてもちゃんと考へて頂戴ね。閻魔様と約束した以上、靈夢たちと地底の妖怪とは仲良くなつて貰わないと困るんだから」

逸る気持ちを抑えてそう言うと、二人は早速地底の面々について話を始める。

鬼かぬえか、村紗達はどうだ。船ごと地上に出すのも面白いかも知れない。

そんな風に話す一人を見て幻想郷がまた一步完成に近づいたような気がした。

◇

「……いいでしょう。条約は撤廃、今後は貴女の判断に委ねるとします」

「どう言つて席を立とうとする四季映姫に紫は思わず声を掛けた。

「どういう風の吹き回しかしら」

相手が相手なら不機嫌になりそうな言い方だつたが、閻魔は搖るがない。

「意外でしたか？」

「……正直に言えば少し、ね。勿論そういうように計画はしたし勝算はあつたけれど、ここまであつさりと許可が出るとは思つてなかつたわ。追加の約束の一つや二つは覚悟していたのに」

「そうですか。なら——」

「今回の取り決め撤廃は当然の結果よ。意外なことなんて一つもないわ」

自ら掘つた墓穴を即座に埋めた紫に、映姫は小さくため息を吐いた。

「約定については前回のもので十分です。貴女と貴女の理想郷が、人の世のルールを壊すようなものではないことは一千年をかけて証明されました。その信用に基づいて、以前取り決めた約定はもう不要であると判断したまで

それは決して個人的な感情ではない、合理的な閻魔故の判断だった。

実際最も世の中のことを知つているのはそこに住む人々ではなく、その者たちに裁きを行う閻魔大王であるというのは不思議なことではない。四季映姫という閻魔大王もまた、一千年前から人と妖怪について学び、移り変わる時代の常識を見定め、そして認識を改めたということである。

放された言葉に面食らつている紫を無視して彼女は立ち上がった。

「では、私はもう行きます。アリス・マー・ガトロイドには貴女からお礼を伝えておいて下さい。私が幻想郷^{ヤマザナドウ}の閻魔になつたとはいえ、今はまだ自由に歩き回れるほど仕事に慣れている訳でもありませんので」

「——え？」

「ああそれと、今後の貴女の行いは私が裁く人妖からも筒抜けになるので、その点も注意しておくように。地底の妖怪達が地上で大暴れなんてしたら……どうなるかは言わずとも良いですね」

放された言葉に狼狽している紫を見向きもせず、四季映姫はそのまま紫の視界から消えていった。

「……」

後に残されたのは八雲紫、ただ一人。

大局的に見れば今回の会談は八雲紫の勝利である。そもそもおいて紫の目的は地上と地底の行き来に関する取り決めの撤廃であり、友であるひよりとその友人たちの活動の後押しをすること。映姫に撤廃を宣言させた以上、紫の目的は十二分に達成されたと言える。だが、しかし――

「……あれ、これ以前より私の責任重くなつた？」

試合に勝つて勝負に負けた妖怪の賢者の姿がそこにあつた。